第Ⅱ部　カミノハナ古墳群出土遺物の再整理報告

第１章　位置と環境

カミノハナ古墳群は、熊本県上天草市松島町合津6276・6278番地に所在する。そこは、天草諸島の北部、大矢野島と上島にはさまれた狭い海峡に浮かぶ永浦島の東端にあたる（図５－１）。大小30あまりの島々が散在するその海峡は、宮城県松島、長崎県九十九島とともに日本三大松島ともうたわれる景勝の地である。永浦島は、そうした島々のなかでももっとも大矢野島に近く、その南端とは天草五橋のうちの２号橋で結ばれている。また、永浦島の南には天草松島の小島が点々と連なり、天草五橋はそれら小島の２つと前島を経由して上島へと至っている。

永浦島は、面積0.79㎡の東西に長い島である。海岸線に丘陵が迫るが、島西側の南岸にはわずかな平地が存在し小さな集落が営まれている。一方、カミノハナ古墳群が立地する島東側には平地は存在していない。

カミノハナ古墳群は永浦島東端の丘陵上に位置し、その標高約30mの頂部から南へ下る尾根筋上に築かれた８基の円墳で構成される。今はうっそうとした樹木に覆われまったく見通しがきかないが、最高所にある１号墳の周囲を切り開けば、その東には柳ノ瀬戸をはさんで維和島の南端、あるいは大矢野島の南岸を臨むことができるだろう。つまり、カミノハナ古墳群は、大矢野島の南にひろがる柳ノ瀬戸を西進してきた船上の旅人が真正面にみることのできる場所に築かれているのである。

カミノハナ古墳群がそのような場所に立地する理由は、周囲にある他の古墳とともに考察されるべきである。後述するように、カミノハナ古墳群は古墳時代中期後葉、５世紀後半に造営が開始された古墳群であるが、当該地域にはこの時期あるいは少し以前に多くの古墳が築造されているのである。

たとえば、カミノハナ古墳群から東にみえる維和島南端には装飾古墳として著名な広浦古墳が、また大矢野島南東端には精緻な直弧文が刻まれた石障をもつ長砂連古墳が築かれている（図５）。上島北東端に延びる下大戸ノ岬の尾根筋上には、石障に円文が刻まれた横穴式石室を内部主体とする大戸鼻北古墳や同じく円文が刻まれた箱式石棺で著名な大戸鼻南古墳が存在する。さらに、永浦島の南の海峡を西に進めば竹島に至るが、そこには初期の横穴式石室を内部主体とする竹島３号墳が築造されている。逆に維和島西岸と大矢野島東岸にはさまれた海峡を北に進めば、維和島北端の千崎古墳群、あるいは宇土半島西南端の清水甲古墳に至る。千崎古墳群では、精緻な加工が施された箱式石棺、あるいは長方形プランの玄室に狭い羨道を付した横穴式石室を主体部とする円墳などが26基確認されている。また、清水甲古墳は箱式石棺であるが、かつてそこからは筒形銅器が出土しているのである。

もう少し視野を広げれば、八代海沿岸としてのまとまりも指摘することができる（図６）。とくに重要なのは九州島側の八代市周辺に築かれた中期古墳で、小鼠蔵１号墳や大鼠蔵尾張宮古墳、田川内１号墳などをあげることができる。さらに注目されるのは、天草で産出される砂岩が八代市周辺の古墳の埋葬施設に用いられている点である。つまり、天草諸島北部とその対岸の九州島側、すなわち八代海北部沿岸地域は、きわめて密接に結ばれていたと想像されるのである。

さらに南に目を向ければ、九州島西部において、八代海北部沿岸地域は前方後円墳分布の南端にあたる。つまり、古墳をさかんに築く社会とそうではない社会との接点にあたるのである。

カミノハナ古墳群が築かれたのは、天草諸島を南北につたうルートの北の拠点となる場所であるが、古墳時代中期においては古墳社会の最南西端地域でもあった。そうした立地環境を念頭におくことが、天草諸島で唯一、埴輪が樹立された当古墳群の存在意義を解く鍵となるだろう。　（杉井）

図5　カミノハナ古墳群の位置

1：カミノハナ古墳群，2：磯山古墳群（清水甲・乙古墳），3：鬼塚古墳，4：千崎古墳群，5：成合津古墳群，6：長砂連古墳，7：広浦古墳，8：大戸鼻古墳群，9：竹島古墳群

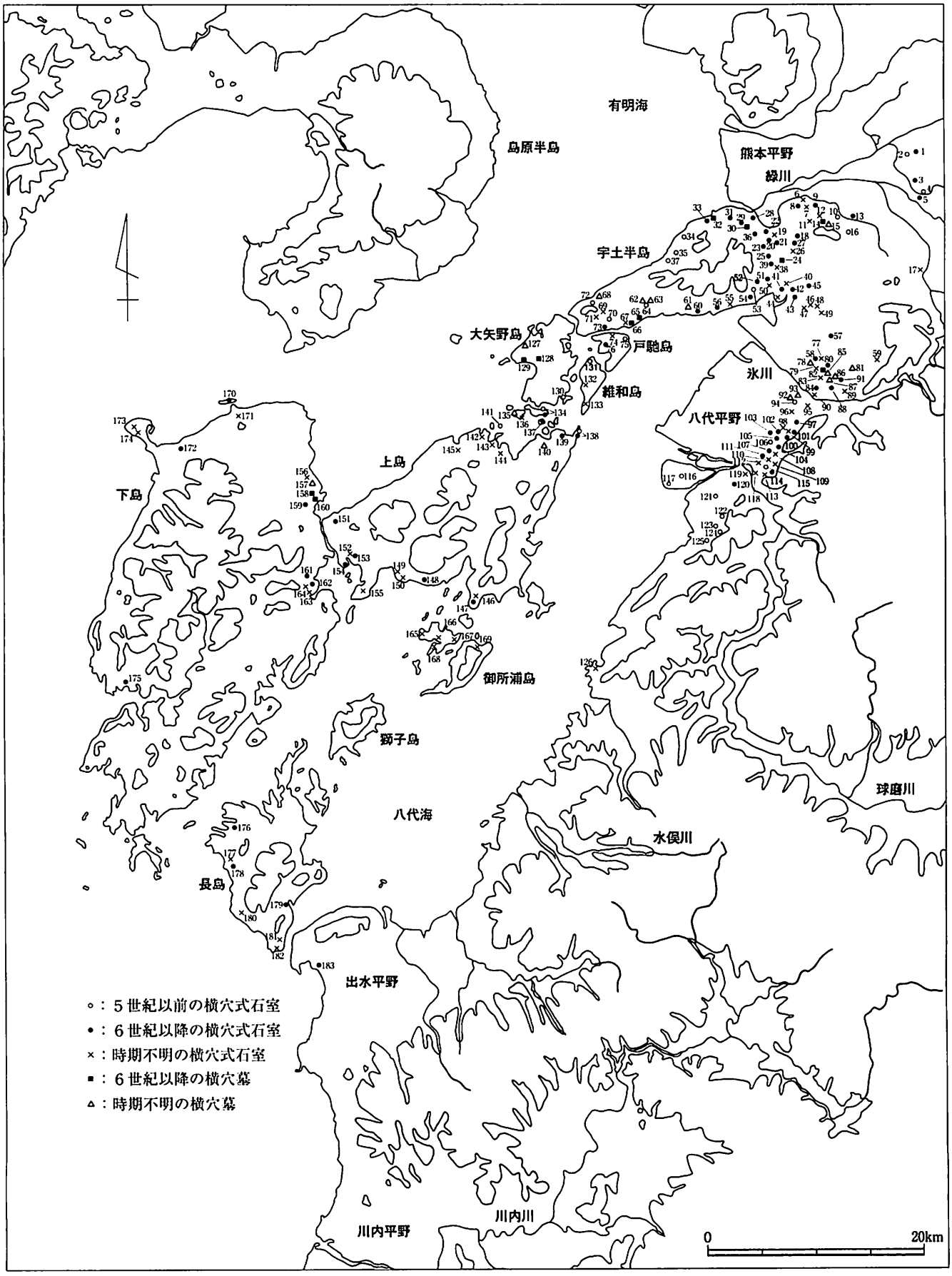


図6　八代海周辺の横穴式石室墳と横穴墓の分布

（アミは標高200m以上を示す。番号は表1～3に対応する。134がカミノハナ古墳群である。）

表１　八代海周辺の横穴式石室墳と横穴墓（１）

No	遺跡名	所在地	墳形	主体部	時期（世紀）	副葬品・出土遺物	備考	文献
1	鬼塚古墳	熊本県上益城郡益城町東無田		横穴式石室	6			8
2	井寺古墳	熊本県上益城郡嘉島町井寺	円墳	横穴式石室	5	鉄刀	装飾古墳	8
3	帰帆山古墳	熊本県上益城郡御船町豊秋	円墳	横穴式石室	6	須恵器		8
4	小坂大塚古墳	熊本県上益城郡御船町小坂	円墳	横穴式石室	5	銅鏡、甲冑、鉄槍、蕨手刀子、玉類		8
5	今城大塚古墳	熊本県上益城郡御船町滝川	前方後円墳	横穴式石室	6		装飾古墳	8
6	栗崎古墳	熊本県下益城郡富合町木原		横穴式石室				8
7	須弥堂古墳	熊本県下益城郡富合町木原	円墳	横穴式石室				8
8	神ノ上古墳	熊本県下益城郡富合町平原		横穴式石室	6			4
9	大塚山古墳	熊本県下益城郡城南町坂野	円墳	横穴式石室	6～7	須恵器		8
10	坂本古墳	熊本県下益城郡城南町坂野	円墳	横穴式石室	5		装飾古墳	8
11	熊寺古墳	熊本県下益城郡城南町宮地	円墳	横穴式石室				8
12	保生園内古墳	熊本県下益城郡城南町古野	円墳	横穴式石室				8
13	甚九郎山古墳	熊本県下益城郡城南町沈目	前方後円墳	横穴式石室	6	須恵器、鉄刀	装飾古墳	8
14	御領横穴墓群	熊本県下益城郡城南町東阿高		横穴墓	6	須恵器	装飾古墳	9
15	牛頸横穴墓群	熊本県下益城郡城南町東阿高		横穴墓			２号装飾古墳、人骨	9
16	りゅうがん塚古墳	熊本県下益城郡城南町塚原	円墳	横穴式石室	5			8
	くぬぎ塚古墳		円墳	横穴式石室	5		塚原古墳群	13
	将軍塚古墳		円墳	横穴式石室	5	銅鏡、短甲、鉄鏃、鉄鉞、刀子	塚原古墳群	8
	日焼塚古墳		円墳	横穴式石室		玉類	塚原古墳群	8
	上の原２号墳			横穴式石室	5	須恵器、鉄製品、玉類	塚原古墳群	8
17	四十八塚古墳群	熊本県下益城郡美里町岩下		横穴式石室				8
18	三日鬼の岩屋古墳	熊本県宇土市花園町	円墳	横穴式石室	7			14
19	古城古墳	熊本県宇土市古城町	円墳	横穴式石室				8
20	金獄山古墳	熊本県宇土市椿原町	円墳？	横穴式石室				14
21	椿原古墳	熊本県宇土市椿原町	方墳	横穴式石室	6	土師器、須恵器、鉄鏃	装飾古墳	8
22	東畑１号墳	熊本県宇土市恵塚町	円墳	横穴式石室	6		装飾古墳	10
	東畑２号墳			横穴式石室	6～7			10
23	仮又古墳	熊本県宇土市恵塚町	円墳	横穴式石室	7	土師器、須恵器、鉄鏃、刀子、鉄滓	装飾古墳	8
24	大平横穴墓	熊本県宇土市栗崎町		横穴墓	7	須恵器		9
25	山王平古墳	熊本県宇土市神合町		横穴式石室	6	須恵器		14
26	桶底古墳	熊本県宇土市松山町		横穴式石室				10
27	神ノ山２号墳	熊本県宇土市松山町	円墳	横穴式石室	6	須恵器、鉄鏃、ガラス玉		14
28	梅崎古墳	熊本県宇土市笹原町	円墳	横穴式石室	6～7	須恵器、耳環	装飾古墳	10
29	城塚古墳	熊本県宇土市城塚町	円墳	横穴式石室	7		装飾古墳	10
30	尾ノ上横穴墓群	熊本県宇土市城塚町		横穴墓	6～7		横穴墓約20基	9
31	御殿山古墳	熊本県宇土市笠岩堤の上	円墳	横穴式石室	6～7			10
32	小部田横穴墓群	熊本県宇土市住吉町		横穴墓	6	須恵器	横穴墓11基	9
33	小池平１号墳	熊本県宇土市長浜町	円墳	横穴式石室	6～7			14
34	小松１号墳	熊本県宇土市長浜町	円墳	横穴式石室	5	刀子		10
35	ヤンボシ塚古墳	熊本県宇土市上網田	円墳	横穴式石室	5	土師器、鉄鏃、刀子	装飾古墳	8
36	神の木山１号墳	熊本県宇土市野鶴町		横穴式石室	6	須恵器、耳環、玉類など		10
37	城１号墳	熊本県宇土市下網田町	円墳	横穴式石室	5		城古墳群	10
	城２号墳		円墳	横穴式石室	5	鉄剣、鉄鏃、鉄斧、刀子、玉類、琴柱型石製品	城古墳群	17
38	北園鬼塚古墳	熊本県宇城市不知火町小曽部	円墳	横穴式石室				8
39	鬼塚古墳	熊本県宇城市不知火町小曽部	円墳	横穴式石室	7			8
40	大迫１号墳	熊本県宇城市不知火町高良		横穴式石室				6
	大迫２号墳			横穴式石室				6
41	塚原１号墳	熊本県宇城市不知火町高良	円墳	横穴式石室	6～7		装飾古墳	14
	塚原２号墳			横穴式石室	6～7			14
42	塚原平古墳	熊本県宇城市不知火町高良	円墳	横穴式石室	6	須恵器、馬具		8
43	神の元１号墳	熊本県宇城市不知火町高良		横穴式石室	7	土師器、須恵器、耳環、玉類		12
44	栗崎２号墳	熊本県宇城市不知火町高良		横穴式石室				6
45	男塚古墳	熊本県宇城市松橋町古保山	前方後円墳	横穴式石室	6			8
46	年の神古墳	熊本県宇城市松橋町両仲間	円墳	横穴式石室				8
47	狐塚古墳	熊本県宇城市松橋町両仲間		横穴式石室				8
48	豊福古墳	熊本県宇城市松橋町豊福	円墳	横穴式石室				8
49	竹崎古墳	熊本県宇城市松橋町豊福		横穴式石室				4
50	御領東原１号墳	熊本県宇城市不知火町御領		横穴式石室				6
	御領東原２号墳			横穴式石室				6
	御領東原３号墳			横穴式石室				6
51	国越古墳	熊本県宇城市不知火町長崎	前方後円墳	横穴式石室	6	須恵器、銅鏡、鉄刀、鉄鏃、馬具、曲刃鎌、鉄斧、鎹、刀子、耳環、帯金具、玉類、銅椀	装飾古墳、人骨	8
52	桂原古墳	熊本県宇城市不知火町長崎	円墳	横穴式石室	7		装飾古墳	11
53	鶏籠古墳	熊本県宇城市不知火町長崎	円墳	横穴式石室	5		装飾古墳	11
	鶏籠古墳２号	熊本県宇城市不知火町長崎		横穴式石室				8
54	道免古墳	熊本県宇城市不知火町長崎		横穴式石室	6			6
55	鬼の岩屋１号墳	熊本県宇城市不知火町永尾		横穴式石室				8
56	河添鬼の岩屋１号墳	熊本県宇城市不知火町河添		横穴式石室	6			8
57	年の神１号墳	熊本県宇城市小川町北小野	円墳	横穴式石室	7	須恵器、鉄製品、装身具	人骨	8
	年の神２号墳		円墳	横穴式石室	7	須恵器、鉄製品、玉類		8
58	西平古墳	熊本県宇城市小川町北小野		横穴式石室	6	須恵器		8
59	山中古墳	熊本県宇城市小川町東小川		横穴式石室				8
60	大串古墳	熊本県宇城市三角町大口		横穴式石室	6			20
61	大口横穴群	熊本県宇城市三角町大口		横穴墓			横穴墓６基以上	16
62	城山第１・２号横穴	熊本県宇城市三角町都浦		横穴墓				9
63	矢崎の地下式横穴	熊本県宇城市三角町都浦		横穴墓				9
64	見島崎古墳	熊本県宇城市三角町都浦	円墳	横穴式石室	5	鉄鏃、石斧、玉類		8
65	御船横穴群	熊本県宇城市三角町里浦		横穴墓	6	須恵器	横穴墓６基	9
66	西木の浦第１横穴墓	熊本県宇城市三角町前越		横穴墓				9
	西木の浦第２横穴墓			横穴墓		須恵器、鉄矛、鉄刀、鉄鏃、銅鈴		9
	西木の浦第３横穴墓			横穴墓				9
	西木の浦第４横穴墓			横穴墓	6～7	土師器、鉄刀、耳環		9
67	西木浦Ａ号墳	熊本県宇城市三角町前越		横穴式石室				16
	西木浦Ｂ号墳			横穴式石室				16
68	山の神横穴群	熊本県宇城市三角町大田尾		横穴墓			横穴墓７基	9
69	際崎１号墳	熊本県宇城市三角町波多	円墳	横穴式石室				8
70	重盛山古墳	熊本県宇城市三角町波多	円墳	横穴式石室	5	鉄鏃、鉄斧、玉類		8
71	陣内１号墳	熊本県宇城市三角町陣内	円墳	横穴式石室		土師器、須恵器、鉄鏃、鉄斧、刀子	陣内古墳群	16
72	小田良古墳	熊本県宇城市三角町中村	円墳	横穴式石室	5	鉄刀、鉄剣、鉄鏃、鉄矛、刀子、銅鈴、異形銅製品、玉類	装飾古墳、人骨	8
73	小鹿里古墳	熊本県宇城市三角町新地小鹿里		横穴式石室	6～7	須恵器、銅鏡、耳環		8
74	田井ノ浦遺跡	熊本県宇城市三角町戸馳		横穴式石室				8
75	鬼塚古墳	熊本県宇城市三角町戸馳	円墳	横穴式石室	5	短甲片、鉄刀、鉄矛、鉄鏃、玉類		8

表２　八代海周辺の横穴式石室墳と横穴墓（２）

No.	遺跡名	所在地	墳形	主体部	時期（世紀）	副葬品・出土遺物	備考	文献
76	辺田Ａ号墳	熊本県宇城市三角町戸馳	円墳？	横穴式石室	6	鉄鏃、刀子、耳環、管玉		8
	辺田Ｂ号墳			横穴式石室	6			8
77	六反田古墳	熊本県八代郡氷川町大野	円墳	横穴式石室				8
78	太山古墳	熊本県八代郡氷川町大野		横穴墓				9
79	永田古墳群	熊本県八代郡氷川町大野		横穴式石室				8
80	大野窟古墳	熊本県八代郡氷川町大野	前方後円墳	横穴式石室	6	須恵器		8
81	高尾横穴墓群	熊本県八代郡氷川町大野		横穴墓				9
82	大野城跡横穴墓群	熊本県八代郡氷川町大野		横穴墓	6			9
83	浄土古墳	熊本県八代郡氷川町大野	円墳	横穴式石室				8
84	物見櫓古墳	熊本県八代郡氷川町野津	前方後円墳？	横穴式石室	6	須恵器、挂甲、鉄矛、鉄鏃、胡禄、馬具、鈴、垂飾付耳飾、玉類	野津古墳群	2
	姫ノ城古墳		前方後円墳	横穴式石室？	6	須恵器	野津古墳群	2
	中ノ城古墳		前方後円墳	横穴式石室	6	須恵器、挂甲、鉄鏃、胡禄、馬具、玉類	野津古墳群	2
85	岩立三つ穴横穴群	熊本県八代郡氷川町立神		横穴墓				9
86	岩立五つ穴横穴群	熊本県八代郡氷川町立神		横穴墓				19
87	岩立七つ穴横穴群	熊本県八代郡氷川町立神		横穴墓				9
88	岩立Ｃ古墳	熊本県八代郡氷川町立神	円墳	横穴式石室	6	須恵器、鉄器、馬具、耳環、玉類		8
89	馬原３号墳	熊本県八代郡氷川町立神	円墳	横穴式石室				8
	馬原４号墳		円墳	横穴式石室		須恵器		8
90	畜園古墳群	熊本県八代郡氷川町立神	円墳	横穴式石室		須恵器		8
91	上平原古墳	熊本県八代郡氷川町宮原	円墳	横穴式石室	6～7	須恵器、鉄鏃		8
92	天真横穴墓群	熊本県八代郡氷川町今		横穴墓				9
93	富貴横穴墓群	熊本県八代郡氷川町今		横穴墓				9
94	大王山２号墳	熊本県八代郡氷川町早尾	円墳	横穴式石室	5			8
95	一口坂古墳	熊本県八代郡氷川町早尾	円墳	横穴式石室				8
96	千椿古墳	熊本県八代郡氷川町早尾	円墳	横穴式石室				8
97	境１号墳	熊本県八代市岡町小路		横穴式石室			境古墳群	20
	境２号墳		円墳	横穴式石室	6～7	土師器、須恵器、鉄器、玉類	境古墳群	20
	境３号墳		円墳	横穴式石室		土師器、須恵器	境古墳群	20
	境４号墳			横穴式石室			境古墳群	20
98	岩屋本古墳	熊本県八代市岡町中野中上		横穴式石室				8
99	平原１号墳	熊本県八代市岡町中		横穴式石室				8
	平原２号墳			横穴式石室				8
	平原３号墳			横穴式石室				8
	平原４号墳			横穴式石室				8
100	行西古墳第１号墳	熊本県八代市岡町中		横穴式石室	6	馬具	行西古墳群	8
	行西古墳第２号墳			横穴式石室	6		行西古墳群	8
	行西古墳第３号墳			横穴式石室	6		行西古墳群	8
	行西古墳第４号墳			横穴式石室	6		行西古墳群	8
101	玉泉寺１号墳	熊本県八代市岡町中	円墳	横穴式石室		須恵器		8
	玉泉寺２号墳		円墳	横穴式石室	7	土師器、須恵器		8
102	山口１号墳	熊本県八代市岡町中	円墳	横穴式石室				8
	山口２号墳		円墳	横穴式石室	6～7	土器片、鉄器、青銅製金具		8
	山口３号墳		円墳	横穴式石室				8
103	如見第２号墳	熊本県八代市岡町谷川	円墳	横穴式石室	6～7			8
104	谷川１号墳	熊本県八代市岡町谷川	円墳	横穴式石室	6			8
	谷川２号墳		円墳	横穴式石室	6			8
	谷川３号墳		円墳	横穴式石室				8
105	清水第１号墳	熊本県八代市岡町谷川		横穴式石室	6～7	耳環	人骨	8
106	門前２号墳	熊本県八代市岡町谷川	円墳	横穴式石室	5		装飾古墳	8
107	川上１号墳	熊本県八代市川田町東		横穴式石室				8
	川上２号墳			横穴式石室	6～7			8
108	天神古墳	熊本県八代市東片町		横穴式石室				8
109	方見堂古墳	熊本県八代市東片町		横穴式石室				8
110	御経塚古墳	熊本県八代市東片町	円墳	横穴式石室				8
111	虚空蔵古墳	熊本県八代市長田町		横穴式石室				8
112	長田町古墳群	熊本県八代市長田町	円墳	横穴式石室				8
113	森の屋敷古墳	熊本県八代市長田町	円墳	横穴式石室				8
114	鬼の岩屋１号墳	熊本県八代市上片町	円墳	横穴式石室	6～7			8
	鬼の岩屋４号墳		円墳	横穴式石室				8
	鬼の岩屋５号墳		円墳	横穴式石室		須恵器		8
115	高取上ノ山古墳	熊本県八代市上片町高取	前方後円墳	横穴式石室	5			8
116	小鼠蔵１号墳	熊本県八代市鼠蔵町	円墳	横穴式石室	4～5		小鼠蔵古墳群	8
117	大鼠蔵西北麓２号墳	熊本県八代市鼠蔵町	円墳	横穴式石室	5	須恵器	大鼠蔵古墳群、装飾古墳、人骨	8
	尾張宮古墳		円墳	横穴式石室	4～5		大鼠蔵古墳群、装飾古墳	8
118	乙丸５号墳	熊本県八代市宮地町	円墳	横穴式石室				8
119	奈良本短冊塚	熊本県八代市奈良本町		横穴式石室				8
120	平山１号墳	熊本県八代市平山新町	円墳	横穴式石室	6～7	土師器、須恵器、耳環、鉄器、玉類		8
	平山２号墳		円墳	横穴式石室	6～7	須恵器、耳環		8
121	五反田古墳	熊本県八代市敷川内町	円墳	横穴式石室	5		装飾古墳	8
122	塩釜山１号墳	熊本県八代市日奈久大坪町	円墳	横穴式石室	5	銅鏡、鉄器、玉類	塩釜山古墳群	8
123	長迫古墳	熊本県八代市日奈久大坪町	円墳	横穴式石室	5		装飾古墳	8
124	竹ノ内古墳	熊本県八代市日奈久竹ノ内町	円墳	横穴式石室	5			8
125	田川内１号墳	熊本県八代市日奈久新田町	円墳	横穴式石室	5	短甲、鉄剣、鉄斧、蹄手刀子、貝輪	装飾古墳	11
126	鬼塚古墳	熊本県葦北郡芦北町海浦	円墳	横穴式石室				8
127	諏訪原横穴墓	熊本県上天草市大矢野町上		横穴墓				5
128	田淵横穴墓群	熊本県上天草市大矢野町上		横穴墓	6～7			5
129	大飼横穴墓群	熊本県上天草市大矢野町上		横穴墓	7			5
130	長砂連古墳	熊本県上天草市大矢野町中	円墳	横穴式石室	5	土師器、須恵器、鉄刀、鉄矛	装飾古墳	18
131	千崎５号墳	熊本県上天草市大矢野町維和	円墳	横穴式石室	5	玉類	千崎古墳群	15
132	北ヶ島古墳	熊本県上天草市大矢野町維和		横穴式石室				8
133	白須古墳	熊本県上天草市大矢野町維和	円墳	横穴式石室				7
134	カミノハナ１号墳	熊本県上天草市松島町合津	円墳	横穴式石室	5	須恵器、短甲、鉄剣、鉄鏃、鉄斧、刀子、小玉	カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ２号墳		円墳	横穴式石室	5	土師器、須恵器、鉄剣、刀子	カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ３号墳		円墳	横穴式石室	5	須恵器、短甲、鉄刀、鉄鏃、刀子、玉類	カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ４号墳		円墳	横穴式石室	5	土師器、須恵器、鉄刀、鉄製品	カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ５号墳		円墳	横穴式石室	6		カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ６号墳		円墳	横穴式石室	6	土師器、須恵器、鉄刀、鉄鏃、刀子、貴金具、耳環、玉類	カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ７号墳		円墳	横穴式石室			カミノハナ古墳群	21
	カミノハナ８号墳		円墳	横穴式石室			カミノハナ古墳群	21

表３　八代海周辺の横穴式石室墳と横穴墓（３）

No	遺跡名	所在地	墳形	主体部	時期（世紀）	副葬品・出土遺物	備考	文献
135	梅ノ木古墳群	熊本県上天草市松島町合津		横穴墓				5
136	保が島古墳	熊本県上天草市松島町合津		横穴式石室				7
137	梅殿塚古墳	熊本県上天草市松島町合津	円墳	横穴式石室				8
138	大戸桑３号墳	熊本県上天草市松島町阿村	円墳	横穴式石室	6	須恵器、鉄器、玉類	装飾古墳	4
	大戸桑４号墳			横穴式石室				4
	大戸桑５号墳		円墳	横穴式石室	4～5		装飾古墳	4
139	阿村鬼塚１号（東）	熊本県上天草市松島町阿村	円墳	横穴式石室	6～7	須恵器、武具、耳環		8
	阿村鬼塚２号（西）		円墳	横穴式石室				8
140	馬場横穴墓群	熊本県上天草市松島町内野河内		横穴墓				9
141	竹島１号墳	熊本県天草市有明町	円墳	横穴式石室				8
	竹島３号墳		円墳	横穴式石室	5	石製表飾		8
	竹島４号墳		円墳	横穴式石室	5	土師器、須恵器、鉄鏃		8
142	台田古墳	熊本県天草市有明町大浦	円墳	横穴式石室				8
143	荒瀬古墳	熊本県天草市有明町	円墳	横穴式石室				8
144	水車古墳	熊本県天草市有明町	円墳	横穴式石室		須恵器		5
145	須子鬼塚古墳	熊本県天草市有明町須子	円墳	横穴式石室				8
146	葛崎古墳	熊本県上天草市竜ヶ岳町大道	円墳	横穴式石室				5
147	大道鬼の釜古墳	熊本県上天草市竜ヶ岳町大道	円墳	横穴式石室	6			8
148	境目古墳	熊本県天草市倉岳町宮田	円墳	横穴式石室	6			8
149	下平古墳	熊本県天草市栖本町古江		横穴式石室				8
150	沖ノ瀬１号墳	熊本県天草市栖本町古江椎児崎	円墳	横穴式石室				8
	沖ノ瀬２号墳		円墳	横穴式石室		武具、耳飾、玉類		8
	沖ノ瀬３号墳		円墳	横穴式石室				8
151	大松戸古墳	熊本県天草市志柿町	円墳	横穴式石室	6	土師器、須恵器		8
152	湯貫新田古墳	熊本県天草市下浦町	円墳	横穴式石室				8
153	金左衛門鬼塚古墳	熊本県天草市下浦町	円墳	横穴式石室	6～7			8
154	下浦須森古墳	熊本県天草市下浦町	円墳	横穴式石室	6	土師器、須恵器		8
155	唐崎古墳	熊本県天草市下浦町	円墳	横穴式石室				8
156	先明瀬鬼塚古墳	熊本県天草市佐伊津町	円墳	横穴式石室		須恵器		8
157	茂木根明瀬横穴墓群	熊本県天草市佐伊津町		横穴墓				9
158	茂木根江古平横穴墓群	熊本県天草市本渡町広瀬		横穴墓	6～7			9
159	大矢崎古墳群	熊本県天草市本渡町広瀬	円墳	横穴式石室	6～7		横穴式石室墳３基	5
160	茂木根善坪横穴墓群	熊本県天草市本渡町広瀬		横穴墓	6～7			9
161	楠浦新田古墳	熊本県天草市楠浦町	円墳	横穴式石室	6			8
162	鬼ノ桑古墳	熊本県天草市楠浦町	円墳	横穴式石室	6			8
163	南古郷古墳	熊本県天草市楠浦町	円墳	横穴式石室				8
164	観音向山古墳	熊本県天草市楠浦町	円墳	横穴式石室				8
165	田尻古墳	熊本県天草市御所浦町牧島	円墳	横穴式石室				5
166	牧向古墳	熊本県天草市御所浦町牧島	円墳	横穴式石室				8
167	黒崎古墳	熊本県天草市御所浦町牧島	円墳	横穴式石室		須恵器		8
168	串崎古墳	熊本県天草市御所浦町牧島	円墳	横穴式石室				8
169	嵐口古墳	熊本県天草市御所浦町浦	円墳	横穴式石室				5
170	通詞島南古墳	熊本県天草市五和町	円墳	横穴式石室	6	須恵器		5
171	沖ノ原西古墳	熊本県天草市五和町二江	円墳	横穴式石室				8
	沖ノ原東古墳		円墳	横穴式石室				8
172	西河内古墳	熊本県天草郡苓北町上津深江	円墳	横穴式石室	7	土師器、須恵器、鉄器		8
173	富岡２号墳	熊本県天草郡苓北町富岡	円墳	横穴式石室				8
174	白岩崎古墳	熊本県天草郡苓北町富岡白岩崎		横穴式石室				5
175	鬼塚古墳	熊本県天草市河浦町今富	円墳	横穴式石室	6	土師器、須恵器、鉄器		8
176	温之浦１号墳	鹿児島県出水郡長島町		横穴式石室	6～7	鉄鏃、耳環		1
	温之浦２号墳			横穴式石室	6～7	鉄鏃、刀鐔、耳環、玉類		1
	温之浦３号墳			横穴式石室		須恵器、鉄鏃		1
177	明神６号墳	鹿児島県出水郡長島町		横穴式石室		須恵器		1
178	白金古墳	鹿児島県出水郡長島町蔵之元		横穴式石室	6～7	須恵器、銅鏡片、金銅製貴金具、耳環、玉類	小浜崎古墳群	1
	鬼塚古墳			横穴式石室	6～7	須恵器、鉄鏃、刀子、耳環、玉類	小浜崎古墳群	1
179	加世堂古墳	鹿児島県出水郡長島町		横穴式石室	6	須恵器片、鉄刀、鉄鏃		1
180	唐隈古墳	鹿児島県出水郡長島町越川内		横穴式石室				3
181	日之浦遺跡	鹿児島県出水郡長島町山門野		横穴式石室				3
182	潤之尻遺跡	鹿児島県出水郡長島町		横穴式石室				8
183	新田ヶ丘１号墳	鹿児島県阿久根市脇本		横穴式石室	6～7		脇本古墳群	1
	新田ヶ丘２号墳			横穴式石室	6		脇本古墳群	1

表１～３にかんする参考文献

1．池水寛治　1982「長島の古墳」長島町教育委員会
2．今田治代編　1999「野津古墳群」Ⅱ　竜北町文化財調査報告書第１集　竜北町教育委員会
3．鹿児島県埋蔵文化財情報データベース（http://www2.jomon-no-mori.jp/gis）
4．熊本県教育委員会　1998「熊本県遺跡地図」
5．坂本経堯・坂本経昌　1971「天草の古代」　私家版
6．坂本経堯　1972「古墳時代」「不知火町史」　不知火町：pp. 41－88
7．杉井　健　2007「古墳時代の大矢野」「上天草いにしえの暮らしと古墳」上天草市史大矢野町編１　上天草市：pp. 123－345
8．第２回九州前方後円墳研究会編　1999「九州における横穴式石室墓の導入と展開」　第２回九州前方後円墳研究会大会発表要旨・資料集
9．第４回九州前方後円墳研究会編　2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓」　第４回九州前方後円墳研究会大会発表要旨・資料集
10．髙木恭二他　1987「宇土半島基部古墳群」宇土市埋蔵文化財調査報告書第15集　宇土市教育委員会
11．髙木正文編　1984「熊本県装飾古墳総合調査報告書」熊本県文化財調査報告第68集　熊本県教育委員会
12．中岡昇編　1992「神の元１号墳」熊本県文化財調査報告書第122集　熊本県教育委員会
13．野田拓也他　1975「塚原」熊本県文化財調査報告書第16集　熊本県教育委員会
14．古城史雄他　2002「古墳時代」「新宇土市史」資料編第２巻　考古資料・金石文・建築物・民俗　宇土市：pp. 91－280
15．前田真由子編　2006「千崎古墳群第４次調査報告」「上天草市史大矢野町編資料集」２　上天草市：pp. 1－26
16．三角町史編纂協議会専門委員会編　1987「古墳時代」「三角町史」　三角町：pp. 118－169
17．城二号墳発掘調査団編　1981「城二号墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第３集　城二号墳発掘調査団・宇土市教育委員会
18．南健太郎編　2005「長砂連古墳石障実測調査報告」「上天草市史大矢野編資料集」１　上天草市：pp. 39－50
19．村井真輝編　1979「五ツ穴横穴群」熊本県文化財調査報告書第34集　熊本県教育委員会
20．村井真輝編　1980「境古墳群・境遺跡」熊本県文化財調査報告書第42集　熊本県教育委員会
21．米倉秀紀編　1982「カミノハナ古墳群」２　研究室活動報告14　熊本大学文学部考古学研究室

第2章　過去の調査と成果

1　古墳群の認識から初の考古学調査まで

坂本経堯によれば、1912年（大正元年）9月8日付けの福岡日日新聞に掲載された「天草島の古墳と筑後の石人」（柴田常恵記述）と題した記事のなかに、カミノハナ古墳群のことと思われる記述があるという（坂本経堯・経昌1971：p. 76）。原文を確認し得ていないが、坂本が転載したものから引用すれば、「永浦島にて発見したるは約十個にて頗る大なるものなる」という内容で（坂本1957）、たしかにカミノハナ古墳群を指しているようにも読める。

確実にカミノハナ古墳群について言及したものとしては、1926年（大正15年）に発行された『天草案内』がもっとも古い。そこでは当時の町村別に古墳が紹介されているが、今津村に所在する古墳として「永浦島古墳」の名が示され、「大字合津永浦島の東端字上にある石槨にて、景勝の地を占めてゐる」と説明されている（元田編1926：p. 57）。この内容から判断すれば、これはカミノハナ古墳群のことを指しているとみて間違いはない。しかし、1935年（昭和10年）発行の『天草の史蹟』では、カミノハナ古墳群と判断されるような古墳は示されておらず（本田1935：p. 20）、当古墳群の存在はまだ広く一般に認識されてはいなかったようだ。

こうしたカミノハナ古墳群にふたたび注目が集まったのは1956年（昭和31年）のことである。その前年に実施された玉名高等学校考古学部による維和島の古墳調査（田辺1955ａ・1955ｂ）をきっかけに、天草の人々のあいだで原始古代の遺跡に対する関心が急速に高まり、天草教育研究所を中心に天草古文化研究会が組織された。そして、1956年8月に松島地区の現地踏査が実施され、カミノハナ古墳群にも初めての考古学調査の手が入ったのである。

このときの調査では、カミノハナ古墳群には9基の円墳があるとされ、露出する石材などからそれらの主体部は横穴式石室であると判断された。また、丘陵頂部に位置する1号墳からは円筒埴輪や人物埴輪、土師器、須恵器の破片が採集された（図7）。そして、カミノハナ古墳群は古墳時代後期から終末期に位置付けられると推測されたのである（坂本1956：p. 29，坂本経堯・経昌1971：pp. 76－77）。（杉井）

図7　1号墳埴輪出土状況（1956年）

2　熊本大学による発掘調査

（1）調査経過

1956年から四半世紀が経過した1981・1982年、熊本大学文学部考古学研究室によるカミノハナ古墳群の発掘調査が実施された。それは当時、町史編纂事業を推進していた熊本県天草郡松島町から依頼されたもので、町史編纂に必要な古墳時代の資料を収集するという目的をもっていた。

調査は2度に分けて行われた。第1次調査の期間は1981年3月27日から4月23日、第2次調査は1982年3月11日から21日および4月9・10日である。

第1次調査では、周辺地形の測量、および2～5号墳の石室内埋土の掘り下げと石室の実測が、第2次調査では、1・6号墳の石室内埋土の掘り下げと石室の実測、さらに1号墳の周溝確認調査およ

び３号墳の墳丘断ち割り調査が実施された。

これら一連の調査によって多くの遺物が検出されたが、その発掘調査報告書は第２次調査実施の半年後、1982年10月に刊行された（米倉編1982）。その早さには驚くばかりであるが、それは当時の学生諸氏の驚異的な頑張りがあってこそなしえたことであると思う。しかし残念なのは、遺物出土状況図が提示されていないことなど、若干の不備がある点である。また、1980年代の発掘調査にしては、やや雑な点があることも否定できない。６基もの主体部を発掘調査するにしては調査期間が短いようであるし、何よりも報告書のなかで「石室内清掃」と書かれている点がとても気になる（米倉編1982：p. 4）。言葉に対する認識の違いだけなのかもしれないが、もし「清掃」という軽い気持ちで主体部を掘り下げてしまったのであるとすれば、やはり問題があるだろう。将来を担う考古学徒を教育する大学に籍を置くものとして、今後に伝えていかなければならないと思っている。　（杉井）

（２）調査成果

1981・1982年の調査にかんしては、その調査次数ごとに１冊ずつの発掘調査報告書が刊行されているが（宮本編1981，米倉編1982）、ここでは２冊目の報告書（米倉編1982，以下では1982報告と記述）をもとに、当時の調査成果を簡単にまとめておきたい。なお、本書の主眼は遺物の再整理報告であるため、遺物の点数やその出土位置については極力記すようにした。また、石室の左右は羨道から玄室をみた場合の方向で示した。

古墳の分布　1956年の調査では９基の古墳が分布するとされていた（坂本1956：p. 29）。しかし、熊本大学の調査では、それらのうちの１つは盗掘を受けた古墳の石室石材がたんに集められたものとされ、カミノハナ古墳群は８基の円墳で構成されると判断された。

古墳は、永浦島東端の丘陵頂部から南へ下る尾根筋上に集中して築かれている（図９・10）。標高約30mの頂部には埴輪を樹立する１号墳があり、そこから南へ約80mほどの地点には横矧板鋲留短甲が検出された３号墳が存在する。３号墳のすぐ北側には２号墳が、南側には４号墳が立地し、さらに３号墳から西に延びる尾根筋上には５～７号墳がほぼ等間隔で並んでいる。また、４号墳の西側には８号墳が所在している。

全体の分布をみれば、１号墳のみがほかとはやや離れた位置に築かれている点が特徴である。そこはもっとも標高が高い場所で、東に広がる柳ノ瀬戸を一望できる地点である。本書で明らかにされるように、カミノハナ古墳群のなかでは１号墳がもっとも早く築かれたと考えられるから、その立地は当古墳群造営の端緒となった古墳としてふさわしい。

図８　高舞登山からみた天草松島

図９　上空からみた永浦島（丸がカミノハナ古墳群）

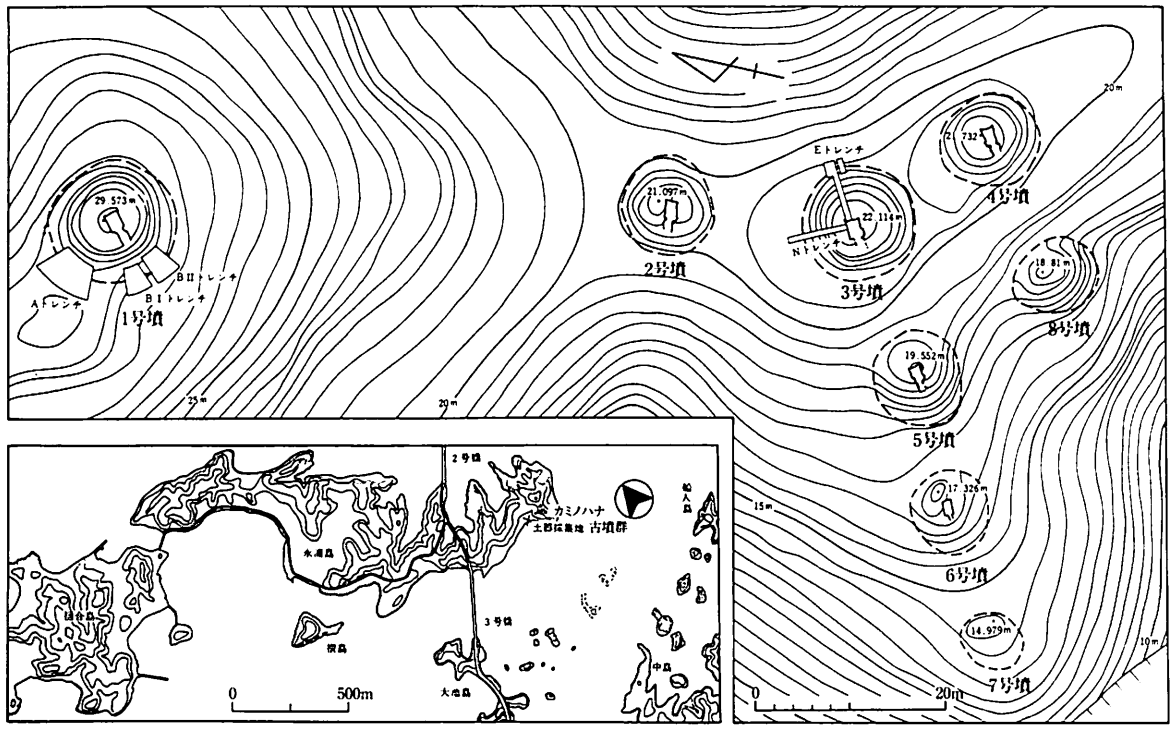


図10　カミノハナ古墳群の古墳分布図

1号墳　1号墳は長径13.2m、高さ1.57mの円墳で、カミノハナ古墳群中最大の規模を誇る。主体部は南西に開口する両袖式の横穴式石室である（図13－上）。玄室は縦長の長方形で長さ1.8m、幅1.4m、羨道は長さ1.2m、幅0.9mである。玄門には3枚の板石が閉塞石として置かれていた。

出土遺物には、埴輪片178片、須恵器の瓹、大甕、器台が各1点、横矧板鋲留短甲残欠数片、鉄鏃45～50点、鉄剣1点、刀子1点、鉄斧1点、小玉151点があるという。

それらのうち、埴輪は石室内埋土および墳丘トレンチから、須恵器は石室内埋土から検出されたようで、原位置ではなかったことがわかる。それに対し、鉄製品や小玉は玄室床面からほぼ原位置で検出されたと思われる。鉄鏃、鉄剣、鉄斧は奥壁右側から右側壁にかけて検出されたが、うち鉄鏃は40～50本が束ねられ、鏃身部を奥壁に向けた状態であった。小玉は奥壁中央部近くの25×15cmの楕円内に151点が集中していた。ほかに、羨道内の埋土から須恵器片や短甲片、鉄片が採集された。

なお、1982報告に記された出土遺物のうち、今回の再整理作業において鉄剣をみいだすことはできなかった。1982報告の遺物概要記載箇所（p.21）でも、鉄剣については2号墳出土のものにしか言及されていないから、1号墳から鉄剣が出土したとの記述（p.6）は誤りである可能性がある。また、刀子は1点とされているが2点の、小玉は151点とされているが166点の存在を今回確認した。鉄鏃については、鏃身部から推測するとその最小個体数は56点（～60点）にのぼった。

2号墳　2号墳は直径10m、高さ1.1mの円墳で、その主体部は西に開口する両袖式の横穴式石室である（図13－下）。玄室は縦長の長方形で長さ1.9m、幅1.3m、羨道は長さ0.9mである。

出土遺物には、須恵器や土師器の小片数片、鉄剣1点、刀子2点がある。

それらのうち、須恵器や土師器は羨道内の埋土から、刀子の1点は床面より高さ48cmの玄室左側壁積み石のあいだから出土したというから、原位置ではないだろう。原位置であったと思われるのは鉄剣1点、刀子1点で、玄室左側壁近くの床面から鉄剣の上に刀子が重なった状態で検出された。

なお、今回の再整理作業で、2号墳出土の鉄鏃片を1片確認した。

３号墳　３号墳は直径12m、高さ1.6mの円墳で、その主体部は西に開口する両袖式の横穴式石室である（図14－上）。玄室は縦長の長方形で長さ1.9m、幅1.4m、羨道は長さ１m、幅0.9mである。左玄門部において、玄門と羨道の石材のあいだにはさみ込まれた１枚の板石が、羨道内にまで突出している点が特徴とされる（図11）。このことから、羨道は「墳丘の一部を破壊しなければ、通路として役立たぬもの」で、「本来的な羨道の役割ははたしていない」と推測された（米倉編1982：p.27）。しかし、現在露出している石室のこの部分を計測しても羨道幅は50cm以上確保されていることから、通路としての用をなさないのかどうかについては再考の余地がある。

３号墳の墳丘については、石室の裏込め部分にまでおよぶ断ち割り調査が実施された。その成果にもとづけば、石室の墓壙は、平坦に整地された地山面に掘り込まれたものであること、その深さは玄室腰石の下端部を設置するにたるだけの浅いものであったことがうかがえる。掘込墓壙ｃ類・墳丘築造以前タイプに分類されるものである（杉井2005：pp.376－377）。

出土遺物には、須恵器片56片（うち大甕4，坏蓋13，坏身３）、横矧板鋲留短甲１点（破片140片以上）、鉄鏃５点以上、鉄刀２点以上、刀子２点以上、勾玉３点、丸玉48点、小玉232点、耳環片４片があるという。

それらのうち鉄刀片１片が墳頂部から出土した以外は、すべて玄室床面からの出土であり原位置と考えてよいだろう。それを詳細にみると、奥壁中央部付近一体では、丸玉、小玉、勾玉、耳環が部分的に列をなすような状態で検出された。左側壁の中央部付近では須恵器片と鉄鏃片が、右側壁の中央部付近から奥壁にかけての場所では一振と思われる鉄刀片や鉄片などが検出された。また、右袖石付近の一帯では、横矧板鋲留短甲の残欠が直径25～30cmほどの半円状に折れ重なり、上へ向かってすぼまるような状態で出土した。さらに、これに重なる位置から右側壁にかけて鋲を有する鉄板片や鉄鏃片、刀子片が散乱した状態で出土した。ほかに、右袖石の隅からは須恵器片少数が出土した。

なお、今回の再整理作業において、勾玉３点の所在を確認することができなかった。1982報告では図や写真が示されているから、25年以上の歳月のあいだに紛失してしまった可能性がある。また、４片出土とされている耳環片も１片のみしか確認できなかった。ただし、注記がなされていないため出土古墳不明とした耳環片が10片あるから、それらのなかに３号墳出土のものが含まれている可能性がきわめて高い。刀子および鉄刀についてはそれぞれ２点以上の出土とされているが、刀子は２点を、鉄刀は１点を確認したにとどまる。ガラス小玉については280点の存在を確認できたが、その数は1982報告で示された丸玉48点と小玉232点をあわせた数と一致する。鉄鏃については、鏃身部が遺存するもの４点、頸部から茎部が遺存するもの６点、頸部のみが遺存するもの３点、茎部のみが遺存す

図11　３号墳横穴式石室の左玄門部

図12　1981年調査参加者

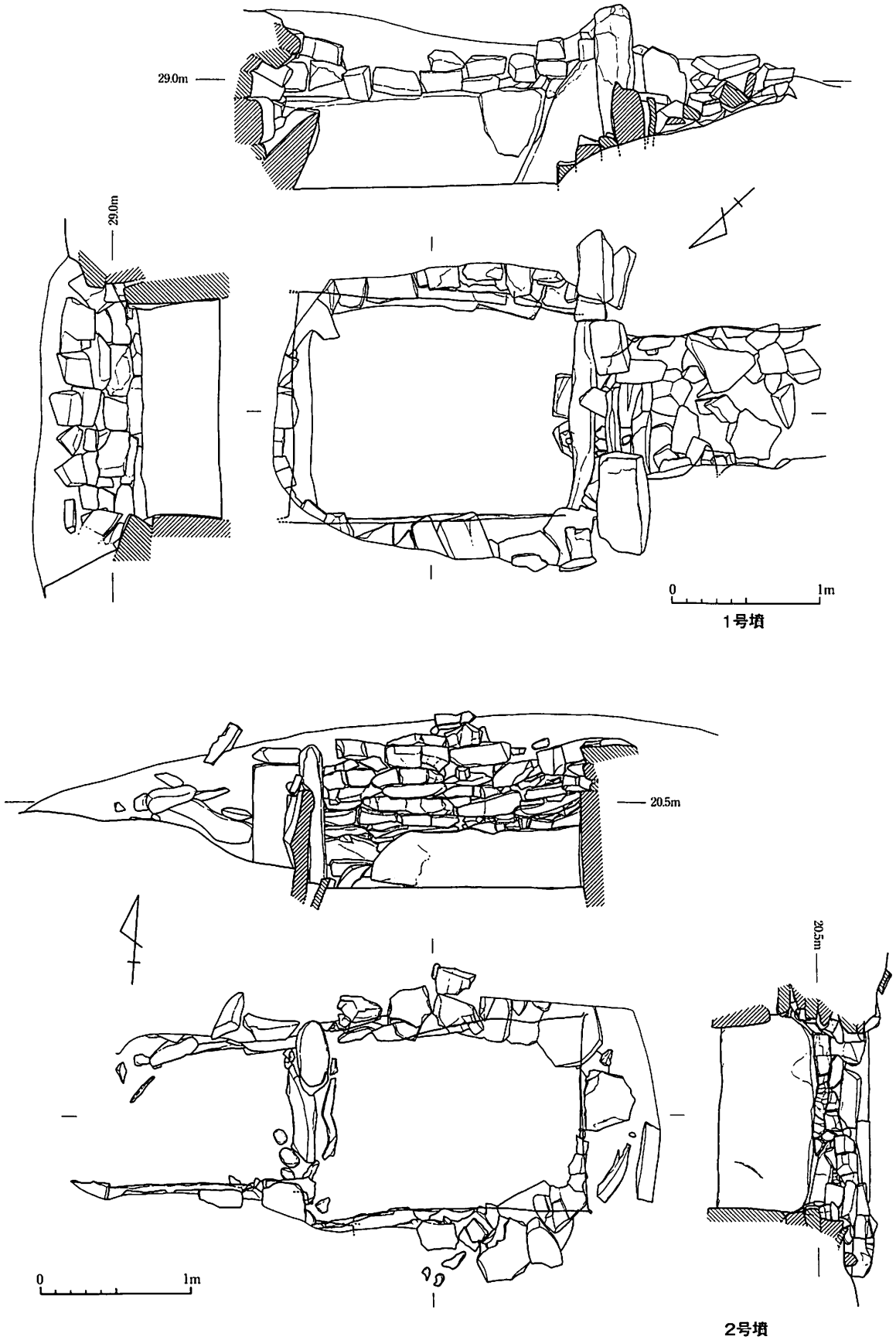
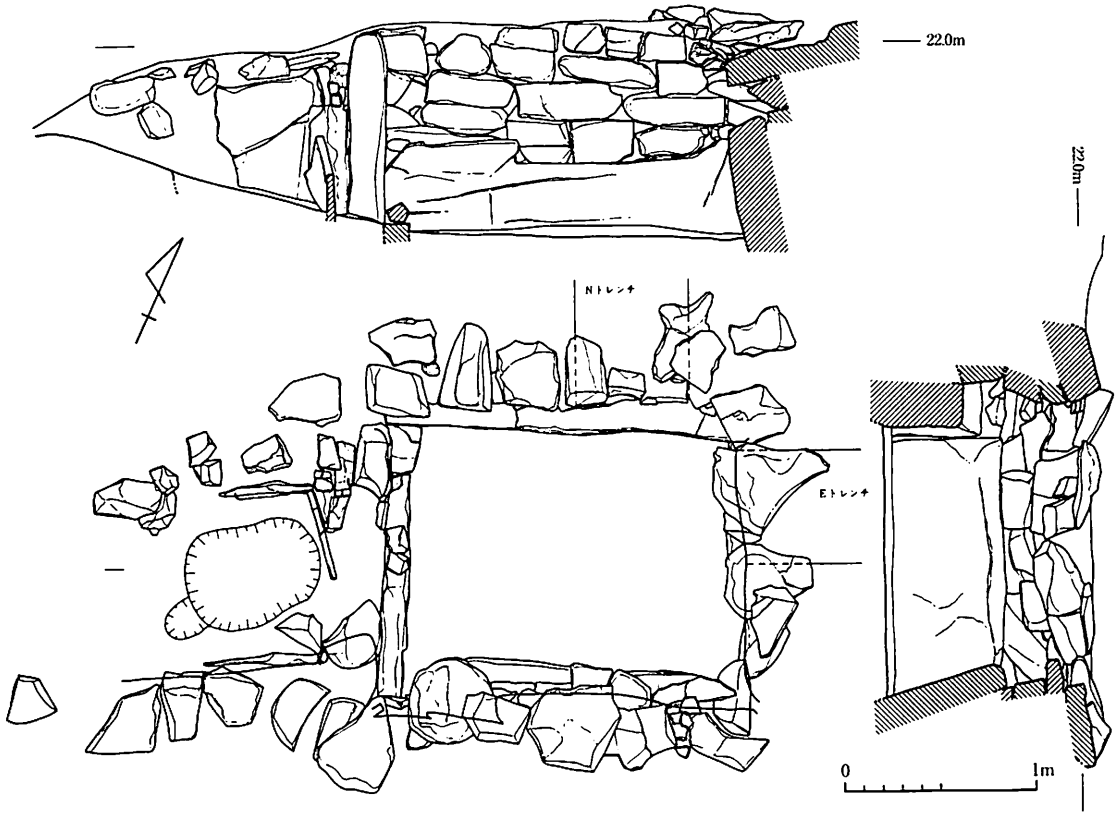
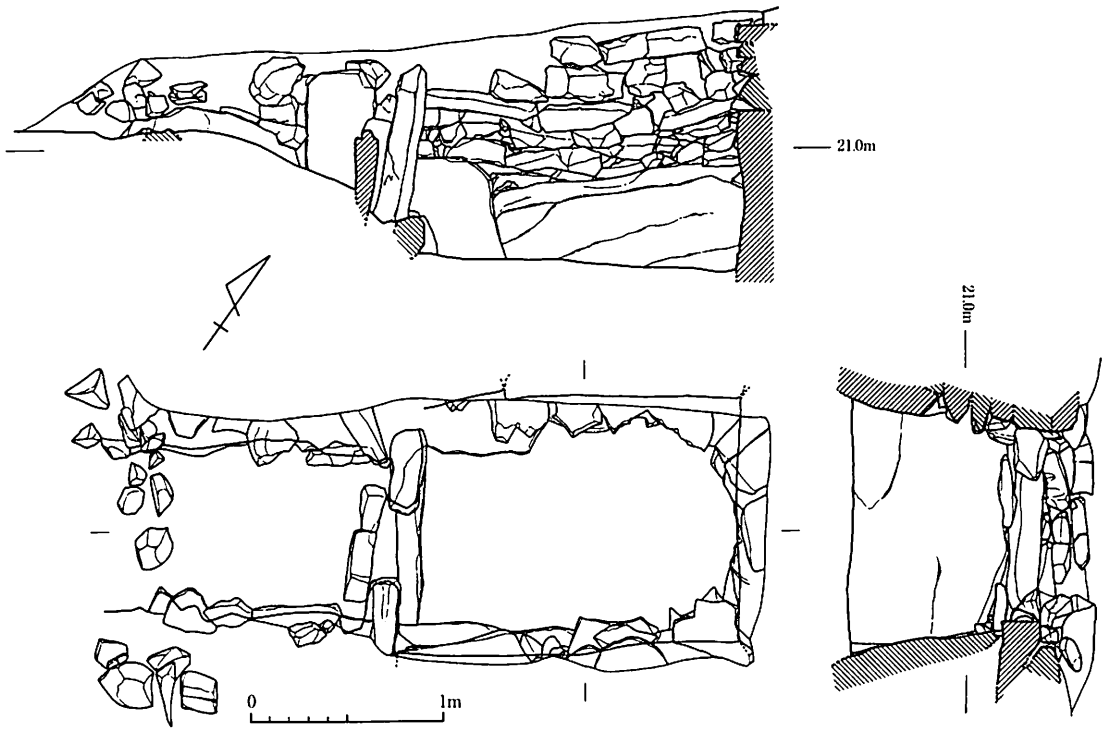


図13　1号墳・2号墳の横穴式石室実測図

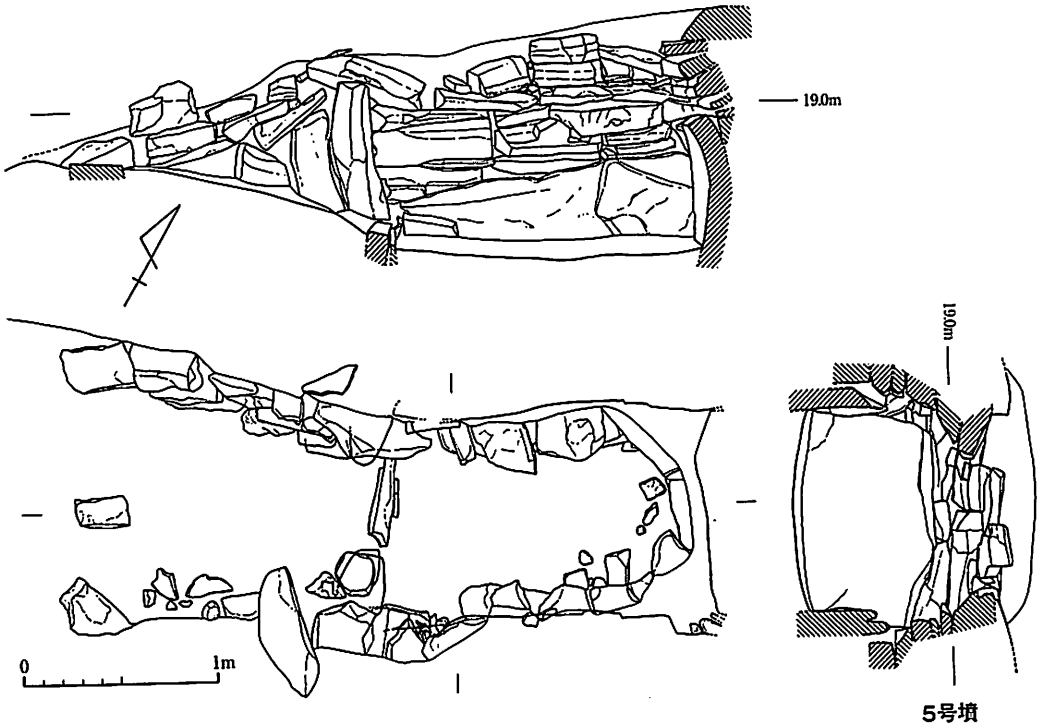


3号墳



4号墳

図14　３号墳・４号墳の横穴式石室実測図



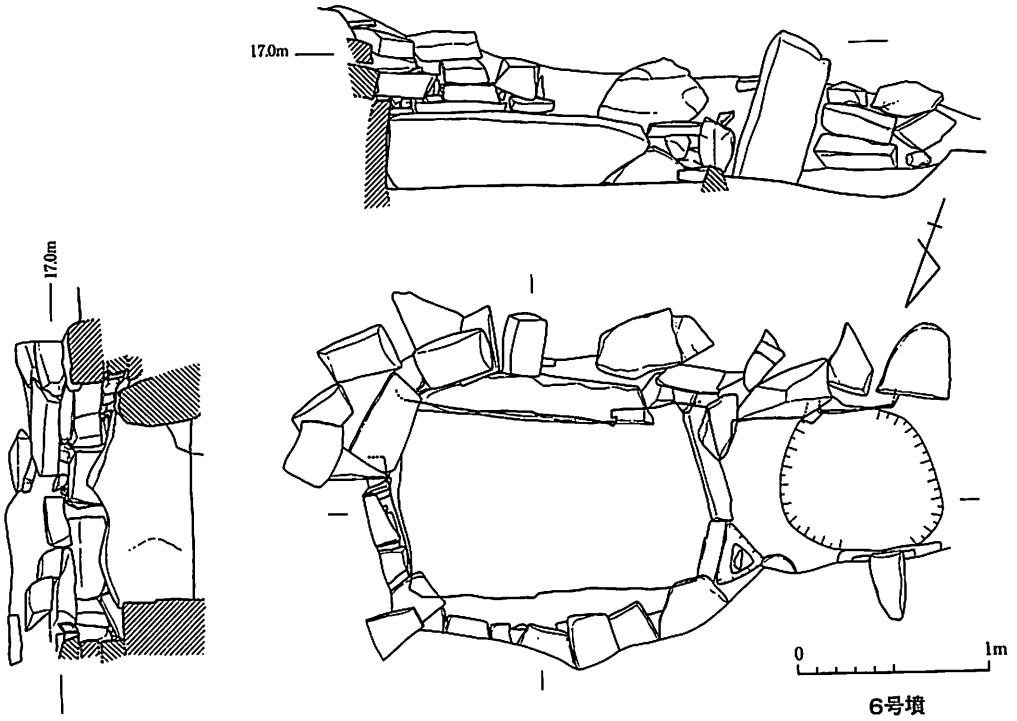


図15　5号墳・6号墳の横穴式石室実測図

るもの２点を確認した。

４号墳　４号墳は直径11m、高さ１mの円墳で、その主体部は西に開口する両袖式の横穴式石室である（図14－下）。玄室は縦長の長方形で長さ1.7m、幅1.3m、羨道は長さ0.85m、幅0.9mである。羨道内部には、小児頭大の砂岩礫と粘質土が充填されていたという。

出土遺物には、須恵器（甕，提瓶）片および土師器片、鉄刀１点がある。

これらのうち、須恵器提瓶片は玄室内埋土より、須恵器甕片と土師器片は羨道の充填土より出土した。また、鉄刀１点は、玄室左側壁沿いの床面上、奥壁から95cmの位置で検出された。

５号墳　５号墳は直径9.5m、高さ1.5mの円墳で、その主体部は西に開口する両袖式の横穴式石室である（図15－上）。玄室は縦長の長方形で長さ1.7m、幅1.1m、羨道は幅0.7m、その左側壁の長さ1.5mである。遺物は検出されていない。

６号墳　６号墳は直径8.9m、高さ1.5mの円墳で、その主体部は西に開口する両袖式の横穴式石室である（図15－下）。玄室は縦長の長方形で長さ1.6m、幅１m、羨道の長さ1.2mである。

出土遺物には、須恵器片２片、土師器片１片、鉄鏃４点以上、鉄刀１点以上、刀子１点以上、器種不明鉄器１点、勾玉１点、切子玉４点、丸玉３点、小玉３点、耳環４点があるという。それらのうち耳環の内訳は、1982報告の遺物概要記載箇所の内容（p.26）から判断すれば、銅芯金箔張耳環２点、銀製無垢耳環１点、錫製無垢耳環１点であると考えられる。

遺物のうち須恵器片１片が玄室内埋土から、須恵器片１片と土師器片１片が羨道の充填土から出土した以外は、玄室床面から原位置で検出された。詳細にみていくと、奥壁から20cm、右側壁から20cmの位置で勾玉１点、切子玉４点、丸玉１点、小玉１点、耳環１点が集中して検出され、またその周囲15～40cmの範囲では丸玉２点が検出された。ただし、1982報告の記述からは、この耳環が銀製無垢耳環であるのか錫製無垢耳環であるのかを判断できない。右側壁沿いでは、奥壁より30cmの位置で器種不明鉄器が、奥壁より50cm付近から玄門にかけての位置で鉄鏃片、鉄刀片、刀子片が重なった状態で検出された。他方、左側壁沿いでも若干の鉄片が出土した。また、玄門から40cm、左側壁から40cmの付近で耳環３点が検出された。それらのうち２点は銅芯金箔張耳環であることがわかるが、もう１点の材質は判断できない。

なお、今回の再整理作業において、1982報告では言及されていない鉄剣の切先片１点の存在を確認した。また、刀子は４点の存在を確認したが、うち１点は鉄鏃の茎である可能性もある。鉄鏃については、鏃身部が遺存するもの３点、茎部のみが遺存するもの２点を確認した。小玉については３点の出土と報告されているが、１点のみしか確認できなかった。耳環にかんしては、３号墳と同じく、出土古墳不明とした10片のなかに６号墳出土のものが含まれている可能性がきわめて高い。

７号墳と８号墳　７号墳と８号墳については発掘調査が行われていないが、７号墳は直径６m、高さ0.5m未満の円墳で、その主体部は西に開口する横穴式石室、８号墳は直径８m、高さ２mの円墳で、その主体部の様子はわからないと報告されている。

古墳の時期と築造順序　1982報告では、出土した須恵器の型式から、１号墳および３号墳の築造時期は５世紀第４四半期頃とされた。また、玄室の平面形が正方形に近いものから長方形へ変化するとの前提に立ち、これに古墳の立地などを勘案して、１号墳がもっとも古く、そののち３号墳、４号墳、２号墳、５号墳、６号墳の順に築造されたと判断された。だたし、１号墳と３号墳、４号墳と２号墳がそれぞれ同時期に並ぶ可能性も考慮すべきであるとされた。そして、カミノハナ古墳群は５世紀後葉から６世紀後半にかけて造営された古墳群であると推測された。（杉井）

第３章　出土遺物の現状と再整理の対象遺物

１　出土遺物の混乱と再整理作業開始の契機

1981・1982年のカミノハナ古墳群第１次・第２次調査で出土した遺物は、熊本大学文学部考古学研究室にて保管されている。しかし、第２章でも記したように、調査から25年以上が経過した今、発掘調査報告書（米倉編1982，以下では1982報告と記述）で提示されたすべての遺物を確認できない状態にある。

たとえば、今回の再整理作業において、３号墳出土の勾玉３点の行方をつかむことはできなかった。鉄鏃にかんしても、かつての接合箇所で分離しているものが多く、1982報告で示された実測図の状態にまで復元できないものがあった。また、１号墳出土の鉄斧は銹化が著しく進行しており、その刃部は層状に剥離し、袋部はいくつかの破片となって分離していた。それを本来の姿に戻そうと試みたが不可能であった。さらに、1982報告に掲載されなかった資料のなかに両頭金具が５点存在することを確認したが、それらがどの古墳から出土したものなのかを知ることはできなかった。

こうしたカミノハナ古墳群出土遺物の混乱を認識するに至ったのは、熊本大学に在籍した学生の幾人かが当該遺物を卒業論文の題材として取り扱ったことがきっかけである。そして、彼らによって、1982報告に掲載された実測図や記述に見過ごすことのできない誤りがあることが指摘された。それと同時に、当該遺物は、天草諸島のみならず、日本列島における古墳時代の政治動向を考察するうえできわめて重要な資料であることが示された。

また、上天草市史大矢野町編の編纂事業にかかわって、カミノハナ古墳群と同じ上天草市に所在する千崎古墳群を、2003年度から2008年度までの６年間、継続的に調査できたことも大きかった（森編2005，前田編2006，三好・仙波編2007，山野・有馬編2008，一本・髙濱編2009）。こうした現地調査を通じて、天草諸島の地理的環境を理解することができ、カミノハナ古墳群の重要性も強く認識したのである。

さらに、有明海側の資料であるが、熊本県鹿本郡植木町に所在するとされるマロ塚古墳から出土した鉄製武器・武具類の調査を2002年度から開始していたことも（杉井・檀編2003）、カミノハナ古墳群出土遺物を重視するきっかけとなった。マロ塚古墳出土遺物は、遺存状態がきわめて良好な甲冑類を多く含み、国の重要文化財に指定されている。しかし、正式に報告されたことがなかったため、所蔵者の国立歴史民俗博物館の協力をあおぎ、その報告書を作成するとともに古墳時代中期武器武具がもつ諸問題を検討することを目的とした共同研究組織を立ち上げていたのである。その報告書は2009年度中に刊行される予定であるので詳細はそちらを参照していただきたいが、マロ塚古墳出土遺物に含まれる横矧板鋲留短甲や独立片腸抉式長頸鏃はカミノハナ古墳群でも出土しているから、有明海側と八代海側を総合して古墳時代の動向を考察するためには、両者を比較検討する視点がきわめて重要であると考えたのである。

そして、もっとも大きかったのは、円筒埴輪や形象埴輪、須恵器、甲冑、鉄鏃などを専門分野とする学生が育ってくれたことである。私（杉井）の思いがいくら強くても、実際に遺物を正しく観察、実測し、原稿を書き上げることができる人材がそろわなければ、こうした活動の実現はおぼつかない。彼らの存在が、カミノハナ古墳群出土遺物の再整理作業の開始を決意させたのである。　　（杉井）

表４　1982報告で示された遺物と再整理対象遺物の関係

	1982報告（米倉編1982）の内容			本書の内容
	出土遺物の種類		数	
1号墳	埴輪	円筒埴輪	178片	96点を確認、実測図提示
		形象埴輪		
	須恵器	甕	１点	実測図提示、ほかに坏身の実測図提示
		大甕	１点	
		器台	１点	
	武具	短甲残欠	数片	冑・綴片として実測図提示
	武器	鉄鏃	45～50点	鏃身部から推測できる最小個体数56点（～60点）、実測図提示
		鉄剣	１点	未確認、1982報告の誤記か
	工具	刀子	１点	２点を確認、実測図提示
		鉄斧	１点	破損のため未整理・未報告
	装身具	小玉	151点	166点を確認、本文中で言及、実測図は未提示
2号墳	須恵器		数片	実測図提示
	土師器		数片	未整理・未報告
	武器	鉄鏃	言及されず	頸部もしくは茎部片１片を確認、実測図提示
		鉄剣	１点	実測図提示
	農工具	刀子	２点	実測図提示
3号墳	須恵器		56片 （大甕４、坏蓋13、坏身３）	実測図提示
	武具	短甲	１点（破片140片以上）	実測図提示
	武器	鉄鏃	５点以上	鏃身部遺存４点、頸部から茎部遺存６点、頸部遺存３点、茎部遺存２点を確認、実測図提示
		鉄刀	２点以上	１点を確認、切先部分と刀身・茎部分に分けて実測図提示
	工具	刀子	２点以上	２点を確認、ほかに錐１点を確認、実測図提示
	装身具	勾玉	３点	所在不明、言及せず
		丸玉	48点	ガラス小玉280点を確認、本文中で言及、実測図は未提示
		小玉	232点	
		耳環	４片	錫製無垢耳環片１片のみを確認 出土古墳不明とした10片に含まれる可能性が高い
4号墳	須恵器	甕	破片	未整理・未報告
		提瓶	破片	
	土師器		破片	未整理・未報告
	武器	鉄刀	１点	実測図提示
6号墳	須恵器		２片	１点のみ実測図提示
	土師器		１片	未整理・未報告
	武器	鉄鏃	４点以上	鏃身部遺存３点、茎部遺存２点を確認、実測図提示
		鉄刀	１点以上	１点を確認、刀身部分と茎部分に分けて実測図提示
		鉄剣	言及されず	切先片１片を確認、鉄鏃の可能性もあり、実測図提示
	工具	刀子	１点以上	４点を確認、うち１点は鉄鏃茎部の可能性もあり、実測図提示
	器種不明鉄器		１点（責金具と記述）	実測図提示
	装身具	勾玉	１点	本文中で言及、実測図は未提示
		切子玉	４点	本文中で言及、実測図は未提示
		丸玉	３点	本文中で言及、実測図は未提示
		小玉	３点	１点を確認、本文中で言及、実測図は未提示
		耳環	４点	銅芯金箔張耳環２点、錫製無垢耳環片３片を確認 出土古墳不明とした10片のうち銀製無垢耳環片１片は６号墳出土のものと思われる
出土古墳不明	武器	両頭金具	言及されず	５点を確認、実測図提示

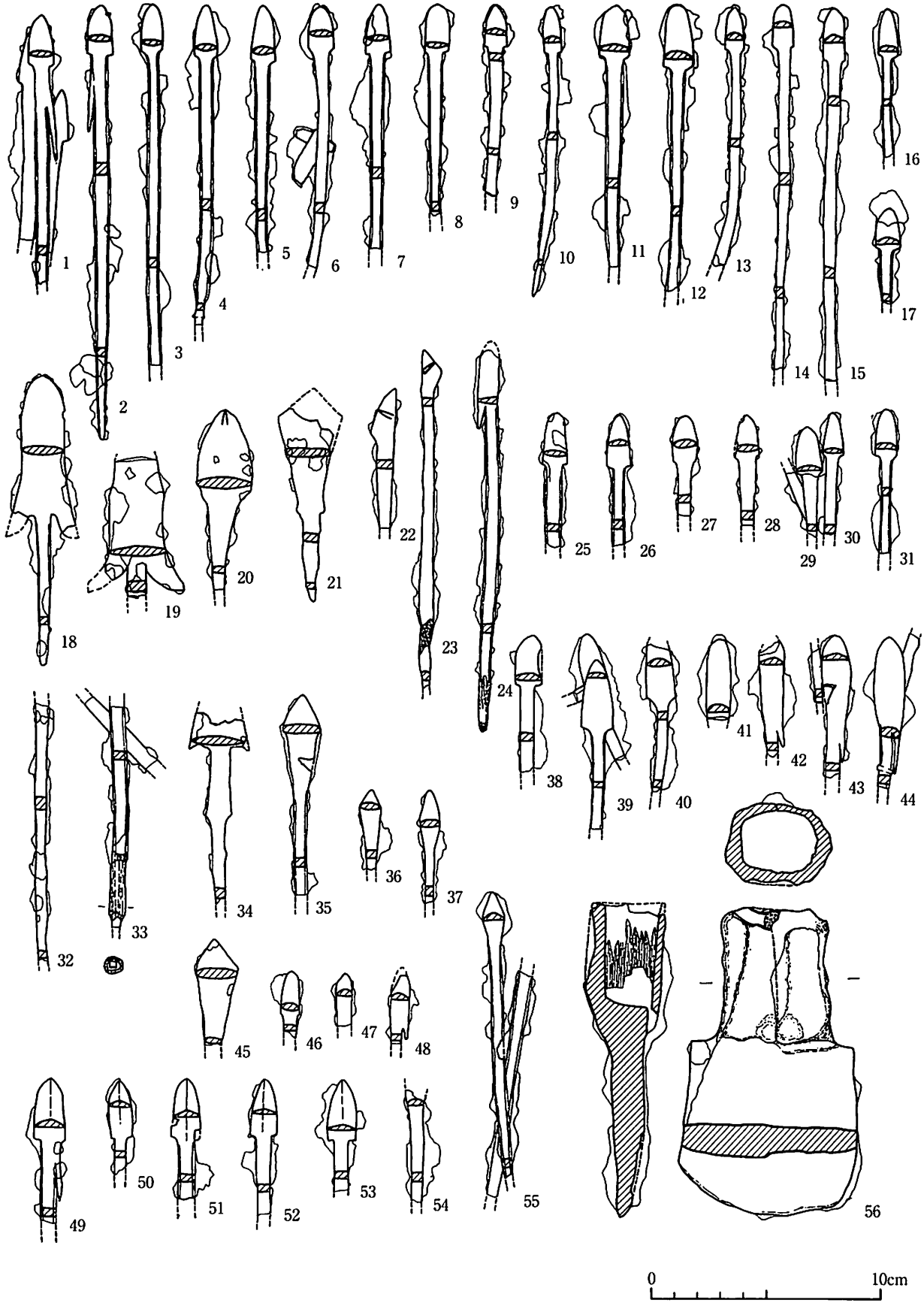


図16　1982報告で示された鉄鏃・鉄斧実測図

2　再整理の対象とした遺物

理想をいうならば、カミノハナ古墳群から出土したすべての遺物を対象に再整理作業を行うべきである。当初はもちろんそれを目指し、洗浄もなされていない未報告の遺物までもビニール袋から取り出して新たな整理番号を付した。また、銹化により大きく破損した鉄斧の接合も試みた。しかし、限られた時間と経費のなかではおのずと限界があった。そこで、今回は、古墳の時期やその性格を考えるうえで重要と思われるものを優先して再整理し、報告することにした。

再整理の対象とした遺物は、1982報告に記載された内容と対応させるかたちで、表４に示した。また、鉄鏃については、本書掲載の実測図との対照を容易にするため、1982報告で示された実測図をそのまま図16として転載した。

なお、遺物それぞれについての報告とともに、それらが横穴式石室内のどの位置から出土したのかを明示することの重要性は十二分に承知している。それは、石室内における埋葬方式や追葬のあり方などを考察するためには、欠くことのできない情報である。したがって、1981・1982年調査時に作成された遺物出土状況図を探し出し、その記載内容と実際の遺物の対照を試みた。しかし、図面に残された情報に不十分な点があること、注記がなされていないため出土古墳が不明となっている遺物があることなどの理由により、対照作業を十分に行うことはできなかった。そのため、出土状況については、1982報告の内容を要約し第２章に記すにとどめた。今後、かなりの時間と労力を費やすかもしれないが、何らかのかたちでこれを補うことができればと思っている。　（杉井）

第４章　出土遺物の再整理報告

以下で示すのは、1981・1982年の発掘調査で検出された遺物の再整理報告である。かつての発掘調査報告書（米倉編1982）については「1982報告」と記すことにするが、そのなかで報告された遺物のどれを対象に再整理を行ったのかにかんしては前章の表４に示したので、そちらを参照していただきたい。ほかに、円筒埴輪については本章の表５で、鉄鏃については表６・７・９・10で、その対応関係を提示した。（杉井）

１　１号墳出土遺物

（１）須恵器（図17，図版１）

１号墳からは、坏身、瑞、高坏形器台、甕が出土した。

図17－１は坏身である。破片であるため、ロクロの回転方向などはわからない。

２は瑞である。穿孔部は内外面とも面取りを施し、きれいに仕上げている。外面は灰がかぶっており、緑色の自然釉がかかる。

３・４は高坏形器台である。３は高坏形器台の坏部である。底部側はタタキをナデ消している。４は高坏形器台の脚部である。透孔は上段には４方向、下段には６～８方向である。穿孔後面取りなどは行っていない。それぞれ別個体である。

５・６は甕の胴部である。外面は平行タタキの上から横方向のカキ目、内面は同心円文当て具痕をナデ消そうとしている。

なお、各古墳出土須恵器の位置付けは、１～３号墳出土のものを比較しながら検討したいので、３号墳出土遺物のところ（54頁）で述べる。（木村）

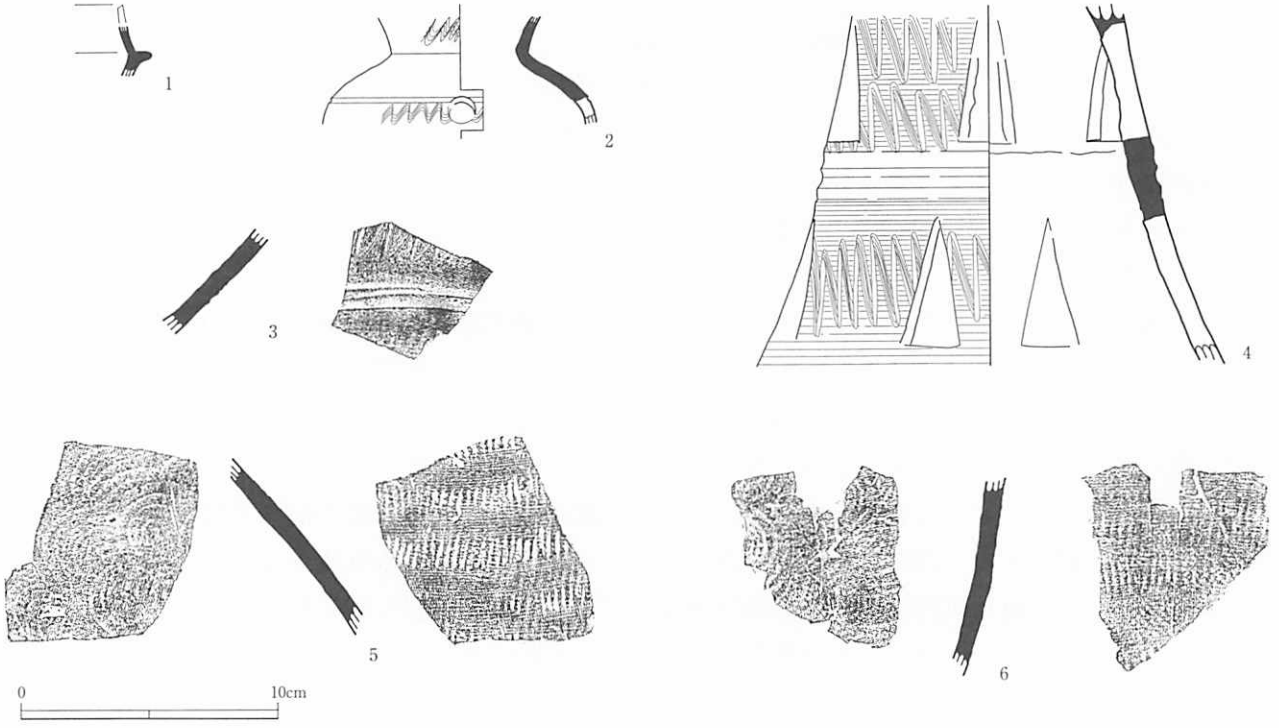


図17　１号墳出土須恵器実測図

（２）埴輪

１号墳の墳丘トレンチと石室内埋土から円筒埴輪片と形象埴輪片が出土している。点数にして96点で、表面の摩滅した細片が多く、いずれも原位置を保ったものではない。　（竹中）

①円筒埴輪（図18～21，表5，図版３・４）

普通円筒と朝顔形円筒の２種が存在する。いずれも無黒斑で窖窯焼成によるものである。細かくみれば、器壁の厚さや突帯の形状等、異同はあるものの、総じて器壁は薄く、突帯突出度は高い。外面二次調整ヨコハケは認められないものの、古墳時代中期の中葉、川西編年Ⅳ期に比定される。詳細については本書第Ⅳ部の竹中論文を参照していただきたいが、さらに限定すれば、県内出土資料との相対的比較により、須恵器ＴＫ208型式階段に位置付けられる。

以下に、口縁部、胴部、底部に分けて報告する。ただし、胴部、底部については普通円筒、朝顔形円筒それぞれとの対応が判別できないため、一括する。なお、全周するものはなく、図面はすべて反転復元による。

普通円筒口縁部　図18－１～７は普通円筒口縁部片である。

１は直線的にやや外傾しながら立ち上がったのち、口縁端部付近において大きく外反する。幅２cm程で端部整形のナデが施され、口唇面はやや窪む。端部は、ナデ整形を２度行ったとみえ、上部１cm程にナデが重なり、端部付近の形状はやや内湾気味となっている。外面調整は８条／cmの目の細かなタテハケであるが、上半は斜位のタテハケである。内面は摩滅が激しいが、一部、同一工具による横位に近いナナメハケで、その上からナデを施している。

２はほぼ垂直に立ち上がったのち、端部付近において外反する。摩滅が激しく調整は判然としないが、内面においては一部に５～６条／cmの横位に近いナナメハケが残る。

３は口縁部段と直下の胴部段の一部が残る。胴部が垂直に立ち上がったのち、口縁部は直線的にやや開き気味に立ち上がり、端部付近上部において大きく外反する。全体的に器厚がやや薄手で、口唇部は先細りの印象を受ける。突帯は細身で、上面、横面、下面ともにほぼ平坦に整えられた断面台形状である。一部突帯が剥落する箇所があるが、器面に沈線などによる突帯設定技法の施工は認められない。焼き上がりはやや悪く、断面では芯が黒く焼け残るサンドイッチ状を呈す。一部、目の細かいハケかと思しき痕跡がみえる部分もあるが、判然としない。

４は直線的にやや外傾しながら立ち上がったのち、端部付近において大きく外反する。外面調整は９条／cmのタテハケ、内面調整はナデと思われるが、摩滅により判然としない。上部２cm程は端部整形のナデである。

５は直線的に立ち上がったのち、上部がスプーン状に内湾する。端部成形のナデの入る範囲と対応しており、ナデの施工時にこのような形状になったものであろう。摩滅が激しいが、外面の一部に４条／cmの、やや目の疎らなタテハケが残る。内面にも、一部にヨコハケかと思しき痕跡があるが、判然としない。なお、５と後述する11は、1982報告において同一資料として報告されていたが、確実に合致する箇所はなく、また接合させた場合、３・７に比して口縁部段の長さが極端に短い個体となるため、別資料と判断した。ただし、器厚やハケメから、同一個体である可能性は高い。

６は薄手で、やや外反気味である。端部断面長方形状で、幅２cm程で端部整形時のナデが残る。外面調整は４条／cmのタテハケで、内面調整は摩滅のため不明である。

７は口縁部段と直下の胴部段の一部が残る資料である。最大で１／４周程が残り、当墳出土資料中では、もっとも残存状態の良い資料である。形状としては胴部から口縁部、口唇部までほぼ直線的に

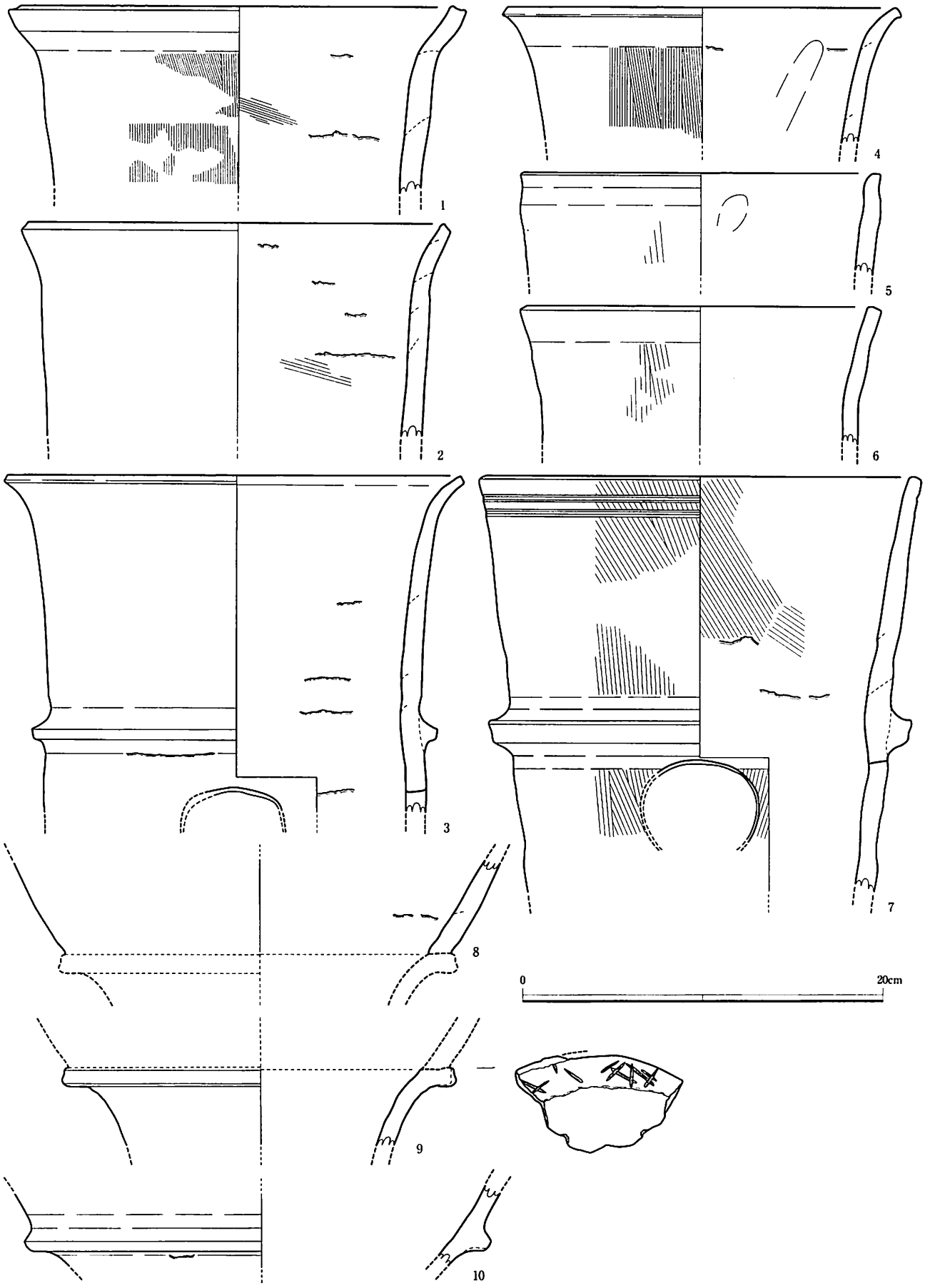


図18　1号墳出土円筒埴輪実測図（1）

立ち上がる。外面の口唇直下に幅４㎜の浅い凹線が２条巡る。透孔は口縁直下段において、突帯の下辺に接する程上方に穿孔されており、１／２周程が残存し、横6.5cm、縦5.5cm程の楕円形の形状と思われる。突帯は大きく、横面と下方はほぼ平坦に整えられているが、上面は端部がやや突出気味の断面台形状である。一部突帯が剥落するが、器面に沈線などによる突帯設定技法の施工は認められない。外面調整は４～５条／cmの、やや条線の疎なタテハケにより、口縁部上位１／３ほどは斜位のタテハケによる。内面の口縁部上位２／３程は、外面調整と同工具によると思われるナナメハケが断続的に入り、以下はナデと思われる。他の個体は、口縁端部成形にともなうナデにより、外面、内面ともに上部２cm程の幅でハケメが消されるが、この個体のみはナデが施されず、内面、外面ともにハケメが残る。

以上の口縁部片は、ほぼ垂直に立ち上がったのち、口縁端部付近が外反するもの（１～４）と、直線的にやや外傾しながら立ち上がる直口縁のもの（５～７）の２種に大別できる。さらに、外反するものは直線的に屈曲するもの（１・２）と緩く弧を描くように外反するもの（３・４）に細分される。外面調整のタテハケは８・９条／cmの目の細かいもの（１・４）と、４・５条／cmのやや目の粗いもの（５～７）の２種が存在し、外面に限れば外反口縁は目の細かいもの、直口縁は目の粗いものに対応しているが、外反口縁である２の内面にも目の粗いハケメが認められ、口縁形状とハケメとの間に対応関係はなさそうである。また、外反口縁の３には細めの突帯が、直口縁の７には太めの突帯が付設される。

朝顔形円筒口縁部　図18－８～10は朝顔形円筒の口縁部である。

８と９は、接合はしないものの、同一個体と考えられる。８は朝顔形二重口縁の第２口縁（上部口縁）片、９は第１口縁（下部口縁）片で、８の下面と接着する９の上面には、接着を助長するため、長1.5cmほどの短い線刻が無作為に施され、８の下面にはこの線刻に対応する凸線がかすかにみられる。第１口縁、第２口縁別々に成形された後、接合されたものと考えられる。また９の有段部突帯に相当する箇所は、いったん、口唇部状に丁寧なナデ仕上げを施した後、８との接合後、有段部突帯を強調するためか、粘土を充填して仕上げてある。８・９の内外面ともにナデ仕上げと思われるが、摩滅が激しく判然としない。

10は朝顔形二重口縁有段部片である。８・９と異なり、第１口縁、第２口縁相当部分ともに一時に積み上げたのち、外面に突帯を付設して二重口縁を表現している。有段部突帯は下辺に粘土を充填して形を整えている。摩滅が激しく調整は不明であるが、外面は目の細かなタテハケともみえる。

朝顔形円筒に関しては、有段部のみの出土であり、肩部や頸部、第２口縁の形状等不明である。第１口縁の傾き（９・10）からみて、肩部から大きく外反（ないし外傾）しながら立ち上がり、有段部へと至る、頸部と第１口縁が一体化した形状と思われる。二重口縁の製作法には２種が認められ、８・９は第１口縁と第２口縁が別箇に成形される、二重口縁の本来的な作り方をしているが、10は第１口縁と第２口縁を一体で成形した後、外面に突帯を付設して二重口縁を表現するという、より埴輪的な成形法となっている。

胴部　図19－11～19は胴部片である。

11は１／４周程が残存する。若干外傾するが、ほぼ垂直に近く、直線的に立ち上がる。器壁は非常に薄手で、上段がやや外反気味のため、口縁部段の可能性がある。突帯は上面、横面、下面ともにほぼ平坦に整えられた断面台形状である。外面調整は６～７条／cmのタテハケであるが、突帯を境に上下段で連続はしていない。内面調整は、下段は同工具によると思われる断続的な斜位のヨコハケ、上

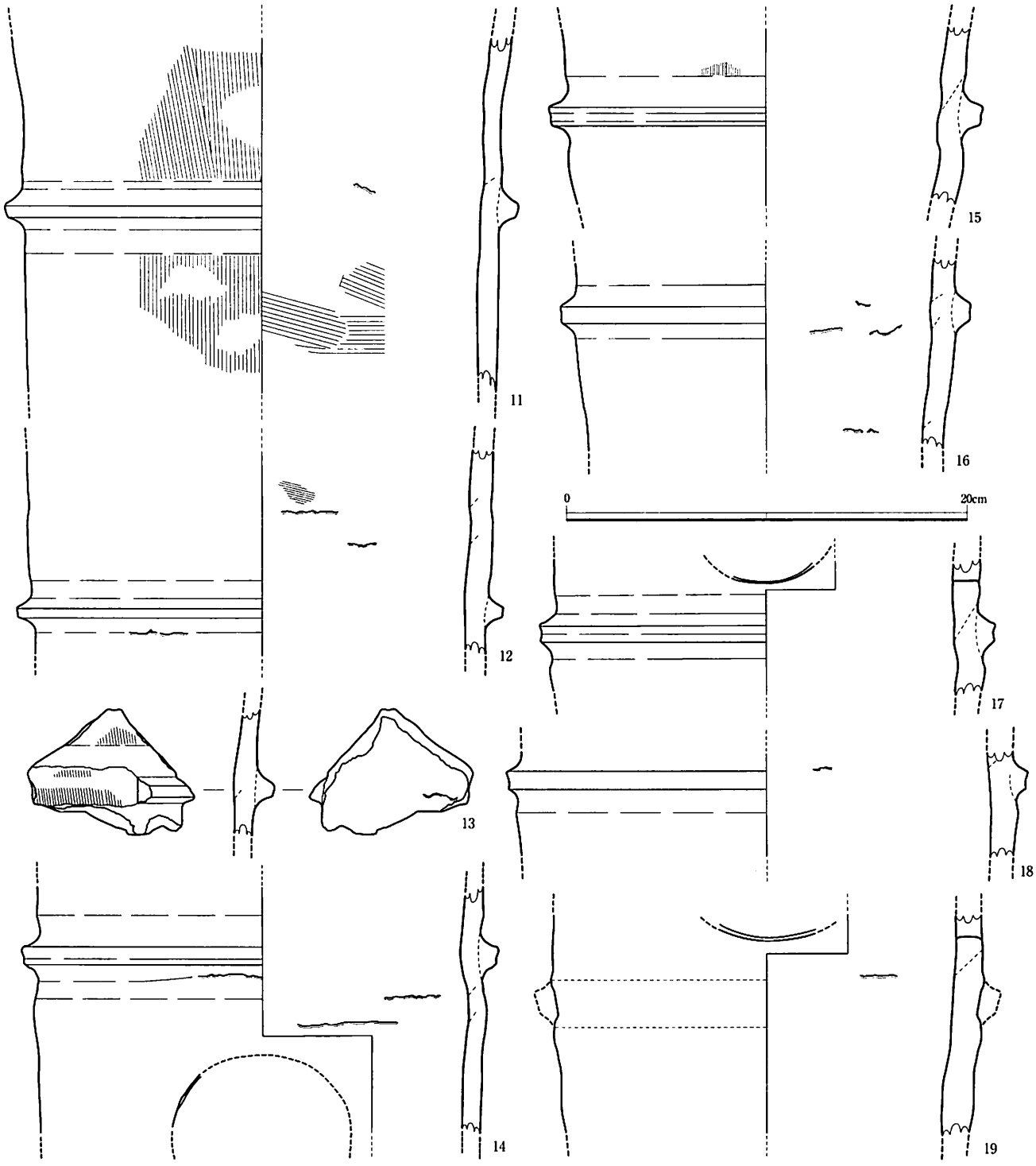


図19　1号墳出土円筒埴輪実測図（2）

段は指ナデによる。

12はほぼ垂直に立ち上がり、突帯は細身で、上面、横面、下面が平坦に整えられた断面台形状である。突帯下辺の貼り付けはやや粗雑で、一部、接合痕が残る。摩滅が激しく調整は不明瞭であるが、内面のごく一部に10条／cmの目の細かなハケメが残る。

13は一部突帯の剥落した器面に、幅5mm程度のナデが施されており、突帯設定技法の可能性がある。突帯は細身の断面台形状である。内外面ともに摩滅が激しいが、突帯剥落箇所において、8条／cmの目の細かなタテハケが観察できる。

14はやや薄手で、突帯位置の器壁が大きく内湾する。突帯は大振りな断面台形状で、横面はナデに

よりやや窪む。突帯下辺の貼り付けはやや粗雑で、一部、接合痕が残る。透孔が一部に残るが、やや不整形な印象を受ける。内外面ともに摩滅が激しく、調整は不明である。

15はやや外傾しながら立ち上がる。突帯は大振りな台形で、横面はナデによりやや窪む。摩滅が激しいが、外面の一部に12条／cmの目の細かなタテハケが残る。

16は直線的にやや外傾しながら立ち上がる。突帯はやや大振りな断面台形状で、稜はやや丸味を帯びている。内外面ともに摩滅が激しく調整は不明である。

17はやや厚手で、突帯も横面中央がナデにより大きく窪んだ大振りの断面台形状である。焼成は他の個体と比べても遜色ないものではあるが、厚手のため、断面中央はやや黒色に焼け残る。摩滅が激しく調整は内外面ともに不明で、一部透孔が残る。

18は17と同じく厚手で大振りな突帯をもつ。摩滅が激しく、内外面ともに調整は不明である。

19も厚手で、一部に透孔が残る。突帯は完全に剥落しており、器面に突帯設定技法の施工は認められない。摩滅が激しく、調整は内外面ともに不明である。

以上の胴部片は器厚が1.0cm前後でやや薄手のもの（11～14）と、1.2cm前後でやや厚手のもの（15～19）に大別される。傾きをみると、器壁の薄いものは総じて垂直に立ち上がり、厚いもののなかでも比較的残りの良い15・16・19は、やや外傾気味に立ち上がるようである。突帯は、薄手のものには細めの、厚手のものには太めのものが付設される。両者の突帯高はほぼ同程度であるが、形状の違いにより、器壁が薄いものに付設されるものの方が突出度が高くみえる。調整に用いられるハケメは５条／cmのやや目の粗いもの（11）と８・10条／cmの目の細かいもの（12・13・15）の２種があるが、器厚とハケメ条線の粗密に対応関係はない。なお器厚の違いは、胴部のなかでも口縁部段に近いものは薄く、底部段に近いものは厚いという、部位の違いである可能性もあるが、器厚と突帯形状の異同がよく対応しており、個体の違いと捉えて間違いなさそうである。

図20－20は外面に縦位の沈線が施され、胴部片と思われるが、あるいは形象埴輪片の可能性もある。内外面ともに摩滅により調整は不明であるが、外面は平滑に整えられている印象を受け、ナデ調整かもしれない。

底部　図20－21～25は底部片である。

21は底端部断面長方形状で、外反しながら立ち上がる。内外面ともに摩滅が激しく、調整は不明である。

22は底端部断面長方形状で、やや外傾気味に立ち上がる。内外面ともに摩滅が激しく、調整は不明である。焼成状態はやや悪く、軟質である。

23はほぼ垂直に立ち上がると思われ、底部は外面にやや膨らむ。内外面ともに摩滅が激しく調整は不明である。焼き上がりがやや甘く、断面はサンドイッチ状に黒い芯が残る。

24は底面が外側に肥厚し、ほぼ垂直に立ち上がる。内外面ともに摩滅が激しく調整は不明であるが、外面には「人」の字にも似た線刻がある。内面底面付近は、成形時の指押さえ痕跡が明瞭である。また底面には成形時の粘土板合わせ目が明瞭である。

25は底部段と直上段の一部が残存する。ほぼ垂直に立ち上がるプロポーションで、底面は内側に肥厚する。突帯は完全に剥落しているが、突帯貼り付け位置は緩く内湾しており、器面に沈線などによる突帯設定技法の施工はみられない。上部段に円形透孔の下辺の一部が残るが、やや不整形な印象を受ける。内外面ともに摩滅が激しく、調整は判然としないが、外面突帯剥落位置において、かすかに目の細かなタテハケ（10条／cmか）が残る。内面はナデ調整と思われるが、あまり精緻に施工しな

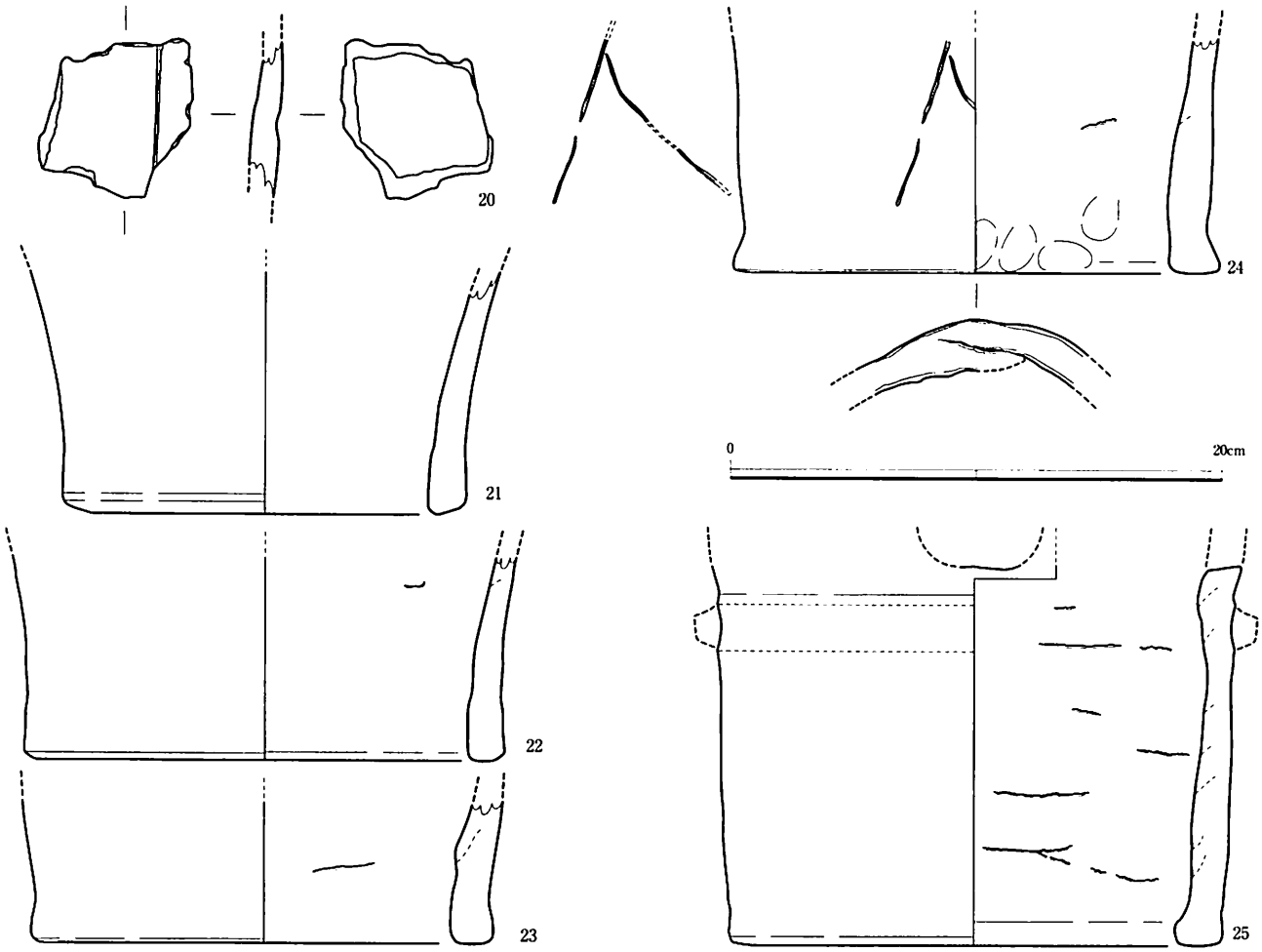


図20　1号墳出土円筒埴輪実測図（3）

かったものとみえ、1.5～2.5cmおきに粘土紐の接合痕が残る。

底部段の形状は、やや外傾気味に立ち上がるもの（21・22）と、ほぼ垂直に立ち上がるもの（24・25）の2種に大別される。外傾気味に立ち上がるものは底面付近の成形が断面長方形状で整っているが、垂直に立ち上がるものは端部が突出する。また、底部段の器厚は底面付近より上方は総じて1.0cm前後の薄手である。また径については、21が15.9cmでやや小さく、他の22～25は18.4～20.0cmで、径からも2種に分かれそうである。

円筒埴輪の復元　以上にみてきた口縁部、胴部、底部のいずれにおいても、やや外傾しながら直線的に立ち上がるものと、ほぼ垂直に立ち上がるものに大別される。傾きとハケメ条線の別に対応関係はないものの、外傾しながら立ち上がるものはやや大振りな突帯をもち、垂直に立ち上がるものは細身の突帯をもつことも共通しており、それぞれが同一個体とはいわないまでも、同系統の個体であると思われる。そこで、外傾するものをAタイプ、垂直のものをBタイプとして全形の復元を試みる（図21）。

まず各段の高さであるが、Aタイプの口縁部7は口縁上端から突帯上辺まで13.5cm、Bタイプの3は13.9cmで、近似している。胴部段の高さについては、もっとも残りの良いBタイプの11より9.5cm以上であることはわかるが、突帯2条が残る資料はなく、正確な値は分からない。そこで、透孔の上辺ないし下辺と突帯が残る資料において、いずれも透孔は7と同じく縦5.5cmの楕円形で、胴部段の中央に穿孔されていると想定し、突帯と透孔の上辺・下辺との間隔と、透孔の想定径から突帯間隔を

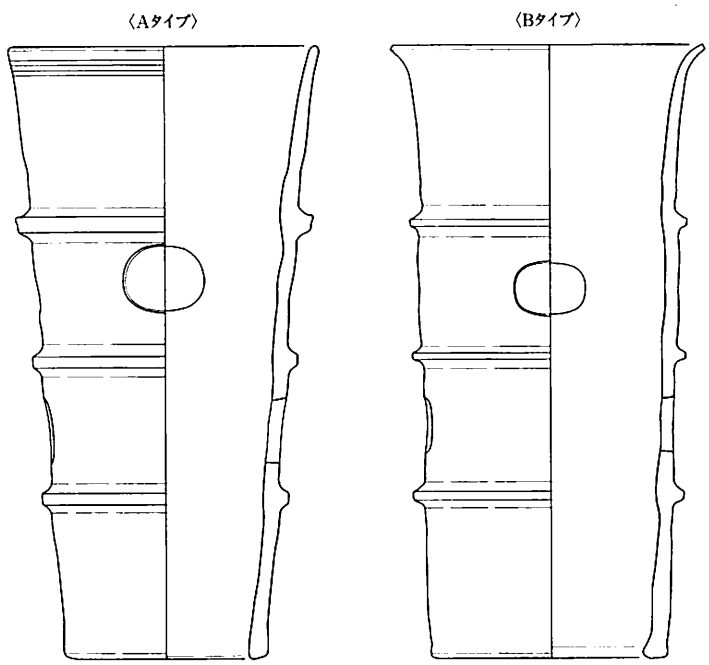


図21　円筒埴輪の復元案（Scale：１/６）

復元すると、３は11.1cm、７は8.5cm、17は10.5cm、19は11.5cm、25は10.5cmとなり、７以外は11.0cm前後でまとまりがあり、蓋然性が高い。これらのうちＡタイプは３の11.1cm、Ｂタイプは19の11.5cmであるが、口縁部と同じく、値は近似する。なお、７の8.5cmは他と比べて極端に短い値であり、透孔が偏って穿孔されているものと考えざるを得ない。底部段の高さがわかる資料は13.2cmの25だけである（突帯そのものは剥落しているため、推定)。ただし、口縁部、胴部においてＡタイプ、Ｂタイプの値はそれぞれ近似しているため、底部においても両者に差はないものと考えたい。以上をまとめると、Ａタイプ、Ｂタイプともに口縁部14.0cm弱、胴部11.0cm前後、底部13.2cmで、胴部に比して口縁部と底部がやや長いプロポーションとなる。

段構成が判明する資料はない。胴部として報告した資料はいずれも突帯を境に２段分が残るものであり、仮に上下の段それぞれに透孔が認められれば、２段ともに胴部ということになり、突帯３条４段以上の構成であるということができる。しかしそのような資料はなく、上段ないし下段がそれぞれ口縁部、底部である可能性を否定できない。ただし、仮に４条５段構成と考えた場合、前述の各段の高さを当てはめると、全高60.2cmという値が求められ、そのような大型の個体が、総じてやや軟質な焼き上がりで、胴部器厚1.0cm前後という非常に薄手な作りと考えるのは、やや無理がある。また外傾するＡタイプの口縁部７が、そのままの傾きで底部に至ったと仮定すると、４条５段の場合、その底部径は14cm前後となるが、出土資料中、最小径は21の15.9cmで、合致するものはない。ちなみに、同じ方法で３条４段構成、２条３段構成それぞれの場合のＡタイプの底径を求めると、前者が16cm、後者が18cmとなる。先に底部径も２種に別れることを述べたが、うち、小さめの21が15.9cmで、３条４段構成の場合の値に近い。また、図示した資料22点（朝顔形口縁部は除く）は、いずれも部位を確定できるものを選別したものであるが、その内訳は口縁部７点、胴部10点、底部５点で、胴部資料がもっとも多い。仮に、口縁部、胴部、底部が各１段ずつの２条３段構成の場合、各部資料の比率は同程度になるのではあるまいか。つまり当墳の普通円筒埴輪は、３条４段構成である可能性がもっとも高い。

透孔の配置が判明する資料もない。ただし、先に触れたように、胴部片において突帯を境とした２段分ともに透孔の認められる資料はないから、少なくとも各段並行配置ではない。また口縁部直下段（３・７)、底部直上段（25）それぞれに透孔が認められ、１段分のみに穿孔されているわけではない。つまり３条４段構成の場合、２段目と３段目における段違い直交配置と考えられる。

以上より、Ａ・Ｂ両タイプを復元したのが図21である。ラッパ形とはいかないまでも、台形状のプ

表5　1号墳出土円筒埴輪観察表

図面番号	器種	部位	法量（cm）			突帯高	焼成	色調		調整		胎土	備考	1982報告番号	注記記号
			口	胴	底			外面	内面	外面	内面				
1	普通円筒埴輪	口縁部	25.1	—	—	—	良好	明黄褐色	明黄褐色	タテハケ(8条／cm)、端部ナデ工具選び左→右	一部ナナメハケ(8条／cm)	径3mm以下の砂粒を含有	口縁端部内湾気味の外反	第4図1	MK82－19・20
2	普通円筒埴輪	口縁部	23.3	—	—	—	良好	黄褐色	黄褐色	不明	一部ナナメハケ(5～6条／cm)	径2mm以下の砂粒を多量に含有		—	MK82－25
3	普通円筒埴輪	口縁部＋胴部	25.1	20.8	—	—	やや良	黄褐色	黄褐色	不明	不明	径3mm以下の砂粒を多量に含有	円形透孔一部残	—	MK82－14・18・19・20
4	普通円筒埴輪	口縁部	22.1	—	—	—	良好	黄褐色	黄褐色	タテハケ(9条／cm)工具選び右→左	ナデか	径2mm以下の砂粒を多量に含有		—	MK82－5
5	普通円筒埴輪	口縁部	19.9	—	—	—	やや良	黄褐色	黄褐色	タテハケ(4条／cm)端部ナデ	不明(ハケか)	径2mm以下の砂粒を含有	1982報告では11と同一資料として報告	第4図3	MK82－7
6	普通円筒埴輪	口縁部	20.0	—	—	—	やや良	黄褐色	黄褐色	タテハケ(4条／cm)端部ナデ工具選び左→右	不明(ハケか)	径3mm以下の砂粒を含有			MK82－12
7	普通円筒埴輪	口縁部＋胴部	24.5	20.1	—	—	良好	明赤褐色	明赤褐色	タテハケ(5条／cm)工具選び右→左	口縁部斜位のタテハケ、胴部指ナデ	径3mm以下の砂粒、径1mm以下の赤色粒子含有	口縁外面沈線2条、円形透孔一部残	第4図4	MK82－1・18・20・54
8	朝顔形円筒埴輪	二重口縁第2口縁部	—	—	—	—	良好	明赤褐色	明赤褐色	不明	不明	径3mm以下の砂粒、径2mm以下の赤色粒子含有	9と同一個体、1982報告では上下逆	第5図10	MK82－20
9	朝顔形円筒埴輪	二重口縁第1口縁部	21.6	—	—	—	良好	明赤褐色	明赤褐色	不明	不明	径3mm以下の砂粒、径2mm以下の赤色粒子含有	第2口縁との接合面に短線刻、有段部突帯に粘土充填	第5図11	MK82－34
10	朝顔形円筒埴輪	二重口縁有段部	—	—	—	—	やや良	明赤褐色	明赤褐色	タテハケか	不明	径2mm以下の砂粒、赤色粒子を含有	援二重口縁、突帯部下辺粘土充填	—	MK82－26
11	円筒埴輪	胴部(+口縁部か)	—	23.2	—	0.9	やや良	黄褐色	黄褐色	タテハケ(5条／cm)工具選び右→左	上段ナデ下段断続的ナナメハケ(5条／cm)	径2mm以下の砂粒を含有	1982報告では5と同一資料として報告	第4図3	MK82－18
12	円筒埴輪	胴部	—	22.6	—	0.8	やや良	黄褐色	黄褐色	不明	一部ナナメハケ(10条／cm)	径2mm以下の砂粒、赤色粒子を含有		—	MK82－13・34・59
13	円筒埴輪	胴部	—	—	—	0.9	やや良	明黄褐色	明黄褐色	タテハケ(8条／cm)	ナデか	径2mm以下の砂粒を含有	突帯剥離面に幅5mmのナデ	—	MK82－14
14	円筒埴輪	胴部	—	22.0	—	0.8	やや良	明黄褐色	明黄褐色	不明	不明	径3mm以下の砂粒、赤色粒子を含有	円形透孔一部残	—	MK82－10
15	円筒埴輪	胴部	—	20.0	—	0.8	良好	黄褐色	黄褐色	一部タテハケ（10条／cm）	不明	径2mm以下の砂粒、赤色粒子を含有		—	MK82－8
16	円筒埴輪	胴部	—	18.6	—	0.7	良好	明赤褐色	明赤褐色	不明	不明	径3mm以下の砂粒、赤色粒子を含有		—	MK82－18
17	円筒埴輪	胴部	—	21.5	—	0.7	やや良	明赤褐色	明赤褐色	不明	不明	径1mm以下の砂粒、径3mm以下の赤色粒子含有	円形透孔一部残	—	MK82－45
18	円筒埴輪	胴部	—	24.9	—	0.6	良好	黄褐色	黄褐色	不明	不明	径2mm以下の砂粒、赤色粒子を含有		—	MK82－18
19	円筒埴輪	胴部	—	21.3	—	—	やや良	明赤褐色	明赤褐色	不明	不明	径2mm以下の砂粒、赤色粒子を含有	円形透孔一部残	—	MK82－14
20	円筒埴輪か	胴部か	—	—	—	—	やや良	明赤褐色	明赤褐色	ナデか	ナデか	径3mm以下の砂粒、径1mm以下の赤色粒子含有	外面縦位の沈線	—	MK82－48
21	円筒埴輪	底部	—	—	15.9	—	良好	黄褐色	黄褐色	不明	不明	径2mm以下の砂粒、赤色粒子を含有		—	MK82－54
22	円筒埴輪	底部	—	—	19.1	—	やや良	明赤褐色	明赤褐色	不明	不明	径2mm以下の砂粒、赤色粒子を含有		—	MK82－18
23	円筒埴輪	底部	—	—	18.4	—	やや良	明赤褐色	明赤褐色	不明	不明	径2mm以下の砂粒、赤色粒子を含有		—	MK82－9・14
24	円筒埴輪	底部	—	—	19.7	—	良好	明赤褐色	明赤褐色	不明	底付近は指オサエ明瞭	径3mm以下の砂粒、赤色粒子を含有	外面「人」字状線刻	第5図9	MK82－19・20
25	円筒埴輪	底部＋胴部	—	—	20.0	—	良好	明赤褐色	明赤褐色	タテハケ(10条／cm)か	ナデか	径2mm以下の砂粒、赤色粒子を含有	円形透孔一部残	第5図8	MK82－4

ロポーションで突帯の大振りなＡタイプは定型化したというに相応しい安定観があり、長方形状で口縁部が外反し、細身な突帯のＢタイプは、全体に繊細な印象を受け、やや独自色が強い。一見して同じ古墳出土の個体とは思えない程、印象が異なり、少なくとも、同一人の手によるものとは考えにくい。細部をみれば、口縁部形状などは、前述のようにさらなる細分が可能であり、Ａタイプ、ＢタイプはＡ集団、Ｂ集団と言い換えられる可能性もあるが、資料数が少なく、そこまで踏み込むことはできない。また朝顔形円筒二重口縁の２種の成形法も、それぞれＡ・Ｂ両タイプのどちらかに対応するものであろう。印象としては、第１口縁と第２口縁が一体化した埴輪的な作りのものが、定型化したＡタイプに対応するのではないか。

以上、当墳においては二系統の製作者の存在を想定できる。ただし、どちらの手による円筒埴輪も、突帯設定技法の施工は認められないながらも、全高や各段の高さ、口縁部径などは見事に整合しており、カミノハナ１号墳という１つの古墳に樹立する埴輪としての統一は充分に成されている。また口縁部径が揃い、外傾と外反という違いはあるものの、「口縁部が開く」形状を成していることも、同一古墳に樹立される埴輪としての製作上の統一イメージであったのかもしれない。　　（竹中）

②形象埴輪（図22・23，図版５）

人物埴輪片（１～７）、鳥形埴輪片（８・９）、器種不明形象埴輪片（10）が存在する。円筒埴輪同様、いずれの破片も無黒斑で窖窯焼成によるものである。

人物埴輪　　まず、人物埴輪片（図22－１～７）について述べる。

１および２は頭部片である。１は右耳周辺部分、２は左耳周辺部分の破片である。両破片とも摩滅が激しく調整は不明瞭である。破片資料であるため、頭部全体の詳細な製作方法は不明であるが、幅３cm程度の粘土紐を用いて製作されている。また、耳部は、①頭部成形、②頭部左右に耳たぶとなる粘土の貼り付け、③刀子のような工具による耳穴穿孔、という手順で製作されている。

３は首部片である。摩滅が激しく調整は不明瞭である。径約0.7cmの粘土粒が３個並べて貼り付けられており、これは、首飾りを表現したものと考えられる。

４は腕部片である。1982報告ですでに示されている資料である。摩滅が激しく調整は不明瞭であるが、腕は、幅９～12cm程度の板状の粘土を丸め、つなぎ合わせることにより中空に作られている。

５は土器の形を模した埴輪である。一見すると、ミニチュア土器のようにもみえる。しかし、土器に人物埴輪の手のひら部分がはがれたような痕跡がみられることから、５は、人物埴輪の付属品であったと考える。摩滅が激しく調整は不明瞭である。ここで、注目すべき点として、５の底部に径0.6cmの小孔が穿孔されている点があげられる。この点は、1982報告でも「底部には焼成後に穿孔を加えている」と報告されている（米倉編1982：p.15)。しかし、今回、再報告するにあたりあらためて観察をおこなったところ、土器底部小孔の周辺には、焼成後に穿孔した場合にみられる、打ち欠いたような痕跡が認められなかった。よって、土器底部の小孔は、焼成前に棒状工具によって穿孔されたと考えられる。また、このように土器底部に小孔を穿孔することによって、人物埴輪が捧げもつこの土器が日常器ではなく、祭器であるということを表現したと考えられる。

６は人物埴輪の衣裾である。裾がスカート状に広がり、破片上部には人物埴輪胴部との接合部が確認できる。また、正面からみた最大幅は裾部で31.5cm、最小幅は人物埴輪胴部との接合部で16.7cmである。一方、横幅は26cm程度と、正面幅に比べやや狭くなっており、全体として楕円形を呈している。外面にはタテハケ、内面にはユビナデが施されている。また、破片上部と下部に２列の列点文が施されている。この列点文は意須衣などの衣服を表現していると考えられる。

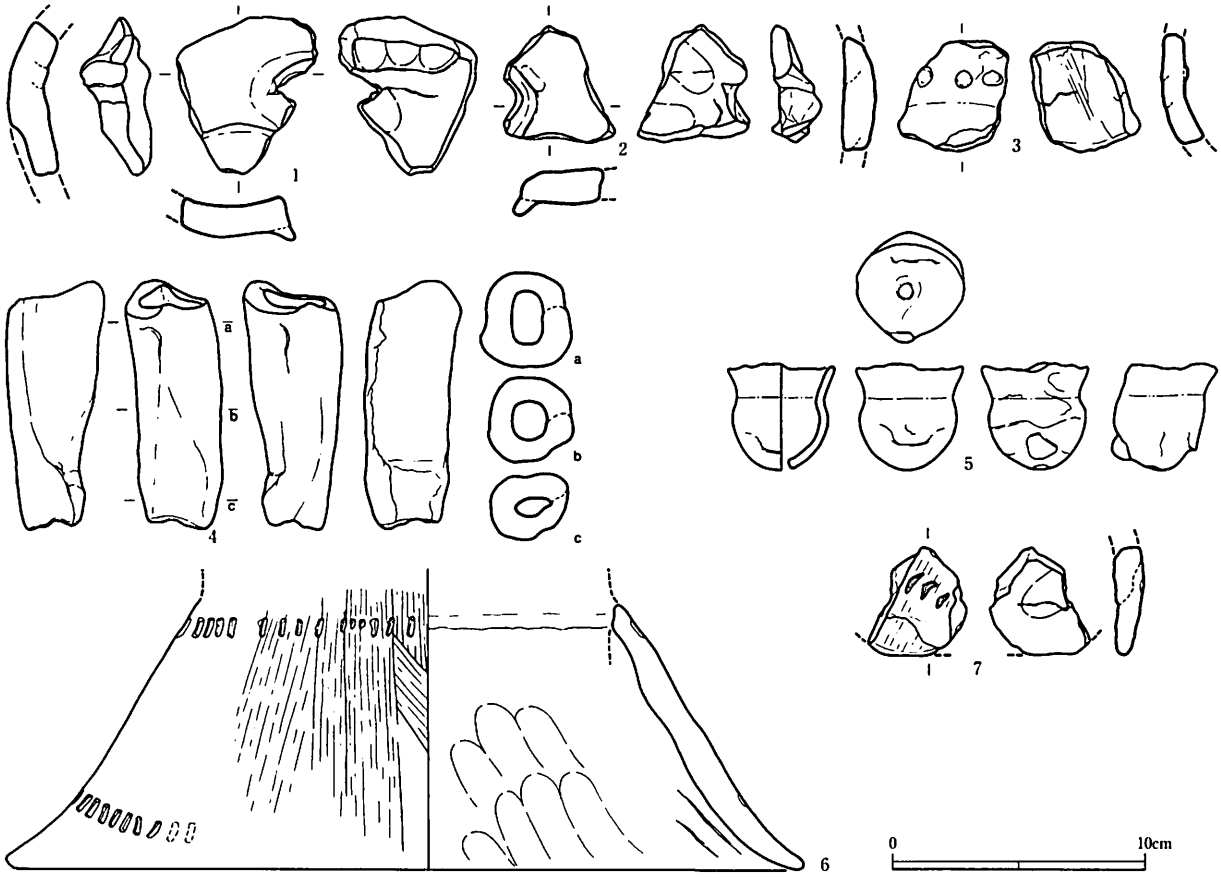


図22　1号墳出土形象埴輪実測図（1）

7は、小片であるため、器種が判然としない。しかし、6と同じような列点文が施されていることから、7も人物埴輪の衣片であると考えられる。摩滅が激しく調整は不明瞭であるが、外面にはハケ調整が施された痕跡がわずかに残る。

以上より、人物埴輪片についてまとめる。これら1～7の人物埴輪片は胎土、色調、焼成などの特徴が極めて類似しており、同一個体であると考えられる。そして、これら埴輪片が、①首飾りを表現していること（3）、②土器を捧げもつこと（4・5）、③衣裾片には意須衣を表現したような列点文が認められること（6・7）などの特徴をもつことから、カミノハナ1号墳出土の人物埴輪は巫女であったと考えられる。

鳥形埴輪　次に、鳥形埴輪（図23－8・9）について述べる。

8は、1982報告で鞆とされた資料である。しかし、あらためて検討をおこなった結果、①破片右側と左側では復元した際の傾斜角度が異なり、鞆のように正面からみた形が円形状にはならないこと、②破片右側には鳥形埴輪の首部など円筒状の破片が剥離した痕跡が認められることなどから、鳥形埴輪である可能性が高いと考えられる。摩滅が激しく調整は不明瞭である。外面には突帯より上部に沈線が施されている。沈線は、破片のA部分を中心にするような曲線とそれに交わるような線が無造作に施されている。また、破片のA部分には、径0.7cmの小孔が穿孔されている。この小孔の存在については1982報告でも指摘されているが、そこでは焼成後に穿孔されたとしている。しかし、この小孔も、5と同様に焼成前に穿孔されていることが今回の再整理で明らかとなった。また、この小孔が、破片の中央よりもやや側面にずれて地面に向かうように斜方向に穿孔されていることから、これは、

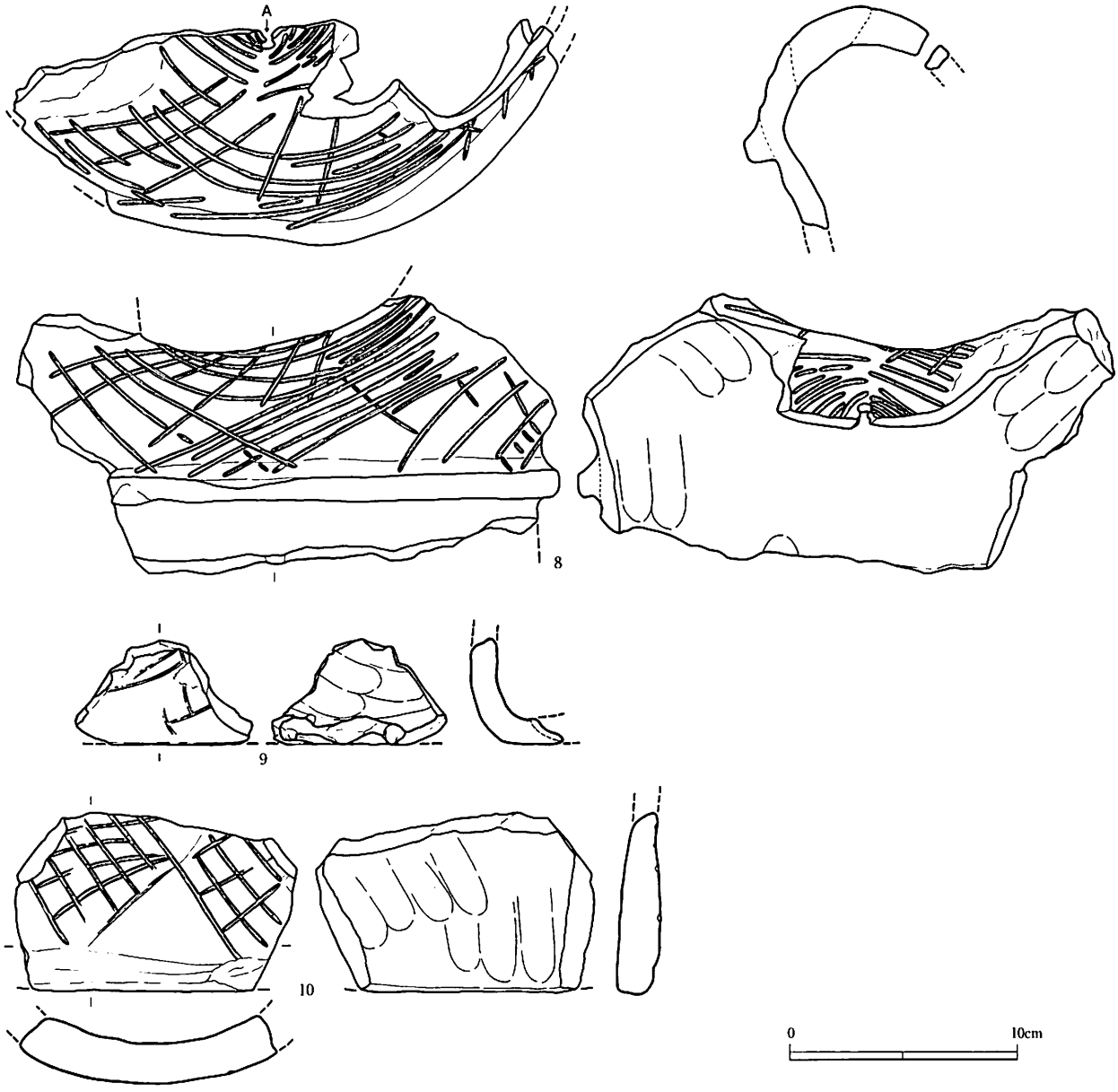


図23　１号墳出土形象埴輪実測図（２）

製作時に埴輪の形が崩れないよう支柱を刺していた痕跡と考えられる。

９は、尾付近の破片と考えられる。破片の形状より、鳥形埴輪の尾側は閉塞されずに、解放されたままであったと考えられる。摩滅が激しく調整は不明瞭であるが、内面にはユビナデが施されている。外面には、８と同じような沈線がわずかに残る。

８・９は、胎土、色調、焼成が類似しており同一個体であると考えられる。このように無造作に沈線を施した鳥形埴輪は、他に類例がみられない。しかし、円筒状の首部が剥離したような痕跡がみられること（８）などを考えると、鳥形埴輪である可能性がもっとも高い。カミノハナ１号墳出土形象埴輪の場合、先にみた巫女形埴輪も列点文で衣服の表現をするなど、他地域出土の埴輪にはみられないような特異な文様が施されている。また、器壁も薄く、全体的に形象埴輪のつくりが稚拙である。このことから、１号墳の形象埴輪を製作した工人は、在地の工人と考えられ、他地域で作られていた巫女形埴輪や鳥形埴輪の形態を模倣して製作し、文様は工人が自由に表現した可能性が高い。

器種不明形象埴輪　最後に、器種不明形象埴輪片について説明する。

図23－10は、外面に斜格子文を施した基部片である。摩滅が激しく調整は不明瞭である。径24cm程度の円筒状に復元できる。８・９同様、鳥形埴輪の一部かとも考えられるが、先にも触れたように、カミノハナ１号墳出土の鳥形埴輪（８・９）は突帯より上部にのみ文様を施しており、基部には文様がみられない。このことから、10は、８・９とは別個体であると考えられる。形態的特徴から器財埴輪片もしくは動物埴輪片かと思われるが判然としない。（前田）

（３）武具

１号墳からは多くの鉄片が出土している。今回、資料の再整理にあたって１号墳出土鉄片をすべて観察したところ、冑、鍔の破片と判断されるものが存在していることが明らかになった。それら以外の鉄片に関しても、厚さなどから冑もしくは鍔のいずれかの破片であると考えられるものは多い。しかし、細片化が著しいために、明確に判断ができないものがほとんどである。

以下では、冑あるいは鍔のいずれかと判断することができた鉄片について図示し、概要を述べ、その位置付けを試みることにする。（西嶋）

①冑片（図24－１～4，図版10・19）

冑の破片であると判断できるのは４点で、帯金片、地板片に分けられる。

図24－１・２・４は帯金片である。１は外面に鋲が１つ確認できるが内面には鋲脚が認められず、結合していた地板が欠損したものと思われる。鋲は平面形態が円形、断面形態が半球形で、鋲頭の高さは約2.5㎜である。鉄板は、厚さが1.7㎜で、縦方向には直線的、横方向にはわずかに内湾している。２も外面に鋲が１つ確認でき、内面には鋲脚が認められない。鋲の形態は、平面形態が円形、断面形態が半球形であり、鋲頭の高さは約２㎜である。鉄板の厚さは1.7㎜である。これらの破片は胴巻板、腰巻板のいずれかにあたるものであるが、細片のために部位を判断することができない。４は、腰巻板下辺部の破片である。他の鍔片と比べ、下端部が折り返されていないことから、鍔下端部の破片とは考えがたい。Ｘ線画像を観察した結果、下辺沿いに鍔付孔が３つ確認できる（図版19）。鉄板の厚さは約２㎜で、縦方向は直線的で、横方向はわずかに内湾している。

３は地板片である。内面に鋲脚が認められるが、外面は結合していた地板が剥離している。鋲脚の平面形態は不整形な楕円形である。鉄板の厚さは1.7㎜で、縦方向、横方向いずれもわずかに内湾している。小片であるために、地板形状を判断することができない。（西嶋）

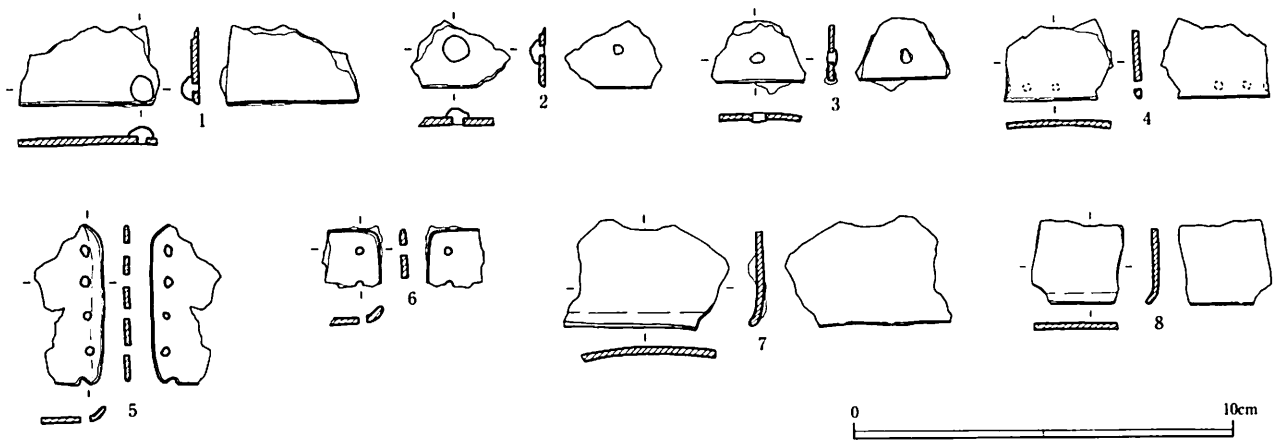


図24　１号墳出土冑・鍔片実測図

②鋺片（図24－５～8，図版10・19）

鋺と判断できる破片は４点で、鋺前端部片、下辺部片がある。

図24－５・６は鋺前端部の破片である。５は小片であるが、板の上下幅を推定することができ、その上下幅は4.5cmである。前端部は、わずかに折り返されており、端辺沿いに孔が４つ開けられている。孔周辺には、わずかに有機質が遺存しており覆輪が施されていたことがわかるが、革組覆輪、革包覆輪のいずれであるかは不明である。６も５同様に前端部が折り返されており、端辺沿いに孔が２つ開けられている。有機質は遺存していない。

７・８は鋺下辺部の破片である。いずれも下端部付近が折り返されおり、鉄板の厚さは約２㎜である。穿孔や有機質の付着などは認められない。断面をみると７は横方向に内湾している。　（西嶋）

③１号墳出土甲冑の位置付け

以上で１号墳から出土した甲冑片について検討した。いずれも小片であるために冑、鋺の形態的特徴などについて得ることのできる情報はわずかであるが、そこから、１号墳出土甲冑の位置付けを試みてみたい。

冑についてわかるのは、鋲留冑であるということのみである。衝角付冑、眉庇付冑のいずれであるのかを判断しうるような特徴をもつ鉄片は存在せず、また、地板形状を判断することも現状では困難である。

鋺については、現存する破片から看取できる特徴をもとにある程度、形態を推定することができる。その特徴とは、１段の幅が約4.5cmの板金が用いられていること、鋺前端部がわずかに外側へ折り返されていること、前端部沿いに孔があり、革覆輪が施されていること、下辺部がわずかに外側へ折り返されていることである。

これらの特徴から、本例が、一段の幅が約4.5cmの板鋺であることが知れる。また、板金の前端部、下辺部はわずかに外側に折り返されており、前端部には革覆輪が施されていることがわかる。鋺の段構成を考えるに当たっては、古谷毅の指摘が参考となる。すなわち、鋲留冑に付属する鋺はほとんどの場合が３段以上のものであるという指摘である（古谷1988：p.14）。したがって、鋲留冑に付属している本例は、３段以上のものである可能性が高いものといえる。

以上の検討から、鋺の位置付けを試みたい。それには、前端部の形状と覆輪が手掛かりとなる。鋺前端部形態の変化については、鈴木一有の検討がある。2009年度刊行予定のマロ塚古墳報告書に掲載される鈴木論文にもとづけば、鋺の前端部形態は、覆輪が施されないものから、覆輪が施されるものへと変化していき、覆輪が施されないものには、板端部をわずかに折り返しているものが多いという（鈴木2009予定）。本例は、前端部がわずかに折り返されていながら、覆輪が施されているもので、両者の中間的な型式にあたるとみてよいだろう。前端部へ覆輪が施される例が盛行するのが、ＴＫ23型式段階であると位置付けられていることから、本例は、それよりやや古く、ＴＫ208型式新相段階に位置付けられるものと思われる。　（西嶋）

（４）武器

①鉄鏃（図25～30，表６・7，図版12・13・22～24）

今回の報告にともなう再整理作業において、１号墳出土として確認した鉄鏃は、破片数214点にものぼる。これらのうち、鏃身部が遺存するものはすべて図化、掲載し、鏃身部が遺失しているものに関しては、片腸抉、茎関、茎尻が遺存する破片のみを図化、掲載している。ただし、茎関、茎尻が遺

存する破片の掲載は、９割程度に留まる。掲載した鉄鏃の実測図は、肉眼観察およびＸ線画像の検討から作成している。

なお、鉄鏃はこれまでの保管状況が悪く、1982報告より欠損しているものも多かった。可能な限り接合を試みたが、1982報告に掲載された実測図の状態にまで復元できていないものもある。また、Ｘ線画像の検討により、異なる個体が誤って接合されているものが確認された。そのため、図25～30の鉄鏃実測図と、図版22～24の鉄鏃Ｘ線画像、さらには図16に示すかつての実測図の状態とは、多少印象が異なることを明記しておく。なお、1982報告に実測図が掲載されたものについては、計測表（表６・７）にかつての実測図番号を示している。ただし、1982報告の22については、その存在を確認できなかった。片刃式とされているが（図16－22)、腸抉柳葉式のものを見誤って報告された可能性が高い。

さて、鏃身部から推測できる出土鉄鏃の最小個体数は56点にのぼる。ただし、後述するように長い片腸抉部のみが残る４点（図26－21～24）を数えると、その数は60点となる。これらを大別すると、55点（～59点）の細根鏃（長頸鏃）と１点の平根鏃に分けられる。細根鏃は、鏃身部の形態および腸抉の有無によって、独立片腸抉式、段違い腸抉柳葉式、腸抉柳葉式、柳葉式の４つに細別できる。平根鏃は、腸抉柳葉式に分類される形態である。以下、細分した形態ごとに記述を進める。なお、鏃身部が欠けた資料については、別に記述する。

１．鏃身部による分類

独立片腸抉式鉄鏃　頸部片側に独立した腸抉をもつ鉄鏃で、１号墳から出土した鉄鏃のなかではもっとも数が多い形態である（図25・26－１～24，11は２点が，20は３点が銹着)。鏃身部が遺存しない21～24については、長い片腸抉をもつこと、および片刃式鉄鏃が確認できないことから、独立片腸抉式鉄鏃であったと推測する。この鏃身部の形態が判明しない４点（21～24）を含めると、独立片腸抉式鉄鏃は27点確認できることになる。

独立片腸抉式鉄鏃は、鏃身断面によって大きく２種類に分類できる。１つは断面が片丸もしくは片鎬造りのもので、仮にこれを片丸・片鎬タイプとしておく。他の１つは、断面が両丸造りのもので、仮にこれを両丸タイプとする。

片丸・片鎬タイプは、１から11の12点である。鏃身部は柳葉式で、鏃身部長2.10～2.60cm程度、同幅1.00～1.25cmを測る。鏃身関は深く切り込んだ腸抉をもつものが多い。鏃身関から独立片腸抉へは、明確な肩（変化点）を形成して腸抉先端に到る。また、片腸抉を側面の片側寄りに研ぎだす傾向がある。片丸・片鎬である鏃身部の平坦面を下に置き、切先部分を上に向けた場合、片腸抉はすべて右に付くタイプのみである。鏃身関から独立片腸抉先端までの片腸抉長は2.60～3.40cm程度、片腸抉部の切り込み長は1.30～1.80cm程度を測る。茎関が遺存する１と２では、頸部長9.50～9.60cmであり、頸部幅は中央部付近で0.50cm程度である。茎関は台形関であり、幅を増した頸部下端、すなわち関側端部を長軸方向と平行になるよう加工している。この加工部分の頸部幅は0.70～0.80cm程度を測る。

両丸タイプは、12から20の11点である。鏃身部は柳葉式で、鏃身部長1.90～2.45cm程度、同幅0.90～1.10cmを測る。鏃身関は腸抉をもち、その根元部はやや丸みを帯びるものが多い。このような加工は、片丸・片鎬タイプでは確認できない。鏃身関から独立片腸抉へは、明確な肩（変化点）を形成せず、緩やかに腸抉先端に到るものが多い。また、片腸抉を側面の中央に研ぎだす傾向がある。なお両丸タイプは、表裏が不明確であるため、独立片腸抉の左右位置が不明となる。鏃身関から独立片腸抉先端までの片腸抉長は3.10～4.70cm、片腸抉部の切り込み長は1.30～2.90cm程度を測る。頸部下端ま

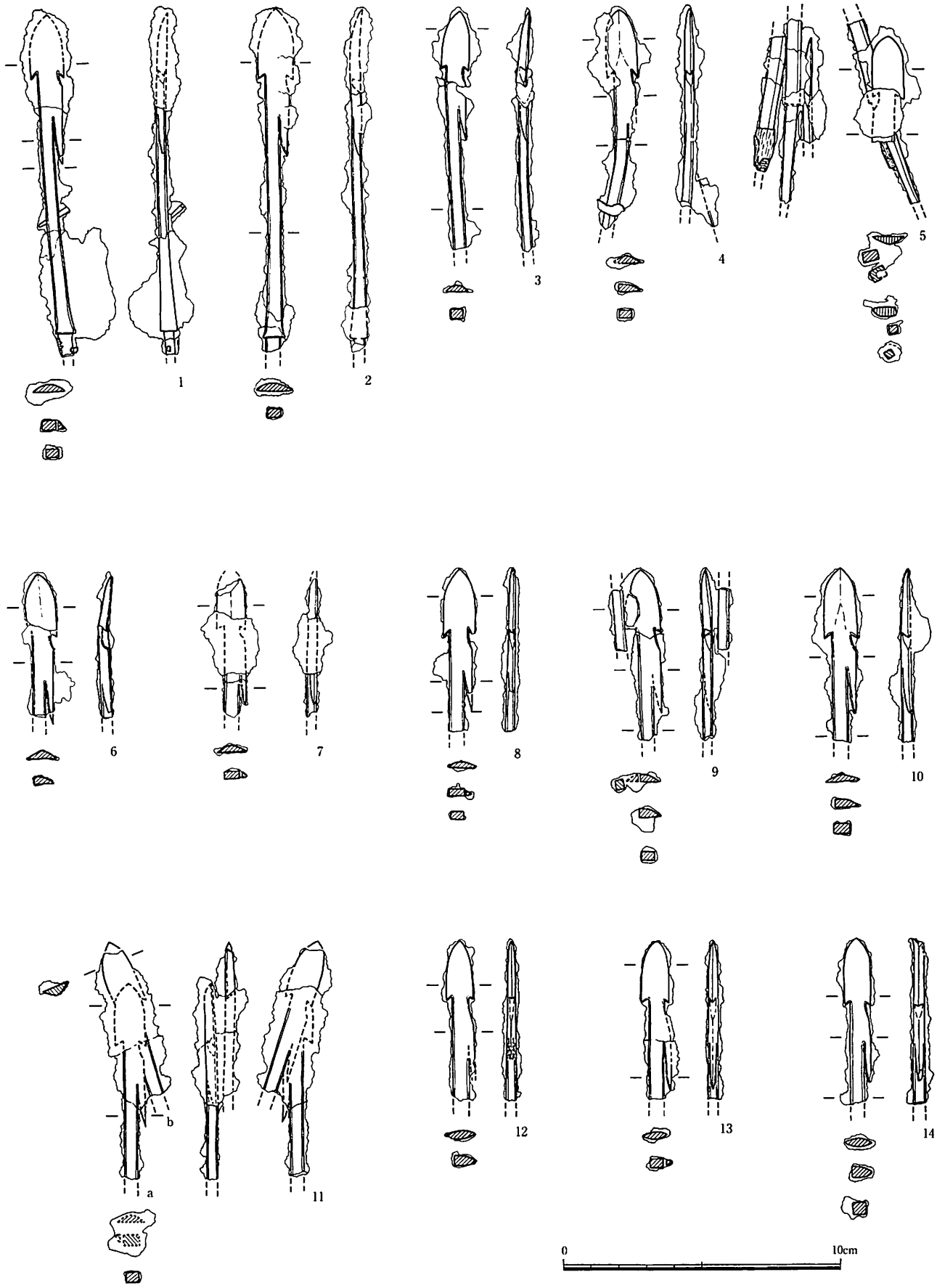


図25　１号墳出土鉄鏃実測図（１）

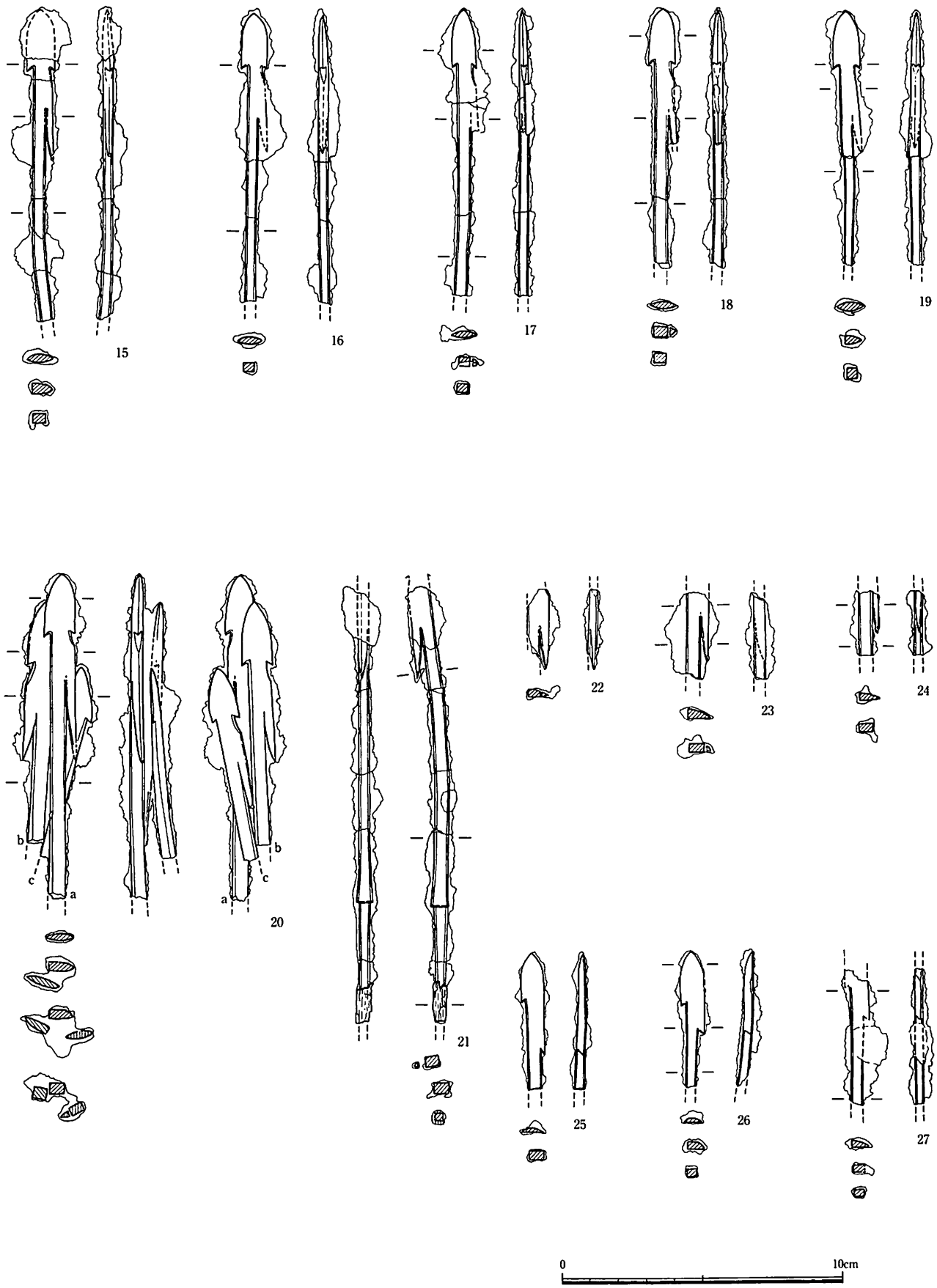


図26　1号墳出土鉄鏃実測図（2）

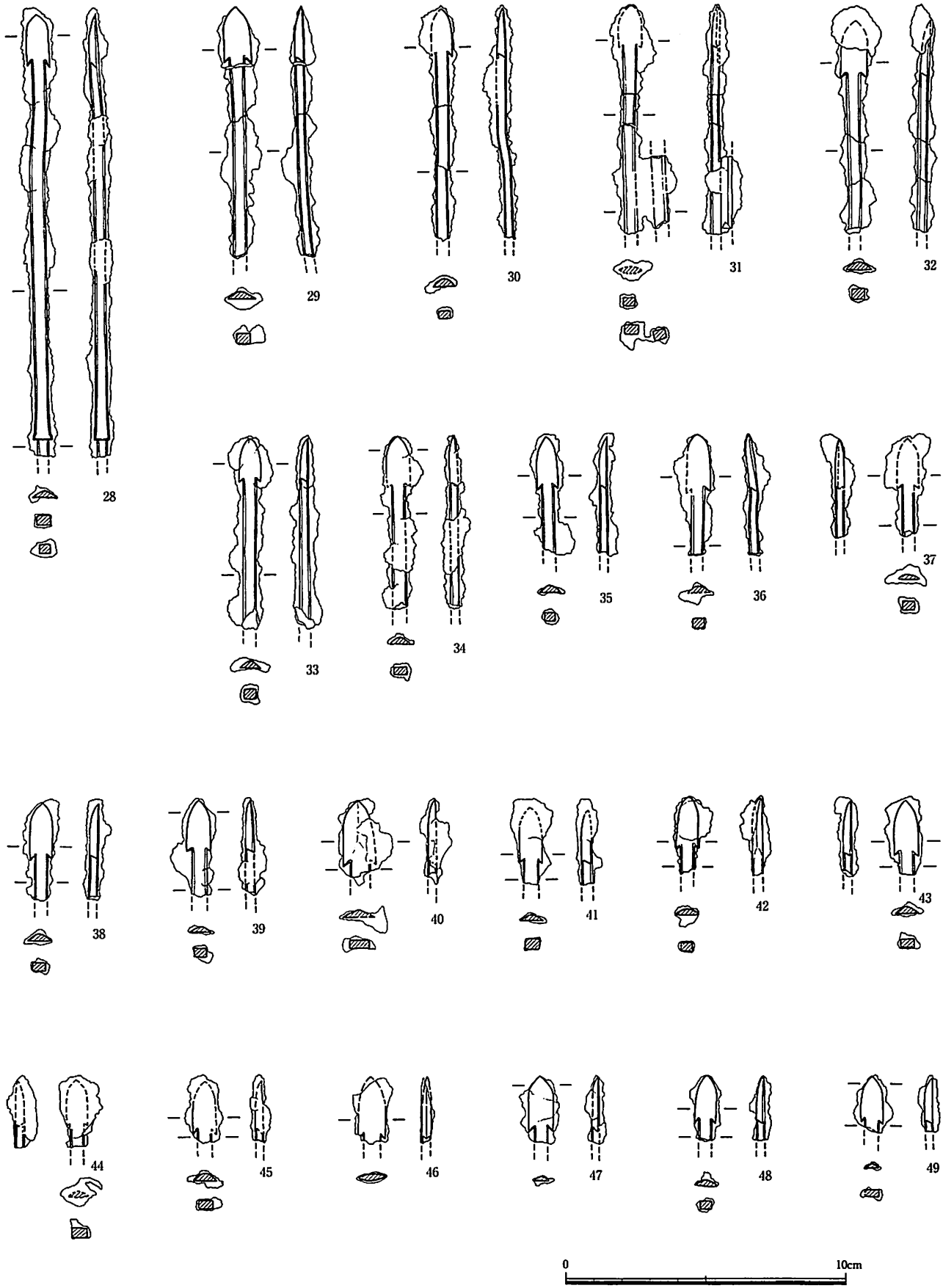


図27　１号墳出土鉄鏃実測図（３）

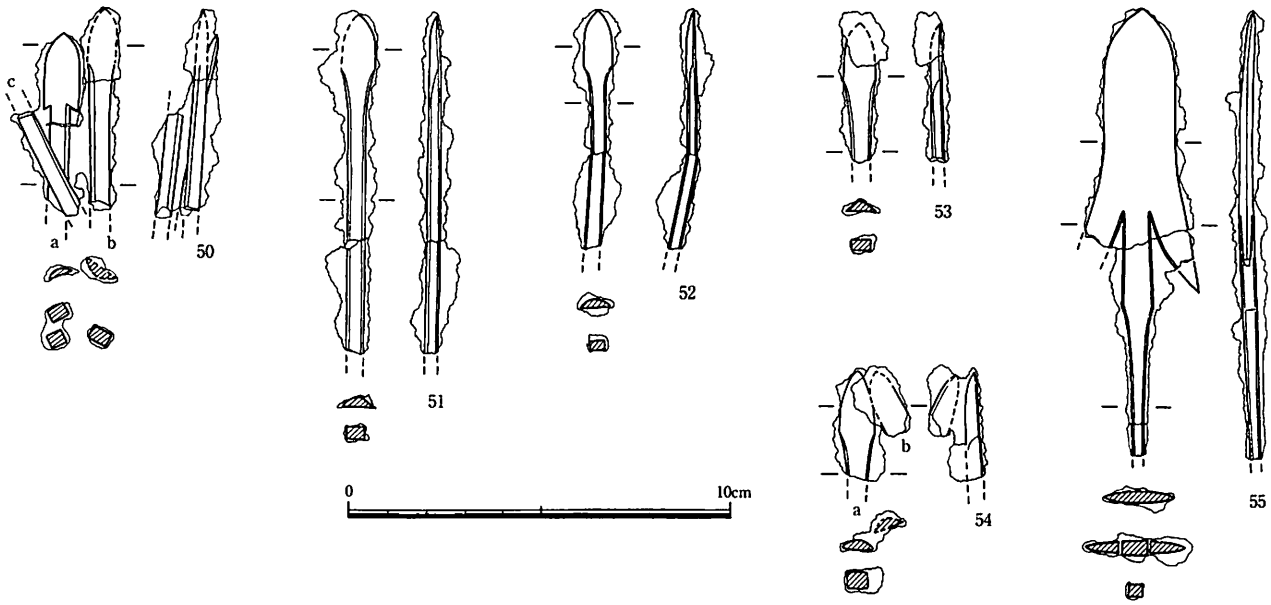


図28　1号墳出土鉄鏃実測図（4）

で遺存している個体はないが、もっとも長く遺存する20ａでは、残存頸部長9.60cm、頸部幅は中央部付近で0.50cmを測る。

なお、両丸タイプの茎関については、21を参考にしたい。21は鏃身部を遺失しているため、両タイプのどちらに属するかは不明である。しかし茎関をみると、頸部下端に向けて幅を徐々に広げるが、視覚的には直線的な角関であり、片丸・片鎬タイプの茎関とは異なるようである。さらに、片腸抉を側面の中央寄りに研ぎだしており、これは両丸タイプの特徴と共通する。よって、両丸タイプの茎関は、21のような角関を想定しておきたい。

段違い腸抉柳葉式鉄鏃　鏃身部左右の関が段違いになる鉄鏃であり、３点確認した（図26－25～27）。３点とも頸部のなかほどで欠損している。切先まで遺存している個体は、25と26である。25は鏃身部長辺3.65cm、同短辺1.80cm、同最大幅0.80cmで、26は鏃身部長辺3.00cm、同短辺2.00cm、同最大幅0.85cmを測る。また３点ともに片丸造りであり、鏃身部の平坦面を下に置いて切先部分を上に向けた場合に、長辺側の鏃身関が右にくる。鏃身関は、左右ともに浅い腸抉をもつ。

腸抉柳葉式鉄鏃　鏃身部に腸抉をもつ鉄鏃である（図27・28－28～50ａ）。独立片腸抉式鉄鏃に次いで多く、現状で23点確認できる。鏃身断面は、その多くが片丸もしくは片鎬造りである。大型品の１例を除くと、鏃身長は1.55～2.10cm、同幅0.80～1.00cmを測る。頸部上位で欠損しているものが多く、これと同じ鏃身部をもつ独立片腸抉式鉄鏃の破片を含む可能性がある。たとえば、鏃身部が大型である40と鏃身断面が両丸の46は、上記の規格に合わないことから、独立片腸抉式鉄鏃の鏃身部であった可能性がある。したがって、鏃身部が欠損した21～24の独立片腸抉式鉄鏃４点に接合するものが含まれているとすれば、腸抉柳葉式鉄鏃の本当の数は19点ということになる。

茎関まで遺存している個体は28の１点しかない。頸部長は13.65cmと長く、頸部幅は中央部付近では0.50cm程度である。茎関は台形関であるが、幅を増した頸部下端、すなわち関側端部を長軸方向と平行になるよう加工している。この関形態は、独立片腸抉式片丸・片鎬タイプの、頸端部が遺存する１・２と類似する。頸端部の幅は0.65cmである。

柳葉式鉄鏃　鏃身がナデ関である鉄鏃であり、５点確認できる（図28－50ｂ・51～54ａ）。50は

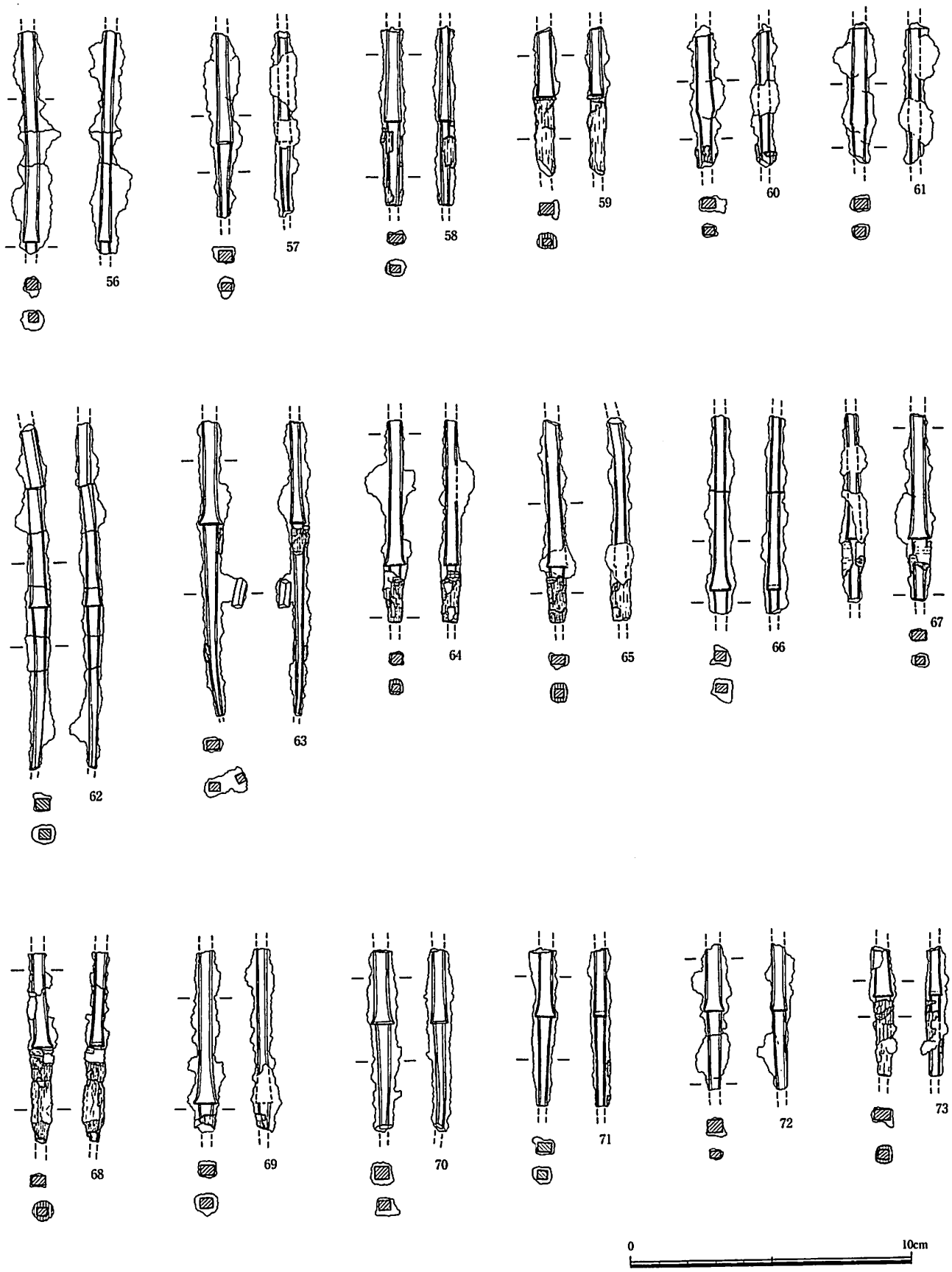


図29　１号墳出土鉄鏃実測図（５）

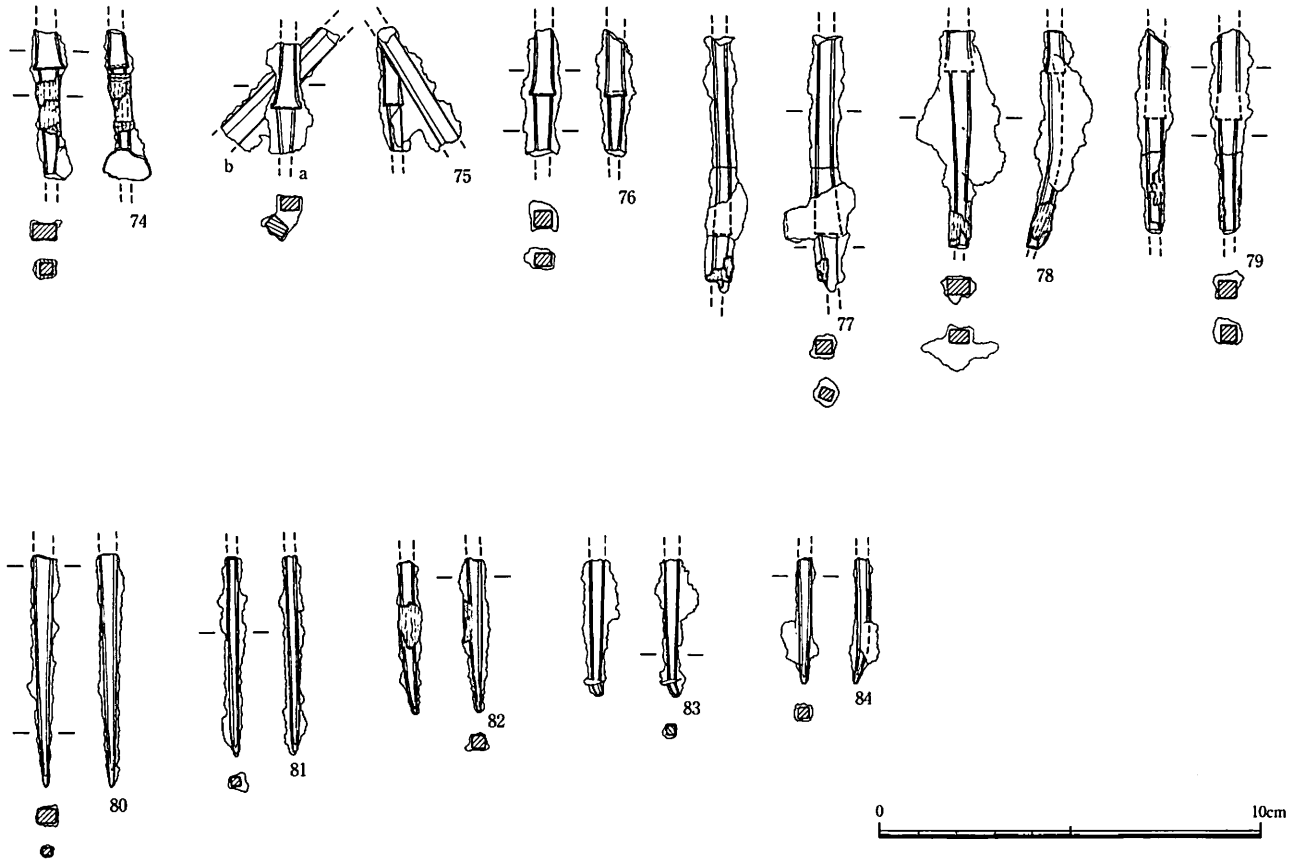


図30　1号墳出土鉄鏃実測図（6）

腸抉柳葉式（50ａ）と柳葉式（50ｂ）が銹着している。54は鏃身部が２点銹着し、１点（54ａ）は柳葉式に属すが、もう１点（54ｂ）は鏃身関が欠損し詳細不明である。したがって、54ｂはこの数に含めていない。鏃身長は1.40～1.70cm、同幅0.80～0.90cmを測り、鏃身断面は片丸造りである。頸部下端まで遺存する個体はなく、頸部長は不明である。頸部幅は中央部付近で0.50cm程度である。

平根系腸抉柳葉式鉄鏃　柳葉式の鏃身に頸部をもつ平根系の鉄鏃である（図28－55）。1982報告では６号墳出土とされていた。鏃身上半にふくらをもち、鏃身下半は緩やかに外反しながら腸抉先端に到る。切先から腸抉先端までの復元長は7.45cm、ふくら付近の幅は1.90cmを測る。頸部長は2.50cmで、茎関はナデ関である。茎尻は欠損し、茎部残存長は3.80cmである。

２．頸部および茎部による分類

頸部および茎部については、実測図を29点掲載している（図29・30）。茎関が観察できる破片、もしくは茎尻が遺存する茎片のみを図化している。

頸部から茎部にかけての破片　茎関の形態から大きく３つに分類できる。

56～59の４点は角関である。頸端部に向けて幅を徐々に広げるが、視覚的には直線的で、頸部なかほどの幅は0.50cm程度、頸端部における幅は、0.60～0.70cmである。先述のとおり、独立片腸抉式鉄鏃の両丸タイプに付属する可能性がある。

60・61の２点はナデ関である。頸端部に向けて幅を徐々に広げるが、視覚的には直線的で、頸端部から茎部へは斜めに削り出す。頸部なかほどの幅は0.50cm程度、頸端部の幅は0.60cm程度である。

62～76の15点は台形関であるが、幅を増した頸部下端、すなわち関側端部を長軸方向と平行になるよう加工している。頸部なかほどの幅は0.50cm程度、頸部下端の幅は0.70～0.80cmである。先述のと

表６　１号墳出土鉄鏃計測表（１）

挿図番号	全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	頸部端幅	茎部長	片腸抉長	逆刺切り込み長	形態	1982報告番号	備考
25－1	12.50＋	2.30±	1.20	9.50	0.75	0.85＋	3.40±	1.80±	独立片腸抉片丸・片鎬	41	1982報告より接合
2	12.50＋	2.60±	1.25±	9.60	0.80	0.60＋	3.00±	1.50	独立片腸抉片丸・片鎬	12	
3	8.70＋	2.10	1.00	6.60＋	－	－	2.60±	1.30±	独立片腸抉片丸・片鎬	35	
4	8.05＋	2.45	1.15±	5.80＋	－	－	－	－	独立片腸抉片丸・片鎬	53	1982報告より接合
5	3.90＋	2.35±	1.20	1.70＋	－	－	－	－	独立片腸抉片丸・片鎬	44	1982報告より欠損
6	5.20＋	2.30±	1.10	3.05＋	－	－	3.25＋	1.45±	独立片腸抉片丸・片鎬	51	
7	5.10＋	1.90＋	1.05	3.35＋	－	－	2.90±	－	独立片腸抉片丸・片鎬	42	
8	5.90＋	2.50	1.20	3.70＋	－	－	2.30＋	1.35±	独立片腸抉片丸・片鎬	52	
9	6.20＋	2.30	－	4.10＋	－	－	3.05±	1.50±	独立片腸抉片丸・片鎬	43	
10	6.30＋	2.55	1.25	3.90＋	－	－	2.95	1.70	独立片腸抉片丸・片鎬	49	
11a	7.05＋	2.20±	1.15±	5.00＋	－	－	3.05±	1.60±	独立片腸抉片丸・片鎬	39	
11b	5.40＋	2.45±	1.10	3.60＋	－	－	2.95±	1.30±	独立片腸抉片丸・片鎬		
12	5.80＋	2.15	1.00	3.75＋	－	－	－	－	独立片腸抉両丸	25	
13	5.75＋	2.30	1.00	3.65＋	－	－	3.25	1.75	独立片腸抉両丸	26	
14	6.05＋	2.45	1.00	3.75＋	－	－	2.90＋	1.40＋	独立片腸抉両丸	5上部	1982報告では56と誤接合
26－15	11.25＋	2.25±	1.00	9.10＋	－	－	3.30±	1.80±	独立片腸抉両丸	11	
16	10.45＋	2.00	0.90	8.45＋	－	－	3.15±	1.30±	独立片腸抉両丸	7	
17	10.30＋	2.00	0.90	8.30＋	－	－	－	－	独立片腸抉両丸	4上部	1982報告では83と誤接合
18	9.30＋	2.00	1.00	7.45＋	－	－	－	－	独立片腸抉両丸	2	1982報告では別個体が誤接合
19	9.15＋	2.05	1.00	7.15＋	－	－	3.10±	1.40±	独立片腸抉両丸	8	
20a	11.55＋	2.20	1.05	9.60＋	－	－	4.70±	2.90±	独立片腸抉両丸	1	
20b	8.65＋	2.25	1.10	6.50＋	－	－	3.65	1.80	独立片腸抉両丸		
20c	6.90＋	1.90	1.00	5.10＋	－	－	3.40＋	1.20＋	独立片腸抉両丸		
21	15.70＋	－	－	11.30＋	0.60	4.20＋	－	1.85±	独立片腸抉不明	24	
22	2.80＋	－	－	2.45＋	－	－	2.80＋	1.50	独立片腸抉不明	48	
23	3.10＋	－	－	3.10＋	－	－	－	1.75±	独立片腸抉不明	40上部	1982報告では38と誤接合
24	2.25＋	－	－	2.25＋	－	－	－	－	独立片腸抉不明		
25	4.85＋	長3.65 短1.80	0.80	3.20＋	－	－	－	－	段違い腸抉柳葉	28	
26	4.90＋	長3.00 短2.00	0.85	3.00＋	－	－	－	－	段違い腸抉柳葉	37	
27	4.90＋	長1.4＋ 短0.7＋	0.85	4.30＋	－	－	－	－	段違い腸抉柳葉	54	
27－28	16.05＋	2.00	0.80	13.65	0.65	0.60＋	－	－	腸抉柳葉	15	
29	9.05＋	2.05	1.00	7.10＋	－	－	－	－	腸抉柳葉	50	1982報告より接合
30	8.30＋	1.75	0.80	6.70＋	－	－	－	－	腸抉柳葉	13	1982報告より欠損
31	8.20＋	1.55±	0.85±	6.70＋	－	－	－		腸抉柳葉	6	1982報告より欠損
32	7.70＋	2.00±	1.00	5.70＋	－	－	－	－	腸抉柳葉	17	1982報告より接合
33	6.80＋	1.55	0.80	5.40＋	－	－	－		腸抉柳葉	55	1982報告より欠損
34	6.15＋	1.80±	0.80±	4.40＋	－	－	－	－	腸抉柳葉	9	1982報告では別個体が誤接合
35	4.20＋	1.85	0.90	2.50＋	－	－	－	－	腸抉柳葉	10	1982報告では別個体が誤接合
36	4.30＋	2.10	0.85±	2.35＋	－	－	－	－	腸抉柳葉	16	1982報告より欠損
37	3.50＋	1.80±	0.80±	1.80＋	－	－	－	－	腸抉柳葉		
38	3.50＋	2.05	0.80	1.70＋	－	－	－	－	腸抉柳葉	40下部	1982報告では23と誤接合
39	3.40＋	1.80	0.85	1.70＋	－	－	－	－	腸抉柳葉	36	
40	2.80＋	2.30	1.20	0.60＋	－	－	－	－	腸抉柳葉		
41	2.75＋	2.00±	1.00	0.90＋	－	－	－	－	腸抉柳葉		
42	2.80＋	1.90	0.80	1.05＋	－	－	－	－	腸抉柳葉	46	
43	2.70＋	2.00	0.90	0.80＋	－	－	－	－	腸抉柳葉		
44	2.40±	1.60±	0.75±	0.85＋	－	－	－	－	腸抉柳葉		
45	2.20＋	1.85±	0.80±	0.50＋	－	－	－	－	腸抉柳葉		
46	2.20＋	2.10＋	1.00	0.25＋	－	－	－	－	腸抉柳葉	38	1982報告より欠損
47	2.35＋	2.00	0.90	0.60＋	－	－	－	－	腸抉柳葉		
48	2.30＋	1.75	0.75	0.70＋	－	－	－	－	腸抉柳葉	47	
49	2.00＋	1.70	0.80	0.40＋	－	－	－	－	腸抉柳葉		
28－50a	4.75＋	2.05	0.90	2.75＋	－	－	－	－	腸抉柳葉	29・30	
50b	5.30＋	1.50±	0.80±	3.80＋	－	－	－	－	柳葉		
50c	2.90＋	－	－	2.90＋	－	－	－	－	頸部片		
51	9.00＋	1.40	0.85±	7.60＋	－	－	－	－	柳葉	3上部？ 14上部？	1982報告番号3と14の上部は同一個体か？
52	6.30＋	1.50	0.80	4.80＋	－	－	－	－	柳葉	31	
53	3.65＋	1.50±	0.80	2.20＋	－	－	－	－	柳葉		
54a	2.95＋	1.70	0.90	1.25＋	－	－	－	－	柳葉		
54b	1.70＋	1.70＋	0.75	－	－	－	－	－	鏃身形態不明		
55	11.80＋	7.45±	1.90 （ふくら）	2.50＋	0.85	3.80＋	－	－	平根系腸抉柳葉	18	1982報告では6号墳出土と誤記

※単位はcm。＋は残存長。±は復元値で誤差を含む。

表７　１号墳出土鉄鏃計測表（２）

挿図番号	全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	頸部端幅	茎部長	片腸抉長	逆刺切り込み長	形態	1982報告番号	備考
29－56	7.90＋	－	－	7.50＋	0.60	0.40＋	－	－	角関	5下部	1982報告では14と誤接合
57	6.60＋	－	－	4.00＋	0.60	2.60＋	－	－	角関		
58	6.30＋	－	－	3.40＋	0.60	2.90＋	－	－	角関		
59	5.25＋	－	－	2.45＋	0.70	2.80＋	－	－	角関		
60	4.65＋	－	－	2.75＋	0.70	1.90＋	－	－	ナデ関		
61	4.90＋	－	－	3.45＋	0.60	1.45＋	－	－	ナデ関		
62	12.40＋	－	－	6.65＋	0.80	5.75＋	－	－	台形関		
63	10.65＋	－	－	3.80＋	0.80	6.85＋	－	－	台形関		
64	7.35＋	－	－	5.25＋	0.75	2.10＋	－	－	台形関		
65	7.30＋	－	－	5.35＋	0.80	1.95＋	－	－	台形関		
66	7.10＋	－	－	6.30＋	0.75	0.80＋	－	－	台形関		
67	6.75＋	－	－	4.60＋	0.85	2.15＋	－	－	台形関	3下部？	
68	6.80＋	－	－	3.50＋	0.80	3.30＋	－	－	台形関	33	1982報告では75と誤接合 3号墳出土と報告
69	6.50＋	－	－	5.50＋	0.90	1.00＋	－	－	台形関		
70	6.40＋	－	－	2.55＋	0.80	3.85＋	－	－	台形関		
71	5.60＋	－	－	2.40＋	0.70	3.20＋	－	－	台形関		
72	5.20＋	－	－	2.40＋	0.70	2.80＋	－	－	台形関		
73	4.60＋	－	－	1.65＋	0.75	2.95＋	－	－	台形関		
30－74	3.85＋	－	－	1.05＋	0.85	2.80＋	－	－	台形関		
75a	2.90＋	－	－	1.80＋	0.80	1.15＋	－	－	台形関	33上部	1982報告では68と誤接合 3号墳出土と報告
75b	3.50＋	－	－	3.50＋	－	－	－	－	頸部片		
76	3.20＋	－	－	1.80＋	－	1.40＋	－	－	台形関		
77	6.40＋	－	－	5.20＋	0.70±	1.20＋	－	－	茎関不明		
78	5.80＋	－	－	1.10＋	0.75±	4.70＋	－	－	茎関不明		
79	5.25＋	－	－	2.35＋	0.70±	2.90＋	－	－	茎関不明		
80	6.10＋	－	－	－	－	6.10＋	－	－	茎部片		
81	5.20＋	－	－	－	－	5.20＋	－	－	茎部片		
82	4.05＋	－	－	－	－	4.05＋	－	－	茎部片		
83	3.55＋	－	－	－	－	3.55＋	－	－	茎部片	4下部	1982報告では17と誤接合
84	3.30＋	－	－	－	－	3.30＋	－	－	茎部片		

※単位はcm。＋は残存長。±は復元値で誤差を含む。

おり、独立片腸抉式鉄鏃の片丸・片鎬タイプと、腸抉柳葉式鉄鏃に付属する可能性がある。

77～79は銹により茎関形状が不明である。

茎部のみの破片　茎部のみの破片は、茎尻が遺存する資料のみを図化している（図30－80～84）。もっとも長い破片（80）で、残存長6.10cmを測る。茎部断面はすべて方形であり、先端部に向けて細くなる。木質が付着している82の他には、矢柄にともなう有機質の痕跡は確認できない。　（牧野）

②１号墳出土鉄鏃の位置付け

カミノハナ１号墳から出土した鉄鏃は、独立片腸抉式、段違い腸抉柳葉式、腸抉柳葉式、柳葉式の４種類の細根鏃（長頸鏃）と、１種類の平根鏃に大別された。多数の細根鏃に少数の平根鏃という鏃構成は、古墳時代中期以降において数多く認められるものである。

もっとも多く出土した独立片腸抉式鉄鏃は、鏃身部が片丸・片鎬造りと、両丸造りの２つに細分でき、それぞれ10本以上認められる。片丸・片鎬タイプは、定型化した独立片腸抉式鉄鏃の特徴をもつ。一方、両丸タイプは、定型化した独立片腸抉式鉄鏃の特徴をもたない点や、茎関が角関である可能性を考えると、定型化以前のやや古相の様相を示すものと考えられる。このように、異なるタイプの独立片腸抉式鉄鏃が一定量副葬される例はまれであり、カミノハナ１号墳の特色として評価できる。

また、独立片腸抉式鉄鏃との親縁性が高いとされる段違い腸抉柳葉式鉄鏃は、独立片腸抉式鉄鏃から遅れて盛行する形態であり、両者は「世代をこえながら同一系譜の被葬者に保有されつづける」ことが指摘されている（鈴木2003ｂ：p.223）。つまり、１号墳から出土した定型化以前、定型化以後という２タイプの独立片腸抉式鉄鏃と、段違い腸抉柳葉式鉄鏃の三者は、時期差をもって副葬された可能性があり、１号墳の埋葬回数を考える上で参考となる。　（牧野）

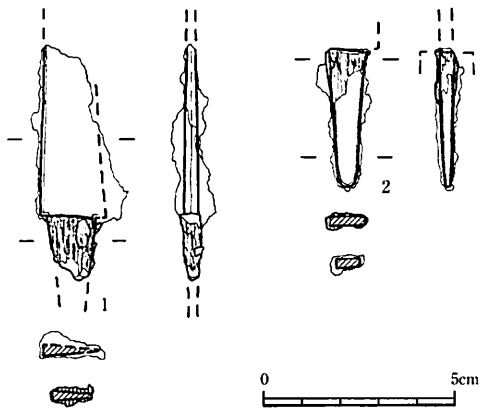


図31　１号墳出土刀子実測図

（５）工具

刀子（図31，図版11・19）

１号墳から出土した刀子は、最小個体数で２点確認できる。1982報告では１点出土とされるが、実測図は示されていない。

図31－１は刀身から茎にかけての破片である。刀身の上半、茎の下半を欠損しており、残存長6.2cm、最大厚0.4cm、刀身残存長4.5cm、茎残存長1.7cm、茎最大幅1.3cmを測る。刀身をみてみると背側は直線的で、刃側は銹化が激しいため形状の把握が困難である。背側の関の形状は直角関である。おそらく刃部側にも関を有し、両関になるものと思われる。茎は茎尻に向かって幅を減じていく。刀身に木質は認められないが、茎には柄の木質が残存している。木質はちょうど関の部分より下方にみられ、これは本来の柄の装着範囲を示していると考えられる。

２は茎の破片である。形状や木質の残存状況から刀子の茎であると判断した。残存長3.7cm、最大幅1.0cm、残存最大厚0.4cmを測る。破片の上端を観察すると、図の右側では外方に向かって広がっており、この部分が関であると判断できる。十分には残っていないが、ナデ関であると観察できる。反対側の関については不明である。茎は幅を減じながら茎尻に至る。厚さも関から茎尻に向かって薄くなる。茎尻は栗尻である。柄の木質が残存しており、１と同様、ちょうど関の部分から柄が装着されていた様子がうかがえる。（三好）

（６）装身具

ガラス小玉（図版14－１・２段目・３段目左４点）

１号墳からはガラス小玉が166点出土している。それらのうち３片が破片であるが、それぞれに色調が異なることから別個体と判断できる。したがって１号墳から出土したガラス小玉の個体数は166個体であるといえる。ガラス小玉は円形ないし楕円形で、直径は2.3～5.8mm、高さは1.2～6.6mm、孔径は0.5～2.3mmであり、直径2.0～4.0mm、高さ1.0～3.0mmの範囲に集中する。色調はほぼすべてが青色系であり、濃紺色、紫色、やや緑がかった水色、緑がかった青色、スカイブルーがあり、そのほかに黄緑色がある。

これらガラス小玉を観察すると、形態的には、①小口面、側面ともに丸いもの、②小口面は丸いが側面はやや直線的なもの、③小口面は平坦だが側面は丸いものがある。気泡のあり方には、①気泡は小さく、数が少なく、孔と平行方向に並ぶもの、②気泡は小さく、数が少なく、散在するもの、③気泡は大きく、数が多く、孔と平行方向に並ぶものがある。製作方法は基本的にいずれも引き伸ばしたガラス管を切断し、再加熱することで小口面の処理がなされる方法であると判断される。気泡のあり方の違いなどは小瀬康行が指摘するように、ガラスの軟化度の違いであると考えられよう（小瀬1987）。さらにここで注目されるのは、これらの特徴の差が、ガラス小玉の色調の差と対応することである。すなわち、色調ごとに、小口面処理のための再加熱時の軟化度が異なっていた可能性が指摘でき、これは再加熱時間の長短あるいは素材の質の差に関連しているのかもしれない。また、紫色のものは、小口面が平坦である。同様の状況で使用されたと推測される他色調のガラス小玉にはこれら

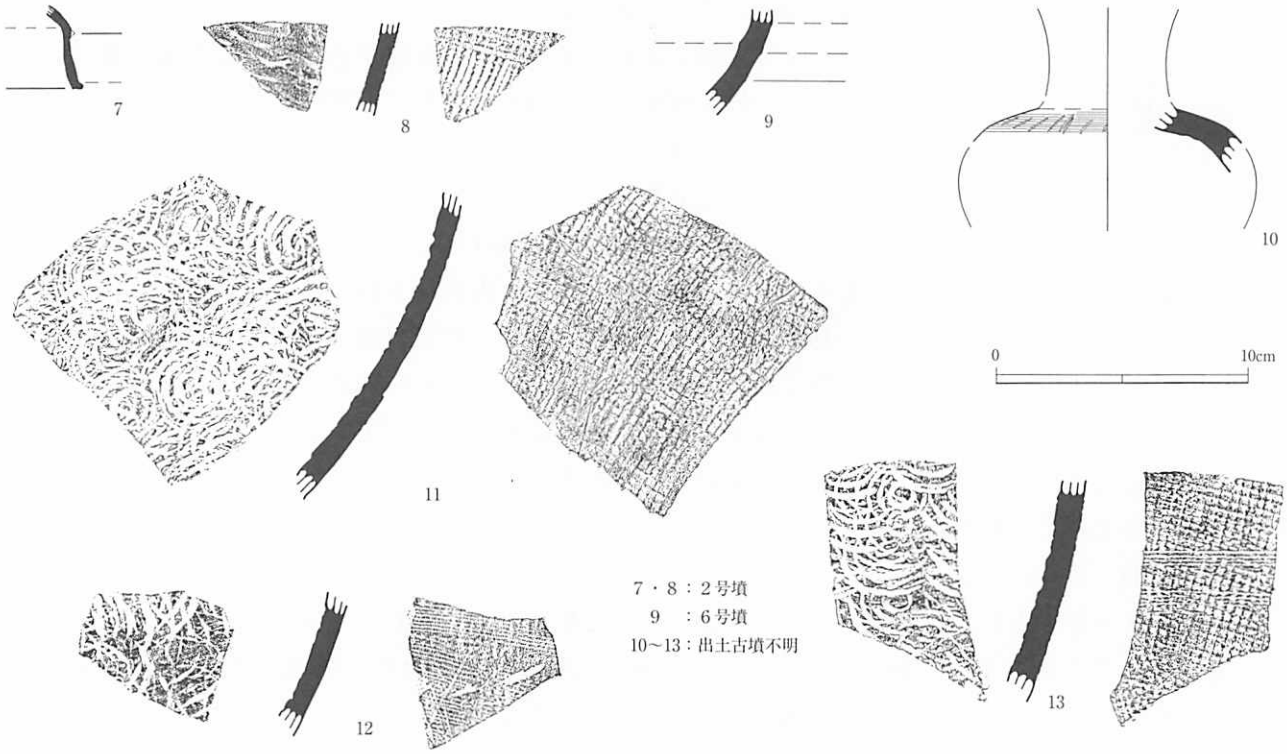


図32　2・6号墳出土および出土古墳不明須恵器実測図

の特徴がみられないことから、使用時の擦れは考慮する必要がないと思われ、小口面処理に研磨がなされていると判断できる。黄緑色のガラス小玉については、形状がいびつで突起があるものが多い。これらも製作に関連する特徴のように思われるが、現状では判断できない。（西嶋）

2　2号墳出土遺物

（1）須恵器（図32，図版1）

図32の7・8は2号墳出土の須恵器である。

7は坏蓋である。器壁が薄く、稜は欠けているが非常にシャープに作り出している。また、口縁端部の段もきっちりと作り出している。焼成も非常に良く、外面は灰かぶりをしている。8は壺か小型の甕の胴部である。外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具痕をナデ消そうとしている。

なお、須恵器の位置付けについては、3号墳出土遺物のところ（54頁）でまとめて述べる。（木村）

（2）武器

①鉄剣（図33，図版11・21）

2号墳出土の鉄剣は1点確認できる。1982報告に掲載されているものと同一で、これ以外に鉄剣だと判断できる破片はみられない。

この個体は完形品で比較的小型の鉄剣である（図33）。全長34.4cm、最大厚0.6cm、剣身長26.8cm、剣身最大幅2.6cm、茎長7.6cmを

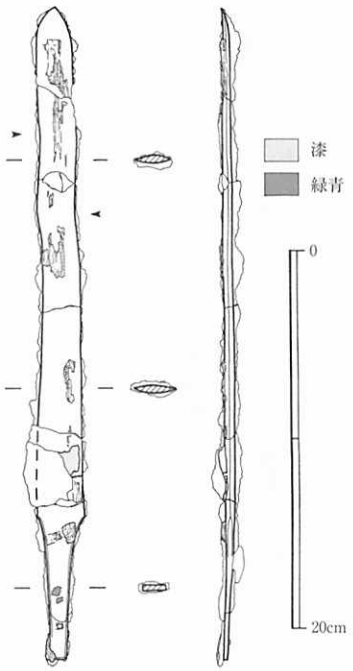


図33　2号墳出土鉄剣実測図

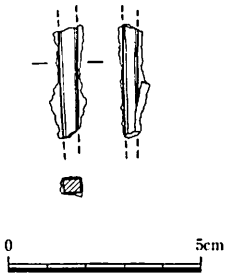


図34　2号墳出土鉄鏃実測図

測る。剣身は、図の三角印の部分でカーブしているようにみえる。カーブはごく弱く、銹化による変形であることも考えられるが、蛇行剣である可能性もあろう。どちらなのかはX線画像（図版21）をみても判然としない。また、側面をみてみると少し反り気味になっている。剣身はカーブした後、直線的に幅を広げながら関に至る。断面形はレンズ状を呈し、明瞭な鎬は認められない。剣身表面には鞘のものと思われる木質が残存しており、また関より3cm程上方には漆と思われる痕跡がある。そのすぐ下方には木質が残っている。この木質は、上端に本来の形態を保つ面が観察でき、反対に下端は本来の形態を保っていないことから、鞘ではなく柄の木質であると考えられる。関の形状はナデ関で、茎は幅を減じながら茎尻に至る。厚さも関から茎尻にむかって薄くなっていく。茎尻は一文字尻である。目釘孔は径0.3cmのものが1つある。茎には木質のほか、緑青が付着している。ともに柄に関するものであると考えられる。（三好）

②鉄鏃（図34，図版13・25）

2号墳出土の鉄鏃として、頸部もしくは茎部の一部と思われる破片が1点確認できる。1982報告では2号墳からの鉄鏃出土の記載はなかったが、今回の再整理でその存在を確認した（図34）。残存長3.00cm、残存幅0.40～0.50cmである。木質の付着は確認できない。（牧野）

（3）工具

刀子（図35，図版11・19）

2号墳から出土した刀子の最小個体数は2点である。図示している個体は、1982報告に掲載されているものと同一である。

図35－1は茎の先端を欠損するが完形品に近い残存状況である。残存長9.6cm、最大厚0.3cm、刀身長6.9cm、刀身最大幅1.1cm、茎残存長2.7cm、茎最大幅0.7cmを測る。刀身の形態をみてみると、切先のふくらは枯れる。背側は直線的、刃側はやや曲線的で、幅を広げながら関に至る。関は両関で、背側は直角関である。刃側の関の形状は木質で隠れているため観察できない。茎は幅を減じながら茎尻に至る。柄の木質がちょうど関の部分から下方に残存している。

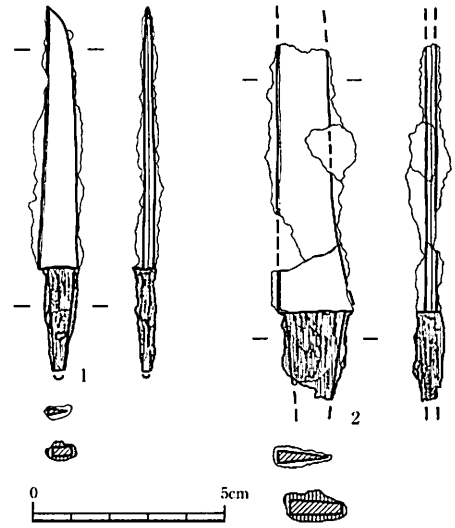


図35　2号墳出土刀子実測図

2は刀身から茎にかけての破片で、刀身の切先と茎の下半を欠損する。残存長9.4cm、最大厚0.3cm、刀身残存長7.1cm、茎残存長2.3cm、茎最大幅1.5cmを測る。刀身最大幅は2.0cm程度に復元できる。刀身の背側は直線的に、刃側は内湾して幅を広げながら関に至る。関は両関で、両側とも直角関である。茎は茎尻に向かって幅を減じる。茎にはちょうど関の部分より下方に、柄の木質が残存している。（三好）

3　3号墳出土遺物

（1）須恵器（図36，図版2）

3号墳からは、蓋坏、甕などが出土している。

図36－14～16・20～22は坏蓋である。14は外面に降灰している。17とセットである。稜はシャープに作り出している。

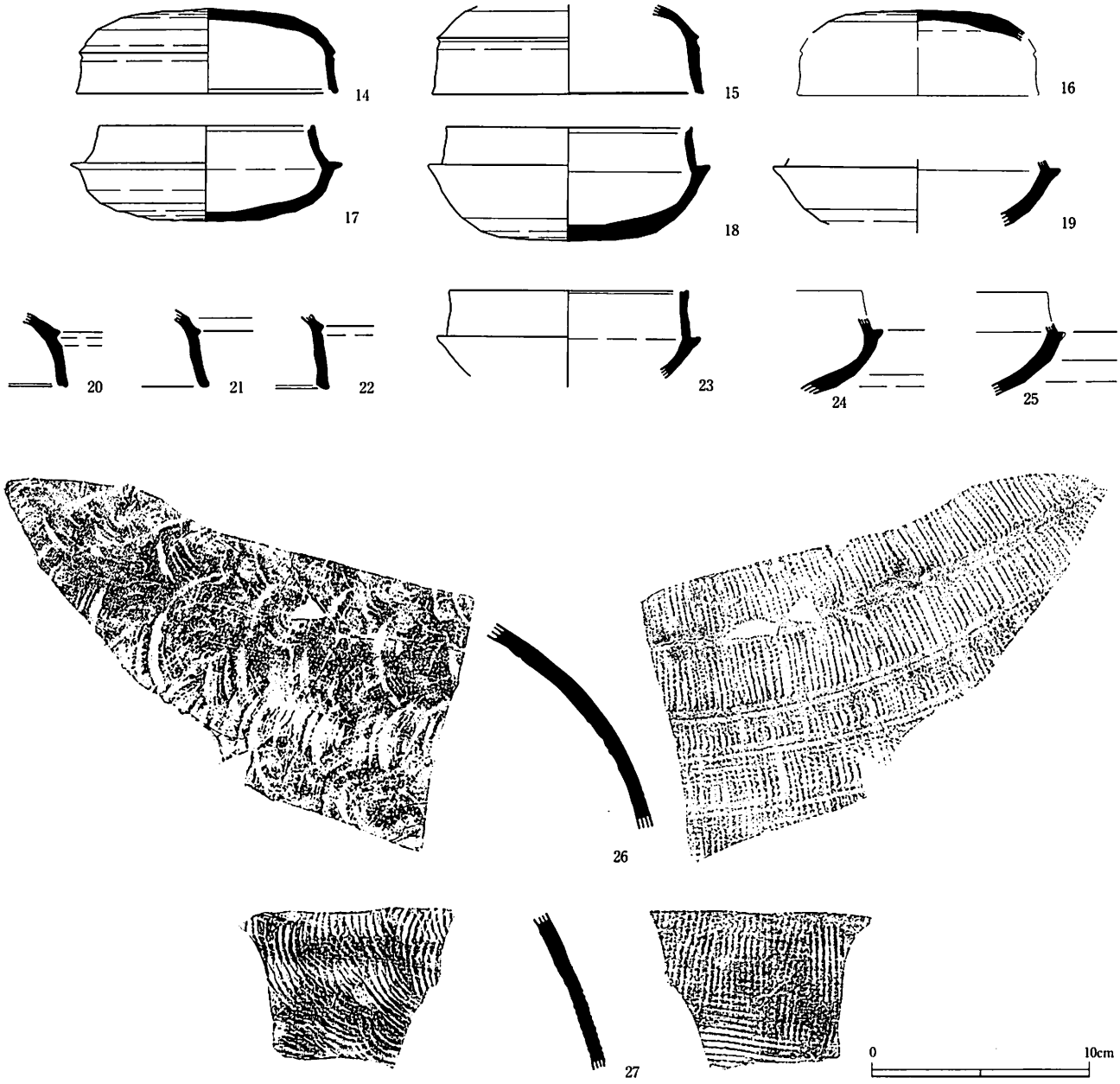


図36　3号墳出土須恵器実測図

15は口縁端部の段をきっちり作り出している。稜は14に比べるとややシャープさに欠ける。20の稜はシャープに作り出しているが、器壁が厚く、焼きもあまい。21・22は稜も口縁端部の段もシャープさがなくなっている。

17～19・23～25は坏身である。17は14同様、器壁が薄く、軽い。口縁端部の作りは沈線状になっている。18は口縁端部にきちんとした段を作り出している。底部付近の器壁がやや厚く、ヘラ削りの範囲が狭いことからも、回転ヘラ削りによる調整をかなり簡略化していることがうかがえる。19はやや器壁が厚く、焼成も不良で、回転ヘラ削りの単位がはっきりわかるほど強く残っている。23は立ち上がりが直立するようにまっすぐに立つ。器壁も薄く、丁寧な作りだが、焼成があまい。24は焼成があまく、表面が摩耗している。25は19と同様に器壁が厚く、焼成も不良で、回転ヘラ削りの単位がはっきりわかるほど強く残っている。

26・27は甕である。26の外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具痕が残る。27の外面は擬格子タタキ、内面は同心円文当て具痕が残る。

１～３号墳出土須恵器の位置付け　１号墳の須恵器と３号墳の須恵器では、比較できるような同一器種が存在しないため単純に時期関係を比較することはできない。しかし、技法などを考察することから、ある程度の前後関係を知ることができる。

１号墳の須恵器は坏身、瑤、器台とも焼成が良く、作りも比較的シャープである。とくに瑤については穿孔後面取りを行うなど、極めて丁寧に作っていることがわかる（図版１－３）。また、甕も他の古墳から出土したものに比べて内面の当て具痕をナデ消そうとする意識が強い。このようなことから、１号墳の須恵器は整形技法の簡略化がまだ認められない時期のものと考えられる。

これに対して、３号墳の須恵器をみてみると、①器壁が比較的薄く焼成が良いもの、②器壁が比較的薄いが焼成があまり良くないもの、③器壁がやや厚く、焼成があまり良くないものの大きく３つのグループに分けられる。①、②については、焼成の良、不良による違いであり、作りなどは基本的に同様である。しかし、１号墳のものに比べると若干シャープさや丁寧さがなくなっているように思われる。また、③のグループは、回転ヘラ削りの単位がはっきりわかるほど強く残るという特徴が認められる。このような特徴は同時期に熊本県の宇城窯跡群で生産されたと考えられる須恵器に認められる特徴であることから、③のグループは宇城産須恵器の可能性がある。また、３号墳の甕をみると、内面の同心円文当て具痕をナデ消そうとする意識が弱くなっているようである。

以上のことから考えると、１号墳の須恵器の方がより丁寧に調整、整形を行っている時期のもの、３号墳の須恵器の方が技法や整形がやや簡略化し、さらに地方窯による生産が開始されはじめる段階のものであることがいえる。このことから、１号墳の須恵器の方が３号墳の須恵器よりも古いと考えられる。

なお、２号墳の須恵器は器壁が薄く焼成が非常に良く硬質で、細部の作りもシャープである。これは１号墳のものと同じ程度の丁寧な整形技法である。そのため、２号墳の須恵器も３号墳の須恵器より古いものと思われる。

最後に具体的な時期を述べると、１号墳の須恵器がＴＫ23型式、３号墳の須恵器がＴＫ47型式のものと考えられる。２号墳の須恵器もＴＫ23型式と考えて良いと思われる。

また、須恵器の産地についてみてみると、１号墳、２号墳のものは器壁が薄く、焼成も良く、技法も丁寧ということから、非常に熟練した須恵器製作工人の手によるものと思われる。それに加え、１号墳からは近畿との関与が考えられる甲冑なども出土していることから、陶邑窯跡群産とするのが妥当であろう。３号墳の須恵器は先述したように３つのグループに分けられる。これらには、陶邑窯跡群からもたらされたもののほかに、地元の宇城窯跡群からもたらされたものが含まれていると考えられる。（木村）

（２）武具

①横矧板鋲留短甲（図37～40，表8，図版６～10・15～18）

短甲は、３号墳横穴式石室玄室内の右側壁沿い玄門側から出土した。細片化が著しいが、部位を特定もしくは推定できる破片から、横矧板鋲留短甲１領の存在が確認できる。

本短甲は、1982報告で前胴７段、後胴７段構成の横矧板鋲留短甲と報告された。しかし、今回あらためて接合作業をおこない検討した結果、前胴６段、後胴７段構成の横矧板鋲留短甲であることが判

明した。また、1982報告で示されていない破片のなかに、部位を特定できるものや部位は特定できないが特徴ある破片がいくつか存在する。それらを含め、本報告では、部位を特定できる破片、部位は特定できないが特徴ある破片を図示した（図37・38）。

この検討結果に基づいて作成した復元図が、図40である。短甲片はおもに右前胴から後胴中央部にかけての破片であり、後胴左脇から左前胴にかけてのものと断定できる破片は少ない。以下は、この復元結果にもとづいて記述を進めていく。

1．概要

構成　前胴６段、後胴７段構成で右前胴開閉式の横矧板鋲留短甲である。前後胴のうち高さがわかるのは右前胴のみで36.0cmである。左前胴、後胴の高さは不明である。

短甲は、竪上板、押付板、裾板、引合板、蝶番板、帯金で構成されたフレームに横矧板を充填することで形作られている。各段に用いられた鉄板の数は、部位の特定できる破片の少なさから断定することは難しい。現存する破片と、通有の横矧板鋲留短甲に用いられる鉄板数なども考慮すれば、本短甲には竪上板２枚、押付板２枚、前胴上段板２枚、上段地板１枚、上段帯金１枚、中段地板３枚、下段帯金３枚、下段地板３枚、裾板３枚、引合板２枚、蝶番板１枚で計23枚の鉄板が用いられており、そのほか蝶番金具４個があったものと推定できる。前胴左右上段板と後胴上段地板、後胴上段帯金には、着装用の緒をかけるための孔が認められるが、ワタガミ緒は遺存していない。

結合　各鉄板は鉄鋲によって結合されている。本例に使用されている鋲の平面形態は円形で、鋲の直径は1.0～1.1cmの超大型鋲が用いられている。鋲頭の断面形態は、基本的に半球形であるが、なかには鋲頭が叩かれて変形しているものが認められる（図版10－１の２）。これらは、鋲留作業時に変形したものである可能性がある。鋲脚は、すべて叩かれて潰れているが、叩き方の弱いもの、逆に丁寧に叩き潰されているものがあり、なかには鋲脚の痕跡が確認できないものも存在する（図版10－１の４）。鉄板同士の結合は三枚留を避けてなされている。現存する破片のなかで三枚留による結合がおこなわれているものは、部位不明の図37－17のみである（図版10－２・３）。

遺存状態　各破片を観察すると、裾板片の銹化がとくに著しく、裾板下辺部はほとんど残存していない。そのほかは、押付板、後胴上段地板の剥離がひどい以外、遺存状態は良好である。短甲の詳細な出土状況が不明ではあるが、この銹の状況からは、本来、短甲は立位の状態で副葬されていたものと思われる。

2．各部の観察

引合板　右前胴引合板は一部が欠損しているが、全体形が把握できる。縦36.0cm、幅4.0cmで、緩やかなＳ字状のカーブを描いている。短甲本体への結合のための鋲は５鋲が現存するが、本来は６鋲であったものと思われる。短甲に結合されている側の長辺には面取りがなされている。左前胴引合板は大部分を欠損しており、下端部と上段板から中段地板にかけての部分のみが残存している。

竪上板　竪上板は、左右各１枚の板で構成されると思われる。右前胴竪上板は一部を欠損している。引合板際の幅は不明で、蝶番板際の幅は3.8cmである。上辺には、幅約6.0～8.0mmの鉄折覆輪が施されている。板の下辺には面取りがなされている。左前胴竪上板は引合板側の一部と、胸部から脇部への屈曲部分が残存しているのみであり、詳細は不明であるが、下辺には面取りがなされていることがわかる。

前胴上段板　左前胴側がほとんど残存していないが、右前胴の状況から左右各１枚の鉄板で構成されていたものと思われる。右前胴上段板は脇側を欠損している。引合板側の上下幅は8.4cmである。

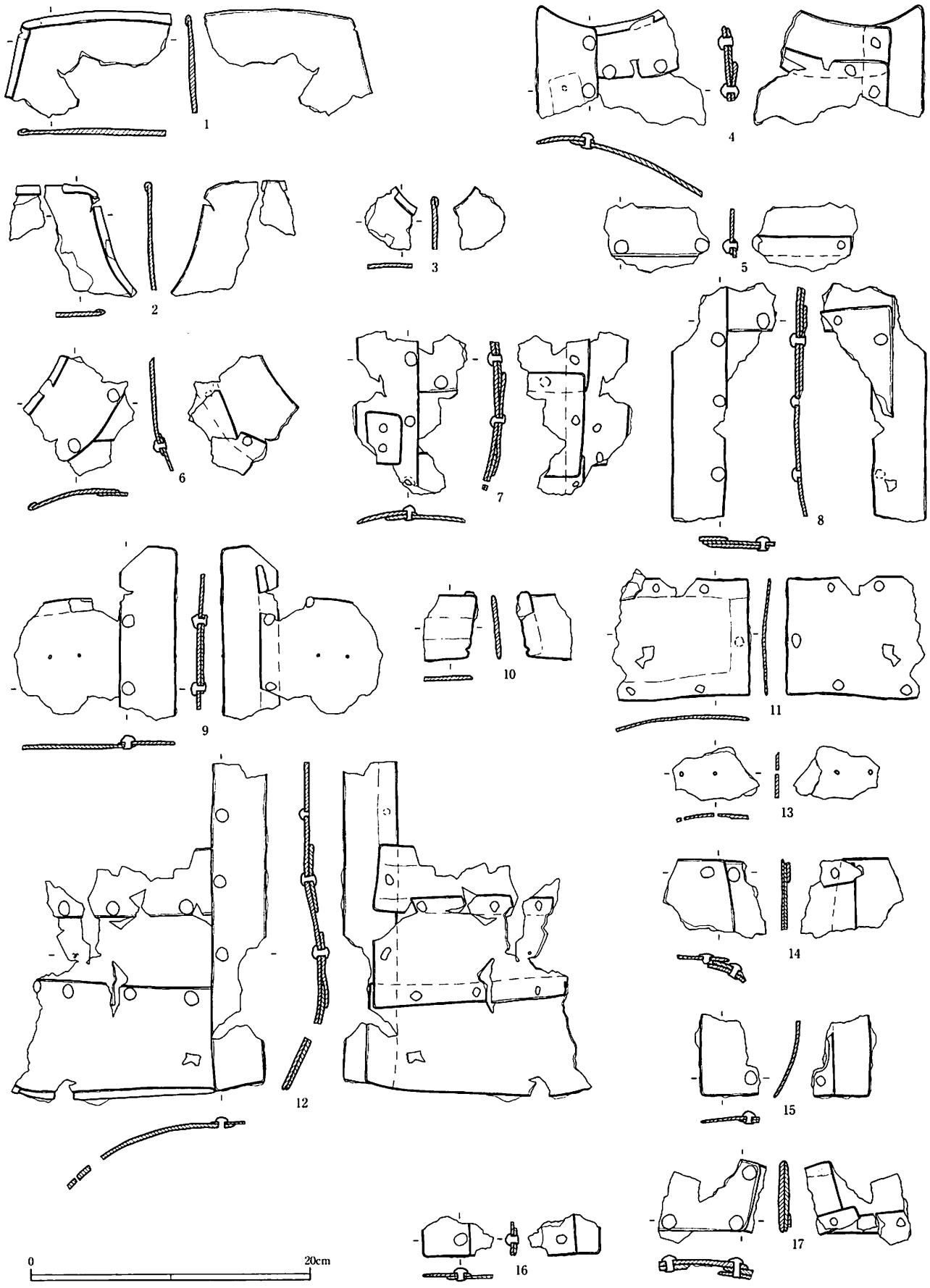


図37　３号墳出土短甲実測図（１）

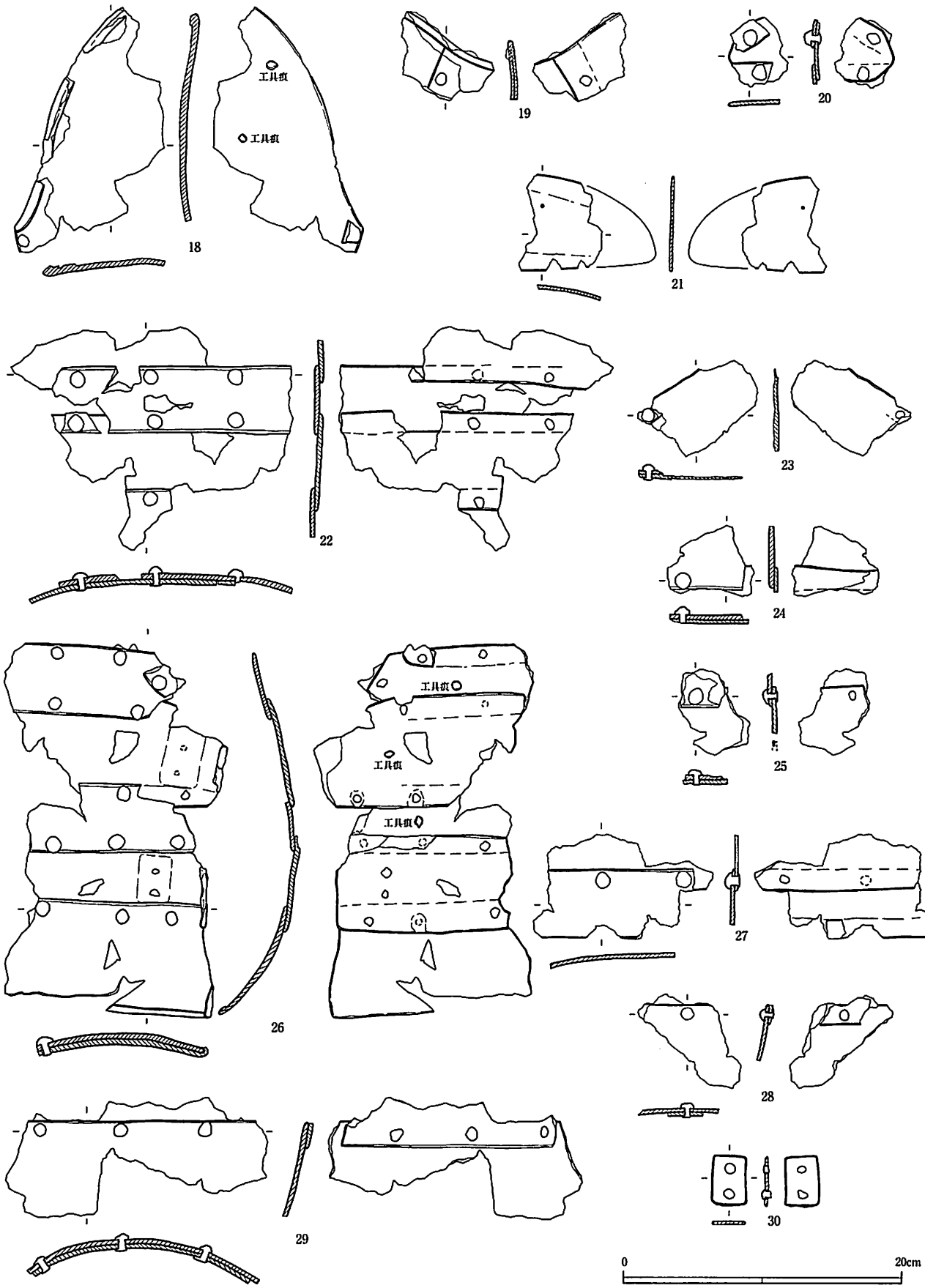
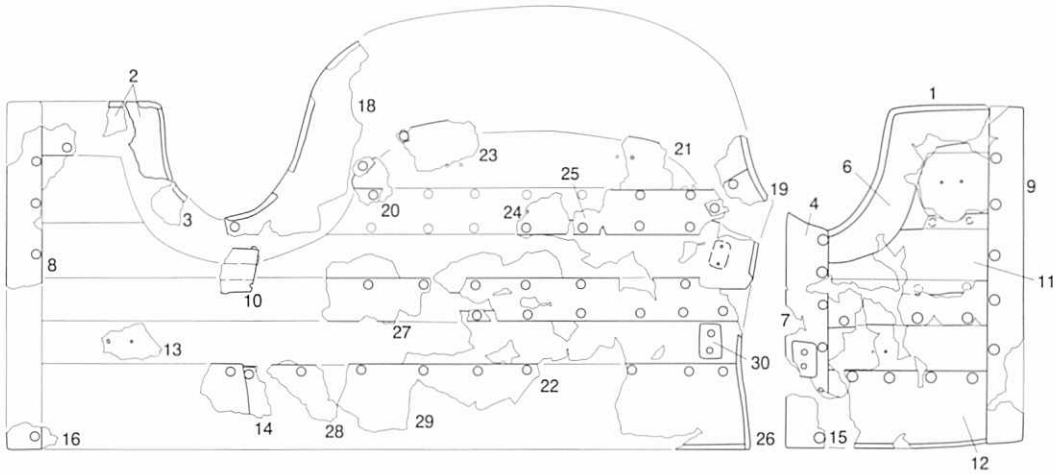


図38　3号墳出土短甲実測図（2）



※番号は下の一覧表（表8）、および実測図（図37･38）に対応している。

図39　３号墳出土短甲展開図

表８　３号墳出土短甲片一覧表

図番号	遺物番号	部位	備考	図番号	遺物番号	部位	備考
37	1	右前胴竪上板	引合板側	37	16	左前胴引合板	下端部
〃	2	左前胴竪上板	引合板側	〃	17	帯金？	部位不明
〃	3	左前胴竪上板	脇側	38	18	押付板	左肩部
〃	4	右前胴蝶番板	上端部	〃	19	押付板	右脇部
〃	5	帯金片	部位不明	〃	20	後胴上段地板	左端部
〃	6	右前胴竪上板	板中央付近	〃	21	後胴上段地板	右端部付近
〃	7	右前胴蝶番板	板中央付近	〃	22	後胴中段地板～裾板	後胴中央付近
〃	8	左前胴引合板	板中央付近	〃	23	後胴上段地板	左肩部
〃	9	右前胴引合板	上端部	〃	24	後胴上段帯金	中央部
〃	10	左前胴中段地板	左脇部	〃	25	後胴上段帯金	中央部
〃	11	右前胴中段地板	引合板際	〃	26	後胴上段帯金～裾板	右脇部
〃	12	右前胴	右前胴下段帯金～裾板	〃	27	後胴下段帯金	中央～左脇部付近？
〃	13	左前胴下段地板	板中央付近	〃	28	裾板	左脇付近？
〃	14	右前胴裾板	左脇部	〃	29	裾板	中央～左脇部
〃	15	右前胴蝶番板	下端部	〃	30	蝶番金具	後胴下段地板に接合

アミカケはその破片が、部位不明もしくは部位が確実ではないものであることを示す

地板の各辺は、直線的でなくいびつで、脇側の角は丸く不整形である。引合板側のみは直線的、かつ角のある形状で、地板全体としては扇形に近いような形状であると思われる。板の大きさは欠損が大きいために不明である。右前胴上段板中央付近には横位２孔１組のワタガミ受緒孔が認められる。穿孔方向は不明で、有機物の付着も確認できない。外面下辺部には幅の広い面取りがなされている。

前胴中段地板　左前胴は左脇の一部が残存するのみであるが、右前胴は脇部側などに欠損している部分があるものの、おおむね全体形を把握できる。右前胴中段地板の全体的な形状は通有の横矧板鋲留短甲と同様の形態である。ただし、上辺脇部のカーブは、一般的には竪上板の形状に合わせて内湾しているのに対し、本例は緩やかに外湾している。左前胴も基本的に同様の形態であると思われるが、継ぎ足し板などが存在する例などもある。そのため現状から地板形状、枚数を特定することはできない。右前胴中段地板の引合板際と、左前胴中段地板の脇部破片（図37－10・11）には鉄板を重ねた痕跡が明瞭に観察できる。また、右前胴中段地板に残存している鋲脚から、上段地板との結合は２鋲をもっておこなわれていたことがわかる。左前胴中段地板左脇部端辺の内面には後胴中段地板の一部が銹着しており、前後胴の地板の重ねは通有のものであったことがわかる。鉄板端部に面取りなどはなされていない。

前胴下段帯金　右前胴の一部が残存するのみであり、この段の板枚数は不明である。横方向に長い帯状の鉄板で、残存している部分の上下幅は引合板際で4.9cmである。板端部は直線的に裁断され

ている。外面に幅の広い面取り加工がなされている。

前胴下段地板　右前胴下段地板は約３分の２が残存しており、１枚の鉄板で構成される。角のはっきりした長方形で、各辺は直線的である。上下幅は約８cmである。右前胴中央部付近に腰緒孔が１つ認められる。鉄板端部に面取りなどはなされていない。左前胴下段地板は、腰緒孔周辺がわずかに残る。

前胴裾板　右前胴裾板は、全体形がわかる程度残存している。左前胴裾板は後胴裾板との連接部が一部残存しているのみである。右前胴裾板は１枚の鉄板で構成されていたと思われるが、左前胴の構成枚数は不明である。右前胴裾板は、引合板際での上下幅が7.3cmで、上辺長より下辺長が長く下方へ向かってスカート状に開く形態である。下辺には幅約6.0mmの鉄折覆輪が施されている。左前胴裾板と後胴裾板の連接部をみると後胴裾板が内面に重ねられており、前後胴裾板の重ね方は、通有の重ね方であることがわかる。上辺には幅の広い面取りがなされている。

押付板　左脇側の一部と右脇側の一部が残存している。欠損が大きいため、板の大きさなどは不明である。板の形状は通有のものと思われるが、本例は、右脇に継ぎ足し板が鋲留されていることが特徴としてあげられる。継ぎ足し板は、押付板本体に外重ねして鋲留されている。上辺沿いには幅約８mm程の鉄折覆輪が施されている。また、左脇側を観察すると、前胴竪上板が内側に重ねられており、前胴側を外重ねにする通有の重ね方と異なる。板内面の肩付近に性格不明の工具痕跡が２つ存在する。いずれも不整円形で、径10mm以下の窪みである（図版10－１の６）。下辺には幅の広い面取りがなされている。

後胴上段地板　板左右端部の一部が残存している。左側の端部片には押付板、上段帯金の一部がみられる。板の形状は現存する部分から推測して、やや扁平なかまぼこ形であると思われる。端部の形状は丸みを帯びており、角をなさない。板左右にワタガミ懸緒孔が各１孔残存している。左側のワタガミ懸緒孔の位置から、ワタガミ懸緒孔は横位２孔１組であったと考えられる。面取り加工などの端部加工はみられない。

後胴上段帯金　中央より左側はほとんど欠損している。横方向に長い帯状の鉄板で、上下幅は約５cmである。左脇側端部は斜めに裁断されており、板はちょうど横長台形状になっている。板中央部

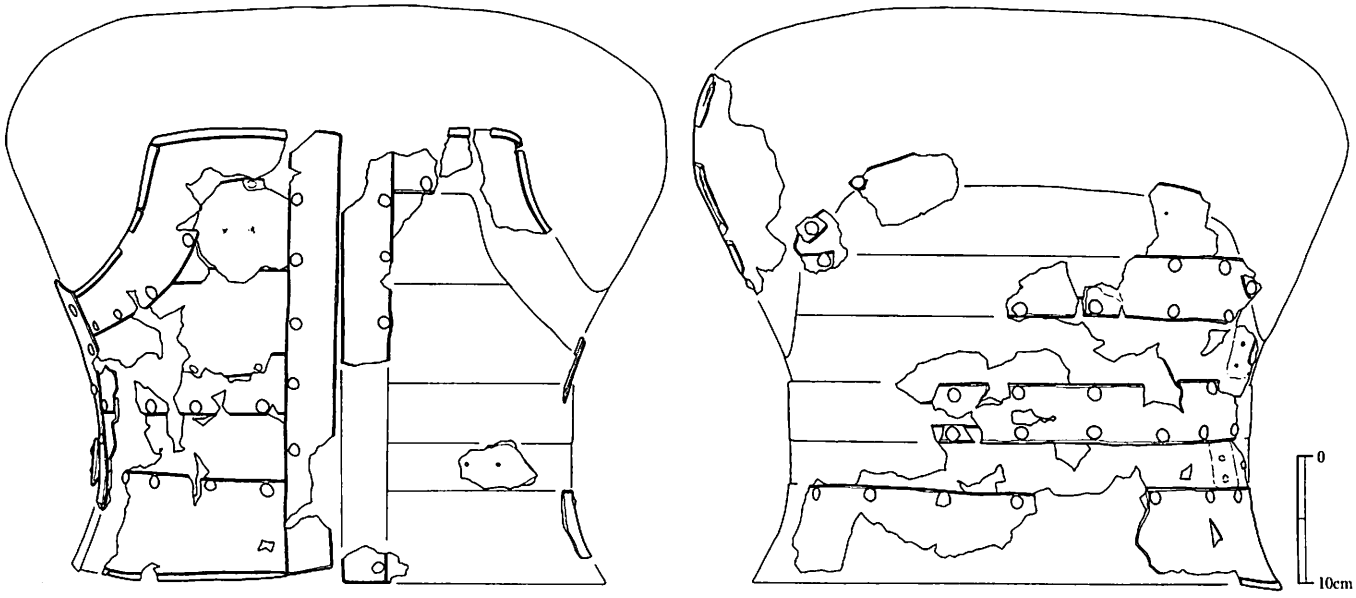


図40　３号墳出土短甲復元図

にワタガミ貫緒孔が１つ認められる。右脇側には押付板同様の性格不明の工具痕跡が存在する。下辺部が２分の１以上残存しているため、中段地板との結合は７鋲をもってなされたことがわかる。上辺も同様に７鋲をもって上段地板と結合されていたものと判断できる。外面上下辺には幅の広い面取りがなされている。

後胴中段地板　右脇側と中央付近の一部が残存している。通有の形態と考えられるが、上辺脇部は前胴中段地板と同様に、外湾するカーブで、通有の形態と異なる。上下幅は約8.0cmである。右の脇部には鉄折覆輪が施されており、そのすぐ横には蝶番金具が取り付けられていた痕跡が認められる。また、右脇側に、押付板同様の性格不明の工具痕跡が１つ認められる。鉄板端部には面取りなどはなされていない。

後胴下段帯金　約２分の１が残存している。横方向に長い帯状の鉄板で、上下幅は4.9cmである。欠損しているために、端部形態は不明である。右脇側端部付近に性格不明の工具痕跡が認められる（図版10－１の５）。外面の上下辺には幅の広い面取りがなされている。

後胴下段地板　右脇部と中央付近の一部が残存している。長方形状の鉄板で、各辺は直線的であるが、下辺はやや歪んだラインを描く。板の上下幅は7.1cmである。右脇側端辺には鉄折覆輪が施されている。また、蝶番金具が取り付けられていた痕跡が認められる。鉄板端部に面取りなどはなされていない。

後胴裾板　右脇側、および中央部から左脇側にかけての破片があり、全体の約２分の１が残存している。欠損が大きいために板の形状は明確でないが、上辺よりも下辺が長く、下方に向かってスカート状に開く形態であったと思われる。右脇端辺と下辺には幅約５㎜の鉄折覆輪が施されている。板外面の上辺には幅の広い面取りがなされている。

蝶番板　蝶番板は右前胴のみに存在する。縦方向に長い帯状の鉄板で、全体の４分の３程が残存している。板全体が短甲本体に合わせて弓なりにカーブしている。上端は脇のカーブに合わせるように内湾した形状である。板の横幅は4.5cmである。板を短甲本体へ結合するための鋲は各段の中央付近に打たれている。上下２箇所に蝶番金具が取り付けられており、下側に取り付けられた金具のみ現存している。板の端辺に面取りなどはなされていない。

蝶番金具　前胴に２個、後胴に２個、合計４個の蝶番金具が取り付けられていた。そのうち、現存するのは前胴蝶番板下部と後胴下段地板に取り付けられていた２つのみである。そのほかは、金具の痕跡のみが確認できる。後胴下段地板に取り付けられていた金具は短甲本体から脱落している。金具の形状は縦方向に長い長方形で、２鋲をもって短甲本体に取り付けられている。金具の取り付けに用いられている鋲は、短甲本体の各鉄板を結合するための鋲より小さく、直径は約７㎜である。金具の端辺に面取りなどの加工はなされていない。金具や金具が取り付けられていた周辺を観察しても革などの有機質は付着していない。

性格不明の工具痕　本短甲には、性格不明の工具痕が認められる（図版10－１の５・６）。工具痕が認められるのは、押付板肩部、後胴右脇付近であり、現存するそのほかの部分には存在しない。工具痕の形態は、不整円形のわずかな窪みで、直径は10㎜以下である。先端部が円柱状と思われる工具で、鉄板が数回たたかれたような痕跡である。このような工具痕跡は、熊本県マロ塚古墳、熊本県伝左山古墳、宮崎県島内３号地下式横穴墓、茨城県上野古墳など多くの短甲に認められる。工具痕跡の形態は多様で、孔が開いているもの、円形のもの、不整形のものなどがみられる。これら工具痕跡にはいくつかの共通点があり、内面にみられる場合が多く、「見せる」ための所作でないと思われる

こと、押付板肩部や後胴中軸線上や後胴左右の鉄板が湾曲する部分などに顕著にみられることなどがあげられる。このような特徴から、これらの工具痕は、板金の設計、組み立てなどの製作にかかわる何らかの作業痕跡ではないだろうか。

部位不明片　各破片の部位特定をおこなうなかで、割合に大型で特徴的な破片でありながら部位を特定できない破片（図37－17，図版10－２・３）が存在した。破片は7.8×5.2cmの大きさで、４枚の鉄板の存在が認められる。図上、下辺右側の鋲は三枚留をおこなっている。上辺の鋲も現状で２枚の鉄板が重なっているだけだが、内面に鉄板が重ねられていた痕跡が確認でき、三枚留がおこなわれていたことがわかる。本短甲で三枚留が認められるのはこの２箇所のみであり注目される。鉄板の重ね方や厚さから、破片は帯金の可能性が高いが部位を明確にしえない。

３．加工技術

鉄板の厚さ　本短甲には、厚さ約3.0～4.0mmの非常に厚みのある鉄板が用いられている。通有の短甲の鉄板は厚さ1.5～２mm程度のものが多いが、本例はその倍ほどの厚さがあることから、短甲自身の重量も通有のものに比べて重かったものと考えられる。このことは、本短甲の性格を考える上で興味深い。Ｘ線画像をみると、一枚の鉄板の中でも透過度に差があることから（図版15～18)、本短甲の鉄板作出は鍛打によりおこなわれていたことを示すものであろう。また、地板の厚さは、帯金や押付板などより薄いものがある。

鉄板端部形態　各鉄板を観察すると、端部に面取りがなされている板となされていない板が存在する。面取りがなされているのは、押付板、引合板、帯金、裾板の外面から見える部分であり、内面に隠れる地板などの端辺には面取りがなされていない。このことから、外面に現れる部分とそうではない部分では、鉄板端部の処理において、精粗の差があったことがわかる。ただし、蝶番板は、外面に全体が露出する部材であるにも関わらず面取りがなされていない。

穿孔　本短甲には、前胴上段板、前胴下段地板、後胴上段地板、後胴上段帯金に着装用の孔が存在している。これら各孔の穿孔方向は、錆のために判断できない。

鋲留作業痕跡　各鉄板を結合するための鋲を観察すると、鋲頭周囲の鉄板がわずかに凹んでいることがわかる（図版10－１の１)。鋲留技法による鉄板の結合は、結合する鉄板に開けた孔に鋲を外面側から通し、内面で鋲脚を叩き潰すことでなされる。そのため、鋲頭側を固定しておかねば、うまく鋲脚を叩き潰すことはできないであろう。このことから考えれば、鋲頭周囲に見られる鉄板の凹みは、鋲留作業時に内面から鋲脚を叩く際、鋲頭が浮かぬように鋲頭を覆って固定した何らかの工具痕跡であると考えられる。

覆輪施工技術　本例に施されている覆輪は鉄折覆輪である。鉄折覆輪は、鉄板端部が折り返されることによってなされるが、覆輪が施されている鉄板端部の断面やＸ線画像を観察すると、鉄板の厚さがやや薄くなっていることがわかる。このことから、覆輪施工では、鉄板端部を叩きのばすことで折り返し部分を作り出し、その部分を折り返すという作業がおこなわれていると判断できる。この鉄板端部を叩きのばして薄くし、折り返し部分を作るという所作には、折り返した際に当該部分が厚くなりすぎるのを防ぐ目的があったものと思われる。

４．設計・製作にかかわる特徴

段構成　本短甲は前胴が通有のものから１段省略された前胴６段、後胴７段構成をとる。前胴６段構成をとる横矧板鋲留短甲は、従来から前胴７段構成の横矧板鋲留短甲が簡略化したものとして捉えられてきた（小林1974：1991再録のp.159，滝沢1986：p.69，吉村1988：p.29，橋本2002：p.7な

ど)。本短甲もこうした前胴６段構成の横矧板鋲留短甲であり、製作の簡略化のため、前胴７段構成という従来の設計原理すら変化させたものであるといえる。

鉄板の結合　鉄板の結合は、部位不明片に三枚留が用いられている以外、基本的にすべて二枚留でおこなわれている。現存する破片からは、全体の様子を明らかにすることはできないが、本短甲製作における鉄板の結合は二枚留が志向されていたと判断できるだろう。

鋲配置と地板製作　短甲の鋲配置に関する言及はこれまでいくつか存在し、製作工程差、あるいは時期差として捉えられている（田中1975：1991再録のp.286，滝沢1991：pp.21－23，古谷1996：pp.68－69)。鋲配置を分類し、その変遷を示した滝沢の分類によると、本例の引合板を結合するための鋲配置はＤ類にあたり新出のものである。ただし、押付板、上段地板、上段帯金の結合のための鋲配置は、帯金中央に鋲を打つことで地板を含めた三枚留になることを避ける配置（滝沢連接位置分類のａ類）である。この鋲配置は、革綴短甲の革綴位置との関連から古相を示す様相であると位置付けられている（滝沢1991：p.21)。この鋲配置からは、押付板・竪上板と帯金を結合したのちに地板を結合するという製作工程が想定されるが、その場合、地板を充填すべき空間が地板結合前に形作られることとなる。したがって、その部分の地板を製作するには、この空間形状に合わせて製作することが可能となる。つまり、当該部分の地板製作に関しては、板金作出段階での厳密な設計をおこなう必要がなく、地板製作は簡略化されることになる。この帯金中央に鋲が打たれる鋲配置は、必ずしも、革綴短甲の連接位置との関連を持つものではないと言えよう。この鋲配置が、新相に位置づけられる鋲留短甲に一定量見られることや、他の地板との重なりなどを考慮する必要がない前後胴上段地板付近に多いことも、この想定を支持するものであろう。（西嶋）

②３号墳出土横矧板鋲留短甲の位置付け

本短甲は前胴６段、後胴７段構成の横矧板鋲留短甲である。右前胴開閉式で前胴にのみ蝶番板が取り付けられ、長方形２鋲形式の蝶番金具で前後胴が連接されていた。短甲の前胴引合板部分と右前胴蝶番板部分以外の全周には鉄板端部を折り返した鉄折覆輪が施されており、直径10㎜を超える超大型鋲が用いられていること、幅の広い帯金が用いられていることなど、最新相の横矧板鋲留短甲にみられる諸特徴を備えている。とくに前胴を一段省略した形態は、製作簡略化のために基本的な段構成すら変化させているものと言うことができる。また、厳密な設計を省いた地板製作や鋲配置、三枚留を避けた鉄板の結合など、製作にかかわる諸特徴からは一貫した製作簡略化への志向を見出すことができる。

したがって本短甲は、鋲留短甲のなかでも、もっとも新しい段階に製作されたものと評価することができ、古墳時代中期後葉、須恵器型式ではＴＫ47型式期に位置付けられよう。（西嶋）

（３）武器

①鉄刀（図41，図版11・21）

３号墳出土の鉄刀は２点図示している。これらは1982報告に掲載されているものと同一である。この２点は1982報告の写真図版において接合された状態で掲載されているが（米倉編1982：図版23－上)、現状で接合はしない。しかし、同一個体である可能性はあるだろう。また、1982報告には３号墳出土としてもう１点鉄刀が報告されているが（同文献：第８図－10)、それは前島（３号墳墳頂部）表採とされるものであり、確実に３号墳にともなうとはいえない。よって、現在確認できる３号墳出土鉄刀の最小個体数は１点である。ただし、1982報告では２点以上出土と報告されている。

図41－1は切先を含む刀身の破片である。銹化や剥離が非常に激しい。残存長32.5cm、残存最大幅2.9cmを測る。厚さは銹化のため大きく膨れている。全体の形状はやや内湾しているようにみえるが、銹化による変形であろうか。刀身は平造りで、表面に鞘のものと思われる木質が残存している。

2は刀身から茎にかけての破片である。刀身は上半部を欠損するが、茎は茎尻まで残る。この個体も1と同様、銹化や剥離が非常に激しい。残存長31.1cm、残存最大幅3.2cmを測る。刀身をみてみると、残存している部分は背側も刃側も直線的である。湾曲している箇所もみられるが、これは銹化による変形と思われる。断面形は大きく変形しているが、平造りであろう。刀身の表面には鞘のものと考えられる木質が残存している。関は欠損しているが、残存している部分の状況から片関で刃側がナデ関になると判断できる。茎は茎尻に向かってわずかに幅を減じていく。茎尻は栗尻である。目釘孔は径0.2cmのものが、関近くと茎尻近くの2箇所にある。茎の断面形も大きく変形しているが、背側で厚く刃側で薄くなっている様子が観察できる。（三好）

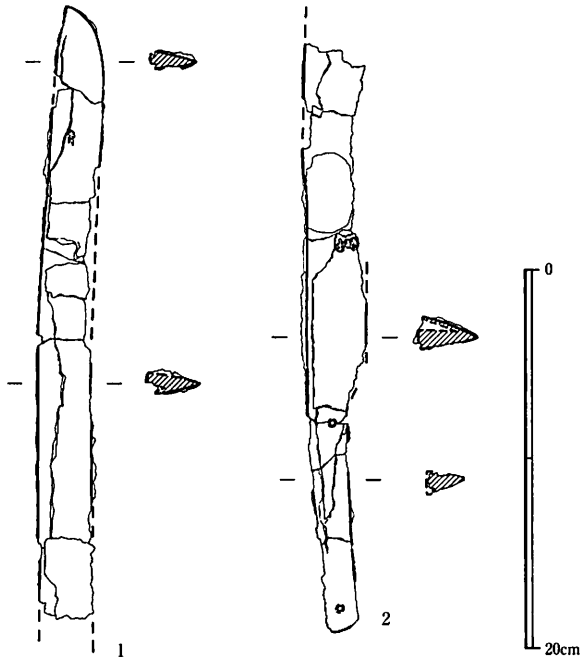


図41　3号墳出土鉄刀実測図

②鉄鏃（図42，表9，図版13・25）

3号墳出土の鉄鏃は、鏃身部が遺存するもの4点、頸部から茎部にかけてが遺存するもの6点、頸部のみが遺存するもの3点、茎部のみが遺存するもの2点を確認できる。これらのすべてを図化、掲載している。

鏃身部が残存する4点は、2点の細根鏃と2点の平根鏃に分けられる。

細根鏃に分類した図42－1・2は、片刃式鉄鏃である。1は切先と茎尻を遺失している。残存長14.60cm、鏃身残存長1.70cm、同幅0.70cmを測り、鏃身復元長は2.40cm程度である。鏃身関は腸抉をもつが、その角度はやや浅い。鏃身断面は平片刃造りである。頸部長9.30cmで、同幅は、頸部中央付近で0.4cm、頸端部で0.60cmと、頸部下端に向けてやや幅を増す。茎部は長さ3.85cmで、断面は方形である。また、矢柄の木質が残る。2は片腸抉部から頸部が遺存するもので、その形状から、独立片腸抉式鉄鏃や、段違い腸抉式鉄鏃の可能性も残す。残存長2.65cm、鏃身残存長1.30cm、同幅0.60cmを測る。鏃身関は腸抉をもつが、1と同様にその角度は浅めである。鏃身断面は平片刃造りである。頸部残存長は1.50cmである。

3～5は、細根鏃の頸部片である。木質の付着が確認できず、その幅が均一であるものをここに分類している。

6～11は、細根鏃の頸部から茎部にかけての破片である。茎関の形態から、大きく2つに分類できる。1つは、台形関で、幅を増した頸部下端、すなわち関側端部を長軸方向と平行になるよう加工するもので、6・7が該当する。もう1つは、こうした加工を施さない台形関で、8～11がこれにあたる。両者ともに、頸部なかほどの幅は0.50cm程度、頸端部の幅は0.70～0.80cm程度である。いずれも茎尻を欠損している。

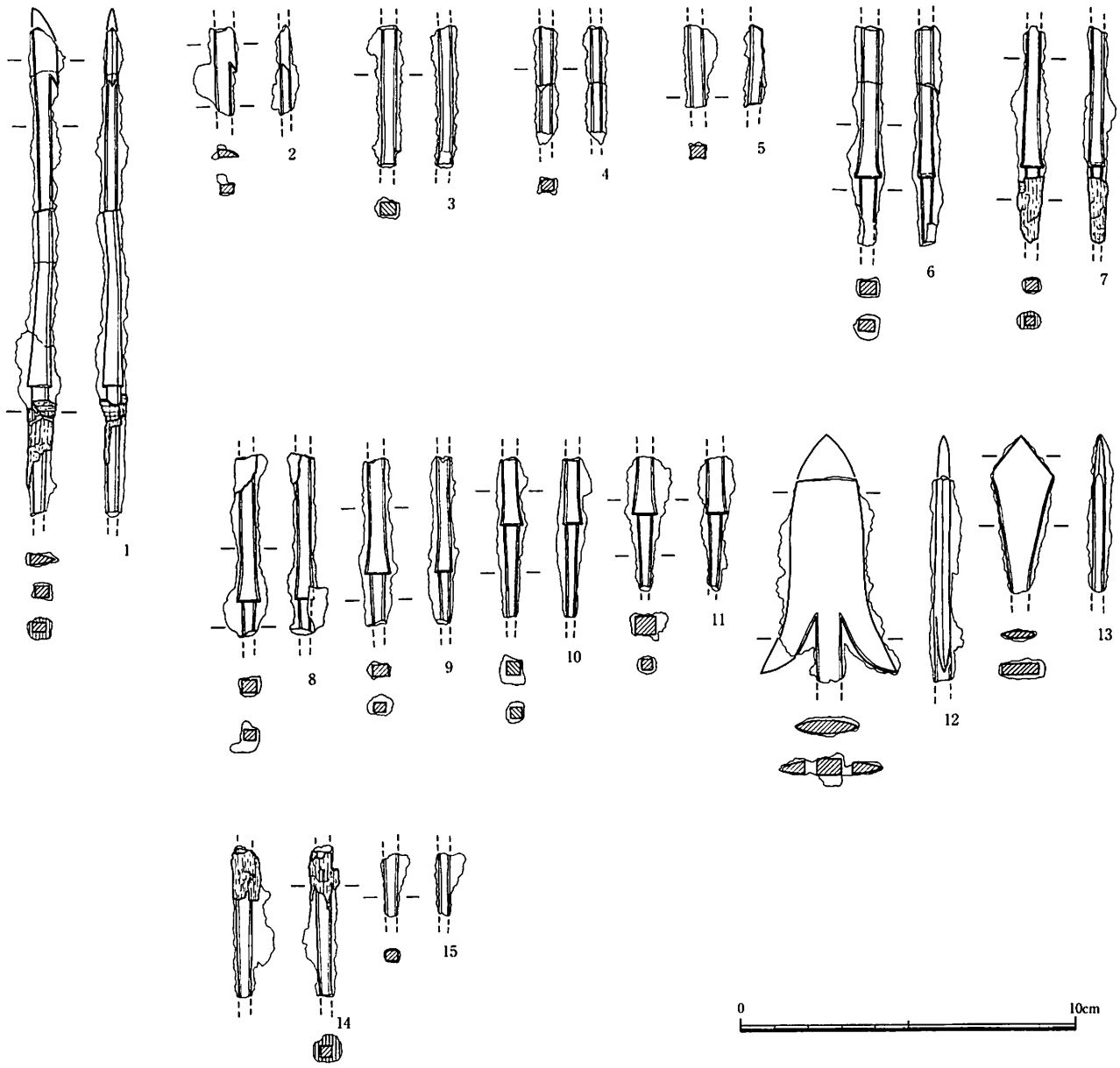


図42　３号墳出土鉄鏃実測図

表９　３号墳出土鉄鏃計測表

挿図番号	全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	頸部端幅	茎部長	形態	1982報告番号	備考
42－1	14.60＋	1.70＋	0.70	9.30	0.65	3.85＋	片刃	23	
2	2.65＋	1.30＋	0.60	1.50＋	－	－	片刃		
3	4.25＋	－	－	4.25＋	－	－	頸部片		
4	3.30＋	－	－	3.30＋	－	－	頸部片		
5	2.50＋	－	－	2.50＋	－	－	頸部片		
6	6.50＋	－	－	4.55＋	0.80	1.95＋	台形関		
7	6.60＋	－	－	4.30＋	0.80	2.30＋	台形関		
8	5.20＋	－	－	4.30＋	0.70	0.90＋	台形関		
9	5.00＋	－	－	3.50＋	0.80	1.50＋	台形関		
10	4.75＋	－	－	2.05＋	0.70	2.70＋	台形関	32	1982報告より欠損、1982報告では出土古墳の記載なし
11	4.00＋	－	－	1.75＋	0.80	2.25＋	台形関		
12	5.90＋	5.80±	2.10（ふくら）4.00（最大値）	1.95＋	－	－	平根系腸抉柳葉	19	
13	4.75＋	1.20	1.85±	3.55＋	－	－	平根系圭頭	45	
14	4.50＋	－	－	－	－	4.50＋	茎部片		
15	1.85＋	－	－	－	－	1.85＋	茎部片		

※単位はcm。＋は残存長。±は復元値で誤差を含む。

平根鏃は、12・13の２点である。12は腸抉柳葉式鉄鏃である。欠損部分が多いが、１号墳から出土した平根系腸抉柳葉式鉄鏃と同様に、有頸鏃であったとみている。鏃身上半にふくらをもち、鏃身下半は大きく外反しながら腸抉先端に到る。切先から腸抉先端までの復元長は7.15cm、ふくら付近の幅は2.10cmを測る。鏃身断面は両丸造りである。13は圭頭式鉄鏃である。残存長4.75cm、鏃身長1.20cm、同最大幅の復元値は1.85cmで細身である。

最後に茎部片である。14は矢柄の木質が付着していること、15は上下で幅を違えることから、これらを茎部であると判断した。細根、平根のどちらに付属するのかは不明である。

上述のように、３号墳出土鉄鏃として、破片数15点が確認できた。鏃身部や茎関から推測できる個体数は９点程度である。盗掘等の影響も考慮すべきであるが、１号墳と比べるとその数と種類はきわめて貧弱である。

３号墳の時期については、片刃式長頸鏃が参考になる。鏃身関が腸抉をもち、茎関がすべて台形関である点などを考えあわせると、中期後葉の年代が与えられる。初葬年代は、角関を有す１号墳と同時期もしくはやや下る可能性がある。（牧野）

（４）工具

①刀子（図43－１・2，図版11・19）

３号墳から出土した刀子の最小個体数は２点である。今回図示した２点は、1982報告で図の提示がなされていないものである。

図43－１は刀身から茎にかけての破片で、刀身の上半部と茎の先端を欠損している。残存長4.5cm、最大厚0.4cm、刀身残存長1.4cm、刀身最大幅1.5cm、茎残存長3.1cm、茎最大幅1.1cmを測る。刀身は背側、刃側ともに直線的で、幅を広げながら関に至る。関は木質によって直接観察することができないが、Ｘ線画像から両関で背側、刃側ともに直角関であることがわかる。茎は茎尻に向かって幅を減じていく。ちょうど関の部分から下方に、柄のものと考えられる木質が残存している。

２は茎の破片である。残存長4.1cm、残存最大幅1.3cm、残存最大厚0.4cmを測る。幅は茎尻に向かって減じていく。茎尻は栗尻である。断面形をみてみると、刀身に近い上方では背側が厚く刃側が薄くなっている。茎尻に近い部分では背側も刃側も同じ厚さとなる。柄のものと考えられる木質が全体的に薄く残存している。（三好）

②刀子鋼（図43－3，図版11・19）

再整理作業により、未報告の３号墳出土遺物のなかから、環状の鉄器をみいだすことができた（図43－３）。これは形状から判断して刀子の鋼であると考えられるが、全体の半分以上を欠損している。残存長2.3cm、幅1.1cmを測る。鉄板を環状に加工したもので、鉄板のつなぎめのように観察できる箇所がある。内側には木質が残存しており、刀子の柄に由来するものであると考えられる。木質をみると、図上の上端の面は本来の形態を保っている。この面が柄の上端であると考えられ、本来装着されていた方向をうかがい知ることができる。なお、現状でこれと接合できる刀子はない。（三好）

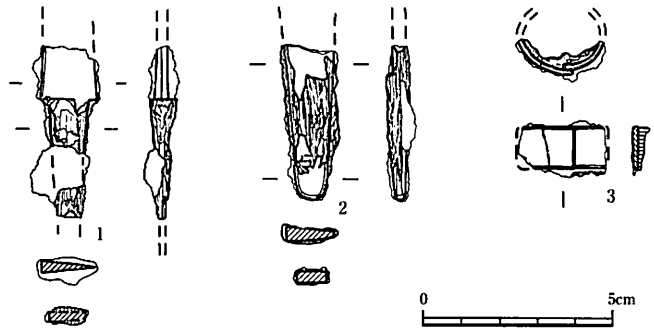


図43　３号墳出土刀子・鋼実測図

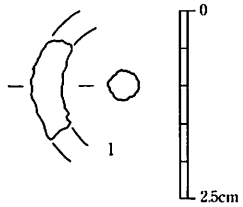


図44　３号墳出土耳環実測図

（５）装身具

①耳環（図44，図版14・19）

1982報告では３号墳から耳環４片が出土したとなっているが、現在確認できるのは１片のみである（図44－１）。全体に銹化しているため、本来の形状は不明瞭である。材質は錫製無垢で、断面径は0.40×0.40cmである。なお、本書で実測図を掲載した耳環は、すべて蛍光Ｘ線分析による材質の同定を行っている。（島津屋）

②ガラス小玉（図版14－３段目右１点・４～７段目）

３号墳からはガラス小玉が278点出土している。そのほか細片化したガラス小玉片が存在するが、色調の特徴からこれらは２点以上のガラス小玉片であることが知れる。したがって、３号墳から出土したガラス小玉の最小個体数は280点である。ガラス小玉は円形ないし楕円形で、大きさは大小２つのグループに明確に分かれる。大型の一群（図版14－７段目）は直径6.5～8.8㎜、高さ4.5～7.1㎜、小型の一群（図版14－３段目右１点・４～６段目）は直径2.5～4.7㎜、高さ1.2～3.3㎜である。色調は１号墳と同様に青色系が主体で、濃紺色、紫色、やや緑がかった水色、スカイブルー、そして黄緑色がある。

これらガラス小玉を観察すると、形態的には、①小口面、側面ともに丸いもの、②小口面は丸いが側面はやや直線的なもの、③小口面は平坦だが、側面は丸いものがある。気泡の在り方には、①気泡は小さく、数が少なく、孔と平行方向に並ぶもの、②気泡は小さく、数は多く、散在するもの、③気泡は大きく、数が多く、孔と平行方向に並ぶものに分類される。いずれも製作方法は、基本的に引き伸ばしたガラス管を切断し、再加熱することで小口面の処理がなされる方法であると判断される。気泡の在り方などの違いは１号墳のガラス小玉と同様の理由が考えられよう。また、小口面の処理方法についてみると、大型の一群は、端面が平坦で研磨によるものと考えられるものばかりであるのに対して、小型の一群は、端面が丸みを帯びるものが圧倒的に多く、再加熱によるものがほとんどであることがわかる。（西嶋）

４　４号墳出土遺物

（１）武器

鉄刀（図45，図版11・21）

４号墳から出土した鉄刀の最小個体数は１点である（図45）。図示しているのは下半部を欠損した刀身片で、全体的に銹膨れが激しい。これは1982報告に掲載されているものと同一である。残存長18.4cm、残存最大幅3.3cm、残存最大厚0.6cmを測る。残存している部分では、背側は直線的で、刃側はふくらが枯れた後直線的に垂下する。刀身は平造りである。（三好）

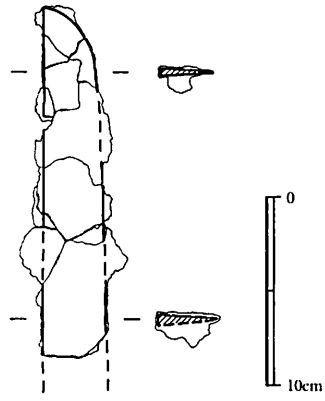


図45　４号墳出土鉄刀実測図

５　６号墳出土遺物

（１）須恵器（図32，図版１）

図32（51頁）の９は６号墳出土の須恵器である。瓶類の破片であると考えられる。（木村）

（2）武器

①鉄刀（図46－1・2，図版11・21）

6号墳から出土した鉄刀は2点図示している（図46－1・2）。これらは1982報告に掲載されているものと同一である。この2点は現状で接合しないが、同一個体である可能性もあるだろう。よって6号墳出土鉄刀の最小個体数は1点である。

1は銹化や剥離が非常に激しい。とくに下半部では背と刃の区別もつかないが、幅から考えて全体が刀身の破片であると判断した。また、図中の三角印の箇所は接着面が少なく本当に接合関係にあるのか不安であるが、1982報告での判断を重視して同一個体として扱った。残存長61.9cm、残存最大幅3.5cmを測る。厚さは銹化や剥離のため大きく変化しているが、中央付近では1.2cm程度であろう。全体の形態を把握するのは非常に困難だが、本来の形態を保つ部分をみてみると背側は直線的になっている。刃側には本来の形態を保つ部分が存在しない。しかし図の上端部については薄くなっていることや、現在の形態が原形をある程度反映している可能性があることから、切先であると判断した。

2は茎の破片である。残存しているのは関付近から下方で、茎の先端を欠損する。銹化や剥離が非常に激しい。残存長10.9cm、残存最大幅3.1cmを測る。厚さは銹化や剥離のため大きく変化している。関は全体が残っていないが、おそらく片関で、刃側がナデ関になるものと思われる。幅は茎尻に向かって減じていく。目釘孔は0.4×0.3cmの楕円形状のものが1つある。表面には、柄のものと考えられる木質がわずかに認められる。（三好）

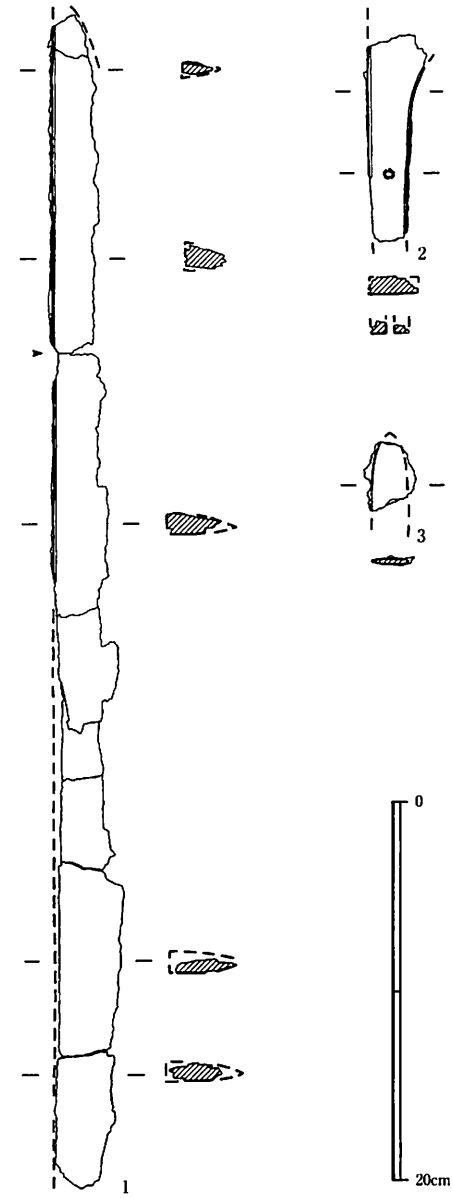


図46　6号墳出土刀剣実測図

②鉄剣片（図46－3，図版11）

1982報告では言及されていないものであるが、6号墳出土遺物のなかに、左右両側に刃を有す破片を1点確認できた。鉄剣、または鉄鏃の可能性が考えられる。銹化により外形の把握は困難であるが、本来の形態を保つラインや破断面の観察から切先の破片であることがわかる。残存長3.7cm、残存最大幅1.9cm、残存最大厚0.4cmを測る。断面形はレンズ状で、明瞭な鎬をもたない。（三好）

③鉄鏃（図47，表10，図版13・25）

6号墳出土の鉄鏃は、鏃身部の遺存するものが3点、茎部のみ遺存するものが2点確認できる。鏃身部が遺存する3点は、すべて平根鏃である。そのすべてを図化、掲載する。

図47－1は、方頭式鉄鏃もしくは圭頭式鉄鏃であると思われるが、鏃身先端部を遺失しているため形態の確定はできない。残存長8.00cmであり、茎関は棘状関である。茎関から下は3.95cmを測る。

2は、鏃身部の切先から鏃身関の片側にかけて遺失しているが、腸抉三角形式であると思われる。鏃身関は腸抉をもち、その根元部は丸く削り出される。残存長7.95cm、頸部長3.20cmであり、茎部残存長3.30cmを測る。銹化により、全体的に膨張している。

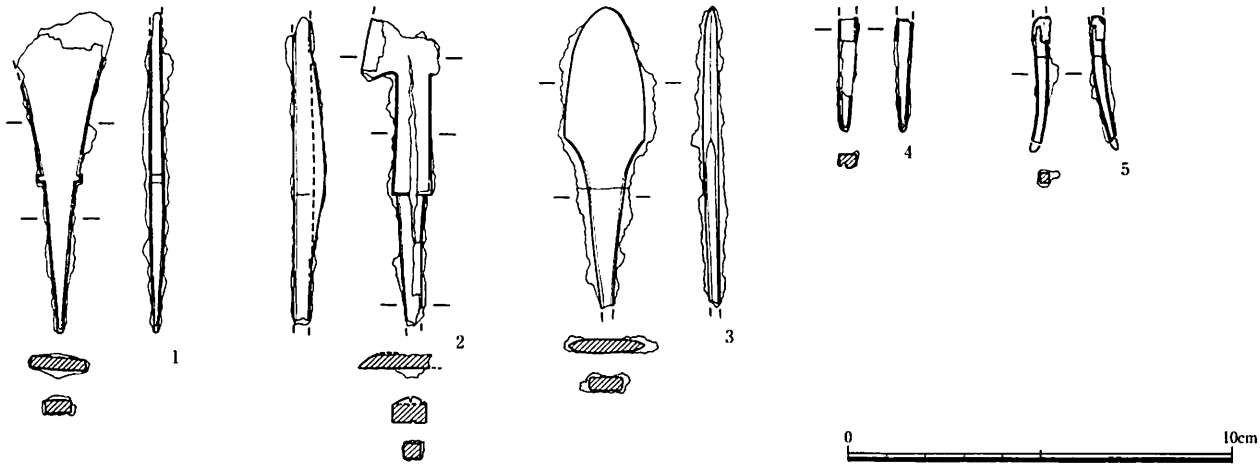


図47　６号墳出土鉄鏃実測図

表10　６号墳出土鉄鏃計測表

挿図番号	全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	頸部端幅	茎部長	形態	1982報告番号	備考
47－1	8.00＋	－	－	4.05＋	1.05	3.95	圭頭？方頭？	21	
2	7.95＋	1.65	－	3.20	1.00	3.30	腸抉三角形	34	1982報告より鏃身部欠損
3	7.95＋	3.55	2.10	－	－	4.40＋	柳葉	20	
4	3.00＋	－	－	－	－	3.00＋	茎片		
5	3.30＋	－	－	－	－	3.30＋	茎片		

※単位はcm。＋は残存長。

３は柳葉式鉄鏃である。鏃身部長3.55cm、同最大幅は2.10cmであり、断面は平造りである。鏃身関はナデ関である。鏃身関から茎部下端まで4.40cmを測り、茎尻を欠く。

４・５は茎部片である。

以上からわかるように、６号墳からは平根鏃のみが確認された。盗掘による影響も考慮すべきではあるが、長頸鏃の破片が一片も見当たらないことに着目すると、平根鏃主体の鏃構成であった可能性が高い。古墳時代後期以降、西日本に広く分布する鏃身ナデ関を呈する柳葉式鉄鏃の存在や、後期後半以降に採用される棘状関が認められる点に着目すると、６号墳は後期を中心とした鏃構成を示すといえよう。（牧野）

（３）工具

刀子（図48，図版11・19）

６号墳出土の刀子として４点図示している。これらのうち図48－４については、刀子ではなく鉄鏃の茎である可能性もあるだろう。よって６号墳から出土した刀子の最少個体数は３点、もしくは４点である。1982報告では、今回図示したもののうち１のみ図が提示されており、６号墳出土の刀子は１点以上であるとされている。

１は刀身から茎にかけての破片で、刀身の上半、茎の先端を欠損する。残存長6.7cm、最大厚0.4cm、刀身残存長4.2cm、刀身最大幅1.6cm、茎残存長2.5cm、茎最大幅1.0cmを測る。刀身をみてみると、背側は直線的、刃側はやや内湾気味で、幅を広げながら関に至る。関は両関で、背側、刃側ともに直角関である。茎は茎尻に向かって幅を減じていく。関よりわずかに上方から茎にかけて有機質が残存している。この有機質は茎に巻きつけられたもので、繊維の方向は刀子の軸に対して直交している。この有機質の上面には、刀子の軸に対して平行方向の木質もわずかに残存しており、これは柄のもので

あると思われる。

2も刀身から茎にかけての破片で、刀身は上半を欠損するが、茎は完存している。銹化により全体的にやや膨らんでいる。残存長6.1cm、背関までの刀身残存長2.4cm、刀身残存最大幅1.9cm、背関からの茎長3.7cmを測る。最大厚は0.6cmであるが、本来はこれよりやや薄かったものと思われる。刀身をみてみると、背側は直線的に関に至る。刃側は本来の形態を保っていない。関は両関で、背側は直角関、刃側はナデ関である。茎は幅を減じながら茎尻に至る。茎尻は栗尻である。茎の表面には1と同様、刀子の軸に対して直交方向の繊維が残存しており、茎に巻きつけられた有機質であると考えられる。

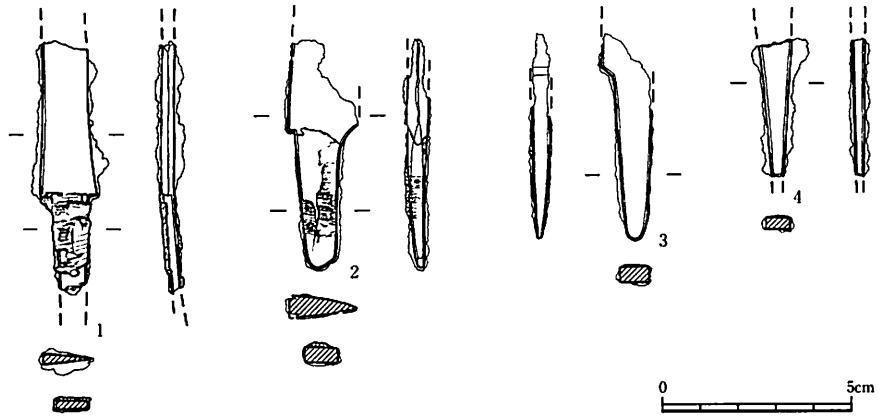


図48　6号墳出土刀子実測図

3も刀身から茎にかけての破片であるが、刀身は大部分を欠損しており背側の関部分付近しか残存していない。茎は茎尻を含む大部分が残存している。残存長5.5cm、残存最大厚0.5cm、残存刀身長0.9cm、茎長4.4cm、茎残存最大幅1.0cmを測る。刀身はほとんど残っていないが、残存している背関付近は直線的である。関は背関が斜角関で、刃側は不明である。茎は幅を減じながら茎尻に至り、厚さも関から茎尻に向かって薄くなる。また、茎尻は栗尻である。茎の表面には1・2と同様、有機物を巻いていた痕跡が一部認められる。

4は茎の破片であり、茎の上半と茎尻を欠損している。上述したように、刀子ではなく鉄鏃の茎である可能性もある。残存長3.6cm、残存最大幅0.9cm、残存最大厚0.4cmを測る。幅は茎尻に向かって減じていく。　（三好）

（4）器種不明鉄器（図49，図版11・21）

6号墳出土鉄器のなかに、幅約2.5cm、残存長約12.6cm、厚さ約0.15cmの帯状の鉄板がある（図49）。現状ではその2箇所で大きく屈曲しているが、それは後世の土圧によるものであろう。破損のない端部付近に鋲脚のみが残存し、装飾はみられない。裏面には金具の短辺方向に沿う木目をもつ木質が付着している。このことから、可能性としては靫の責金具などが考えられる。　（島津屋）

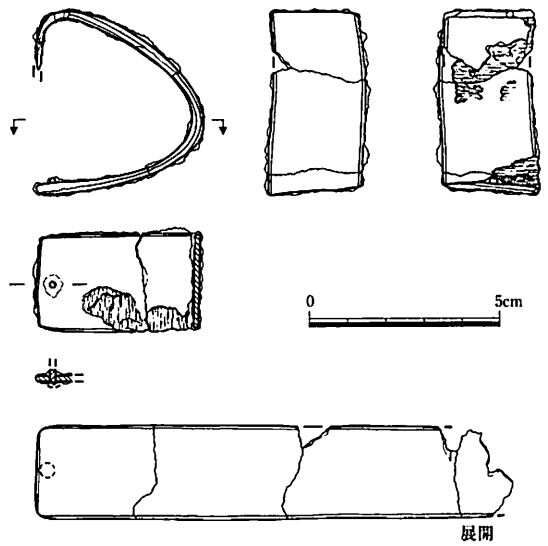


図49　6号墳出土器種不明鉄器実測図

（5）装身具

①耳環（図50，図版14・19）

1982報告では6号墳から耳環4片が出土したとなっているが、今回の整理作業では報告後に破損して分

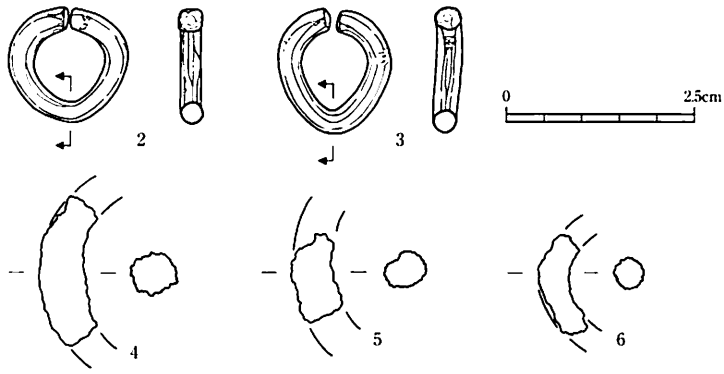


図50　６号墳出土耳環実測図

割・小片化したものも含めると、完形２点と小片３片が確認された。

図50－２・３（1982報告：第10図－54・55）は対をなすと考えられ、ともに中実の銅芯金箔張耳環である。蛍光Ｘ線分析において環体表面から水銀が検出されなかったことから、鍍金ではなく金箔張であると判断した。開口面では箔の重ね部分と思われる段差がわずかに観察できる。また、中央が円形状にやや窪むことから、開口部に円形の金箔の蓋を被せた後、環体に巻いた金箔を折り込む技法で製作されたことが想定される。状態はきわめて良好で、色はややくすんだ金色を呈す。開口部周辺には工具痕が残り、環内側には磨きの痕跡がよく残る。２の断面径は0.30×0.30cm、３も0.30×0.30cmである。

４（1982報告：第10図－57）は耳環の一部と考えられる小片である。銹化が著しく、大きくひび割れるため本来の形状は不明瞭である。材質は錫製無垢で、断面径は0.53×0.60cmである。５（1982報告：第10図－58の一部）も同様で本来の形状を失っている。材質は錫製無垢で、断面径は0.47×0.54cmである。６も小片で、褐色の銹に覆われるため本来の形状は不明瞭である。同じく錫製無垢で、断面径は0.40×0.40cmである。（島津屋）

②勾玉（図版14－８段目左端）

６号墳からは勾玉が１点出土しており、碧玉製である。長さ39mm、幅11.6mmのＣ字形で、穿孔のある面は両面とも平坦面が形成されているため、断面は短辺が丸みを帯びた長方形である。

勾玉の表面は丁寧に研磨されており、肉眼観察では擦痕を確認できないが、実体顕微鏡による観察の結果、複数方向への擦痕が認められた。穿孔は片面穿孔で、穿孔が開始される面での孔径は4.2mm、穿孔が終了する面での孔径は2.1mmである。孔内壁を観察すると、孔と直交方向に筋状痕があり、穿孔は工具などの回転運動によってなされたことがわかる。穿孔終了面の孔周辺には細かな剥離痕跡が認められるが、孔を貫通させるための故意の剥離なのか、穿孔の際に意図せず剥離したものなのか判然としない。（西嶋）

③切子玉（図版14－８段目中央）

６号墳からは切子玉が４点出土しており、水晶製である。いずれも六角形であり、長さは各個体でばらつきがあるものの、長さと幅の比率がほぼ同一の１点を除けば、細長い形状である。玉の表面は風化のためか磨りガラス状で半透明となっている。

実体顕微鏡で切子玉表面を観察すると、穿孔と同方向の擦痕が認められる。穿孔は４点中３点は片面穿孔であり、孔径は穿孔開始面から穿孔終了面に向かって小さくなっている。穿孔終了面には大小の剥離が認められるが故意のものか判断できない。もう１点は穿孔終了面側に浅く穿孔がなされている。各面を観察すると、穿孔と直交方向に並ぶ６面の境界は角が明瞭で、一直線であるのに対し、穿孔と同方向で上下に隣り合う２面は境界の角が甘く、穿孔と直交方向で隣り合う面同士で境界のラインが一致しない。このことから、切子玉の製作に当たっては、まず、穿孔と直交する６面を研磨により成形し、その後に作出された各面ごとに、面を二分割するように研磨するという作業工程が想定される。（西嶋）

④丸玉（図版14－８段目右端の３点）

６号墳出土の丸玉は３点とも石製で、色調は橙色である。いずれも不整形な球形であるが、１点のみ穿孔開始面がすり鉢状に窪んでいる。玉の直径は9.2～13.2㎜、高さが7.0～10.1㎜である。

表面はなめらかで光沢があるが、ところどころに凹凸があり、玉製作は素材を粗く打ち割っておおよその原形を整える成形段階と、研磨により形態を整える整形段階があったことがうかがわれる。穿孔はいずれも片面穿孔で、穿孔開始面から終了面に向かって孔径が小さくなっている。穿孔終了面には剥離が認められるが、これも勾玉や切子玉同様に故意のものか判断できない。孔内壁には孔に直交する筋状痕が認められ、穿孔は工具などの回転運動によってなされたことがわかる。　（西嶋）

⑤ガラス小玉（図版14－８段目右端の下１点）

６号墳出土のガラス小玉として1982報告では３点が報告されているが、現状では１点のみを確認できる。色調はやや緑がかった青色である。直径4.3㎜、高さ1.9㎜、孔径1.2㎜で、円形である。

このガラス小玉を観察すると、わずかに、孔と平行方向に筋状の気泡列を確認できる。また、小口面、側面など全体的に丸みを帯びている。これらの特徴から、ガラス玉は、引き伸ばしたガラス管を切断し、小口面を再加熱処理することで製作されていると判断される。　（西嶋）

6　出土古墳不明遺物

（１）須恵器（図32，図版１）

図32（51頁）の10～13は出土古墳不明の須恵器である。10は瓶である。器壁が厚く作りも荒い。11～13は甕である。11・13の外面は格子目タタキ、内面は同心円文当て具痕が残る。12は外面タタキの後、カキ目を施す。内面は同心円文当て具痕が残る。　（木村）

（２）武器

両頭金具（図51，図版11・19）

カミノハナ古墳群出土遺物のなかに、両頭金具が５点確認された。これらは、注記がなされていなかったことから出土古墳や出土状況が不明であり、同一古墳から出土したものなのかどうかもわからない。以下、この５点の両頭金具について記述する。なお、本書第Ⅳ部の三好論文で述べるように両頭金具は弓の飾り金具であり、筒状の皮金具のなかに芯金具を挿し込み、その芯金具の両側をかしめて留めるという構造をもつ。

図51－１は５点の両頭金具のなかでもっとも残存状態が良い。芯金具の全長は3.7㎝であり、軸部の断面形は径0.4㎝の円形である。頭部は扁平な方形を呈しており、図の右側のものが左側のものより大きくなっている。皮金具は全長2.3㎝である。筒部の断面形は楕円形を呈し、図の右方で径が大きく左方で小さくなっている。両頭金具を上下方向から観察すると（図の上段）、折り返し部は装着された弓の横断面に沿って弧を描く。また横方向から観察すると（図の下段）、折り返し部は弓の縦断面に沿って直線を描き、筒部の側面には上下方向に走る弓の木質が付着している。なお、折り返し部が描く弧からは、弓の装着された部分の径が1.9㎝程度であったと推定される。折り返し部の淵はほとんど本来の形態を保っていないが、現状で花弁状の切り込みは観察できない。とくに図の右側の折り返し部については、比較的残りが良いにも関わらず切り込みが観察できないことから、もともと切り込みはなかったものと考えられる。芯金具の軸部は、皮金具よりも0.5㎝程度長い。

２は芯金具を途中から片側欠損している。芯金具の残存長は3.0㎝であり、軸部の断面形は径0.4㎝

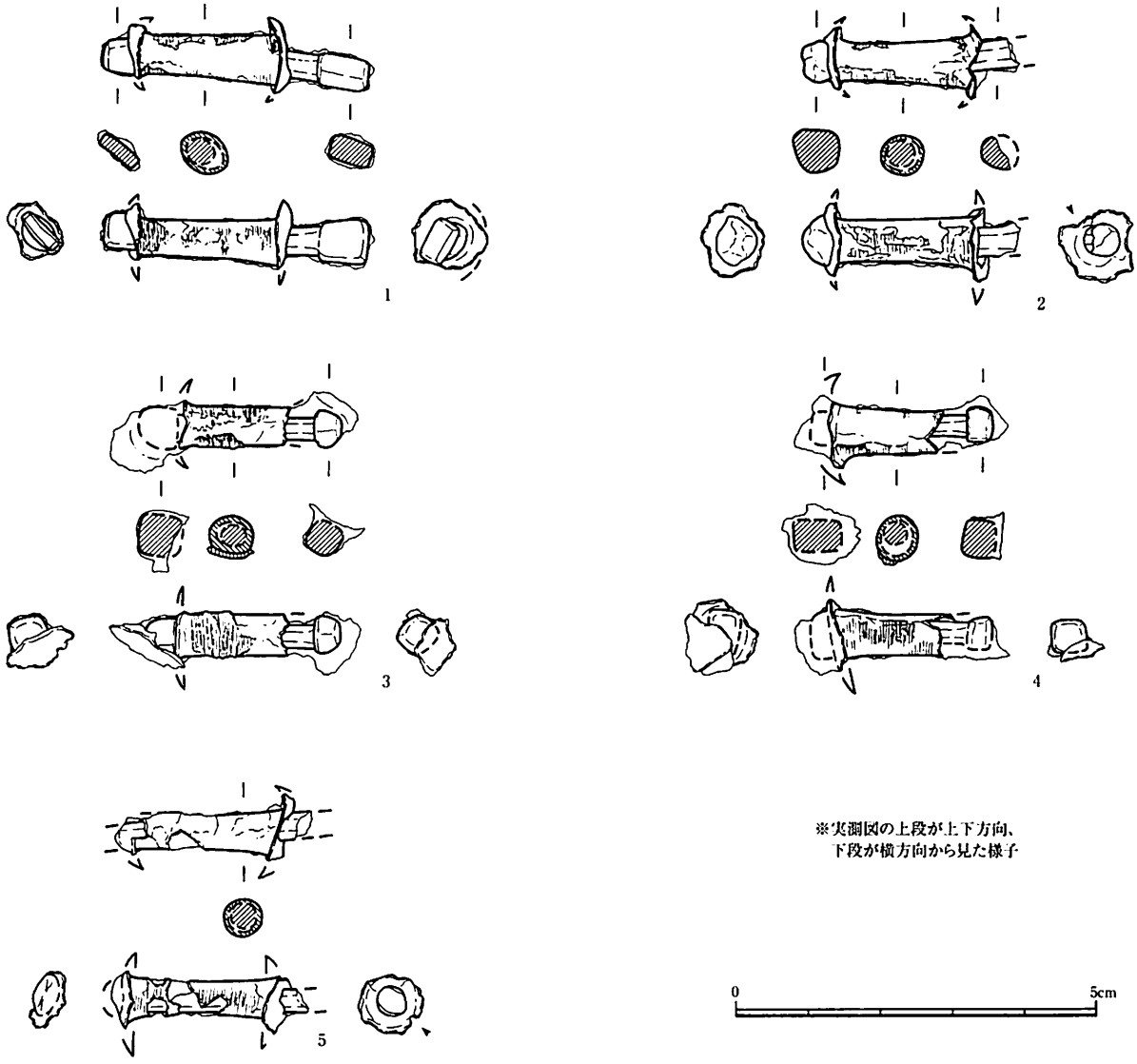


図51　出土古墳不明両頭金具実測図

の円形である。図の左側の頭部が残存しており、不整円形を呈している。皮金具は全長2.3cmである。筒部の断面形は円形を呈し、図の左方より右方の径がやや大きくなっている。１と同様、折り返し部の形態と木質の様子から上下方向と横方向が区別できる。折り返し部から推定できる弓の装着された部分の径は、約2.0cmである。折り返し部の淵には、本来の形態を保っている部分がほとんどないが、図の三角印の箇所は花弁状に切り込まれた部分である可能性がある。本来の長さを知ることはできないが、芯金具の軸部は皮金具より0.5cm以上長い。

３は皮金具の残存状態が良くない。芯金具の全長は2.8cmであり、軸部の断面形は径0.3cmの円形である。頭部は方形を呈しており、図の左側のものが右側のものより大きくなっている。皮金具の残存長は1.5cmである。筒部の断面形は径0.6cmの円形で、残存している範囲においては、１や２のように左右で径が異なる様子がみられない。折り返し部はほとんど残存していないが、わずかに残っている部分と筒部に残存した木質の様子から上下方向と横方向の区別がつく。

４は皮金具の残存状態が良くなく、また芯金具についても銹化が激しい。芯金具の推定全長は2.5cmであり、軸部の断面形は径0.3cmの円形である。銹化が激しいため詳細な観察は困難であるが、頭部は方形を呈し、図の左側のものが右側のものより大きくなっている。皮金具の残存長は1.6cmであ

る。筒部の断面形は円形で、図の右方より左方の径が大きくなっている。折り返し部の形態と木質の様子から、上下方向と横方向が区別できる。折り返し部の淵には、本来の形態を保っている部分がほとんどない。

5は5点の両頭金具のなかでもっとも残存状態が悪い。芯金具の残存長は2.7cmであり、軸部の断面形は径0.4cmの円形である。頭部は左右とも本来の形態を観察できない。皮金具の全長は2.3cmである。筒部の断面形は円形を呈し、中央部で径が小さくなるが左右ではそれほど変わらない。折り返し部の形態と木質の様子から、上下方向と横方向が区別できる。折り返し部から推定できる弓の装着された部分の径は、約2.0cmである。折り返し部の淵には、本来の形態を保っている部分がほとんどないが、三角印の箇所は花弁状に切り込まれた部分である可能性がある。残存状態が良くないが、芯金具の軸部は皮金具より0.2cm以上長い。（三好）

（3）工具

刀子（図52，図版11・19）

出土古墳不明の刀子が、最少個体数で2点確認できる。図示しているのは3点であるが、これらのうち図52－1は、2もしくは3と同一固体の可能性がある。1982報告では、これらの刀子の図は報告されていない。

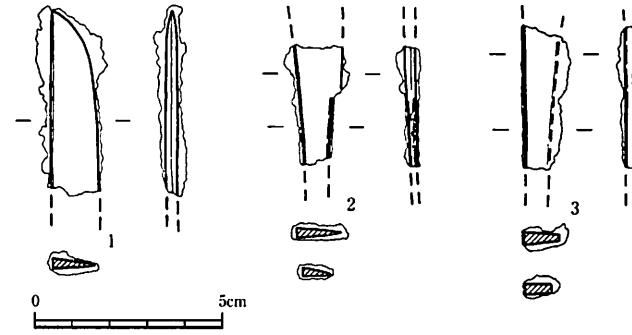


図52　出土古墳不明刀子実測図

1は切先を含む刀身の上半部の破片である。残存長4.9cm、残存最大幅1.3cm、残存最大厚0.3cmを測る。残存している部分をみると、背側は直線的で、刃側はふくらが枯れた後直線的に垂下する。

2は刀身から茎にかけての破片であり、刀身の上半と茎の下半を欠損する。残存長3.2cm、最大厚0.3cm、刀身残存長1.1cm、刀身残存最大幅1.3cmを測る。刀身は背側、刃側ともに直線的である。残存している範囲では、関に向かって幅をやや狭めているようにみえる。関は刃側のみの片関で、斜角関かナデ関か判別できない。茎は茎尻に向かって幅を減じていく。茎でも断面形は刀身のようになっている。茎には柄のものと思われる木質が残存している。全体的にやや薄く剥離しているようにもみえるが、木質の残存などを考慮して剥離していないものと判断した。

3は茎の破片で、断面の形態から刀子の茎であると判断した。上半と下半を欠損している。残存長3.8cm、残存最大幅1.0cm、残存最大厚0.3cmを測る。幅は茎尻に向かって減じていく。断面形をみてみると、刀身に近い上方では背側が厚く刃側が薄くなっている。茎尻に近い部分では背側も刃側も同じ厚さとなる。（三好）

（4）装身具

耳環（図53，図版14・19）

今回の再整理作業で、出土古墳不明の耳環片が10片確認された。それらのうち1片は砕片であったため、残る9片を図示している（図53）。

7は細形耳環の一部である。注記などのない状態で発見したため出土古墳不明としたが、1982報告の第10図－56の一部である可能性がきわめて高い。薄く黒色の銹に覆われる。材質は銀製無垢で、断

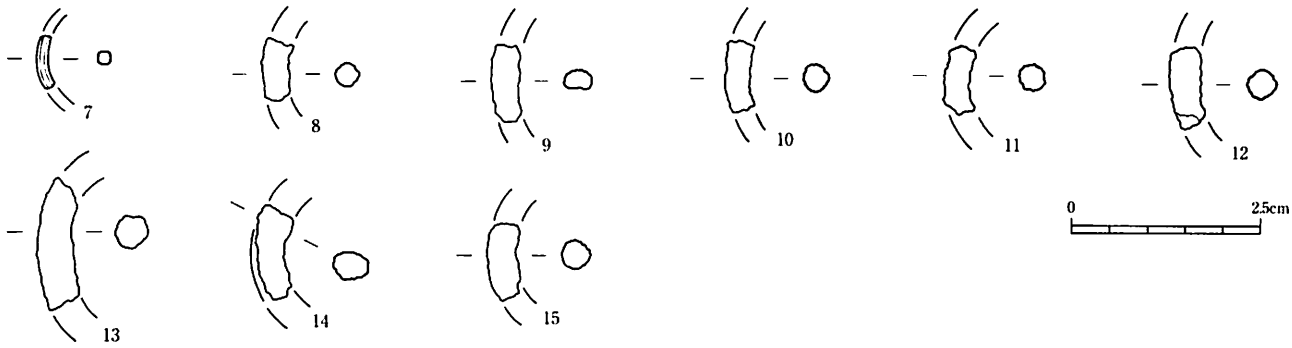


図53　出土古墳不明耳環実測図

面径は0.15×0.15cmで、断面は方形を呈す。

８～15はすべて錫製無垢で、銹化のために本来の形状を失っている。８は断面径0.36×0.36cmである。９の断面径は欠失のため正確でないが約0.36×0.36cmである。10は断面径0.37×0.36cm、11は0.38×0.31cm、12は0.40×0.40cm、13は0.41×0.41cmである。14の断面径は欠失のため正確でないが約0.45×0.45cmである。15は断面径0.39×0.38cmである。

カミノハナ古墳群出土耳環のうち、銅芯金箔張耳環２点と銀製無垢耳環１片をのぞいた残りすべてが錫製無垢耳環であることは注目される。（島津屋）

第5章　ま　と　め

カミノハナ古墳群は、熊本県上天草市松島町合津6276・6278番地に所在する古墳時代中期から後期の古墳群である。８基の円墳の存在が確認されているが、それらのうち１～６号墳は1981・1982年に熊本大学文学部考古学研究室によって発掘調査され、多くの遺物が検出された。このときの調査にかんしては２冊の発掘調査報告書（宮本編1981，米倉編1982）が作成されたが、遺物の詳細や古墳群の評価は２冊目の報告書（米倉編1982，以下では1982報告と記述）に記載された。

今回、この1982報告をもとにして出土遺物の再整理作業を行い、その成果を前章までの箇所で示してきたのであるが、ここでは再整理作業を通じて新たに明らかになった点を遺物の種類ごとに整理し、さらに、今後に残された課題を提示してまとめとしたい。（杉井）

1　カミノハナ古墳群の立地

九州島の西部には、北に有明海、南に八代海という２つの内海が存在する。八代海の西を画すのは天草諸島で、それは上島と下島を中心に、その北にある大矢野島や維和島、戸馳島、南東の御所浦島、獅子島、長島などの島々で成り立っている。

天草諸島には多くの古墳が分布するが、それらの特徴や築造時期を根拠に、かつて私（杉井）は古墳時代の天草諸島を南北２つの地域に分けて考えたことがある。１つは古墳時代前期後半から中期に多くの古墳が築造される上島北東海岸よりも北の地域、もう１つは後期になって横穴式石室墳の築造が開始される上島南半以南の地域で、前者を「大矢野・松島地域」、後者を「上島南半以南地域」と仮称した（杉井2007：pp. 337－340）。

カミノハナ古墳群は、その大矢野・松島地域に所在する。場所は、大矢野島と上島にはさまれた狭い海峡に浮かぶ永浦島の東端丘陵上で、その周囲の島々には装飾古墳として著名な広浦古墳や長砂連古墳、大戸鼻古墳群のほか、初期の横穴式石室を内部主体とする竹島３号墳などが存在する。こうしたことからわかるように、そこは大矢野・松島地域の中心をなす場所であり、また、天草諸島を南北につたう海上ルートの北の要衝の１つでもある。さらに、古墳時代中期においては、前方後円墳に代表される古墳を築く社会の最南西端の地域でもあった。（杉井）

2　出土遺物にかんする新知見

須恵器　須恵器については木村龍生によって検討され、１～３号墳で検出された須恵器の型式が示された点が重要である。木村によれば、１号墳および２号墳の須恵器はＴＫ23型式、３号墳の須恵器はＴＫ47型式に位置付けられる（本書54頁）。

円筒埴輪　円筒埴輪は１号墳から出土しているが、これについては竹中克繁によって検討が行われた。その結果、時期は川西編年のⅣ期、さらに限定すればＴＫ208型式期に位置付けられるとされた（本書28頁）。また、破片の詳細な観察から、当墳の円筒埴輪は３条４段構成であること、口縁部の長さ14.0cm弱、胴部突帯間の長さ11.0cm前後、底部の長さ13.2cmで、胴部に比べて口縁部と底部がやや長いプロポーションであること、そして透孔は２・３段目に直交配置されることが推測された。さらに、底部から口縁部へやや外傾しながら立ち上がるＡタイプとほぼ垂直に立ち上がるＢタイプの２系統に分けることができ、前者は当該時期の円筒埴輪として通有のものに近いが、後者は独自色が

強いと評価された。また、朝顔形円筒埴輪の口縁部の製作技法にも２種がみられ、１つは別個に成形した第１口縁と第２口縁を合体するもの、もう１つは第１口縁と第２口縁を一体で成形したのち、外面に突帯を貼り付けて二重口縁を表現するものとされた。そして後者はより埴輪的な成形法であり、これは円筒埴輪のＡタイプに対応する可能性が指摘された（本書33－36頁）。つまり、円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪の製作者集団には、時流にあった技法を用いる集団とやや古色の技法を用いる集団の２つが存在した可能性が示されたといえ、熊本県地域における窖窯焼成技術導入後の埴輪製作の様相を考察するうえで重要な知見を提供したといえる。

形象埴輪　形象埴輪も１号墳からの出土であり、前田真由子によって未報告資料も含めて検討が行われた。その結果、人物埴輪と鳥形埴輪が存在することが明らかとなった。それらのうち人物埴輪は壺を捧げもつ巫女であると推測された。また、巫女の衣裾の文様表現に列点文が用いられていること、鳥形埴輪の羽表現が無造作な沈線で行われていることなど独自性が強く、作りも全体的に稚拙であることから、形象埴輪の製作は在地の工人によって行われた可能性が指摘された（本書38頁）。

甲冑　甲冑は１号墳と３号墳から出土しており、西嶋剛広によって検討が行われた。

１号墳出土甲冑片は今回の整理作業においてみいだされたもので、冑片と鍔片が存在する。それらのうち冑片からわかるのは、それが鋲留冑であることくらいである。他方、鍔片については、それが３段以上で構成される板鍔である可能性が高いこと、時期はＴＫ208型式期新段階に位置付けられる可能性があることが示された（本書40頁）。

３号墳から出土したものは横矧板鋲留短甲である。1982報告では前胴７段、後胴７段構成であると報告されたが、今回の検討の結果、前胴６段、後胴７段構成の横矧板鋲留短甲であることが明らかとなった（本書54－55頁）。2009年度に刊行予定の共同研究「マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究」にかんする報告書にならって短甲各部位の特徴が詳細に記されたが、そのなかから１つを選んで指摘しておけば、押付板肩部や後胴右脇付近の内面に性格不明の工具痕が観察されたことに注目しておこう。それは直径10㎜以下の不整円形で、円柱状の工具で数回たたかれたようなわずかな窪みである（本書60頁）。その意味するところは不明であるが、注意深く観察すれば、ほかの甲冑でもこの種の工具痕が観察される可能性がある。なお、本短甲は、鋲留短甲のなかでももっとも新しい段階に製作されたもので、ＴＫ47型式期に位置付けられると判断された（本書62頁）。

鉄鏃　鉄鏃は１～３・６号墳から出土しており、牧野幸子によって検討が行われた。それらのうち２号墳出土の鉄鏃は今回の整理作業においてみいだされたものであるが、頸部もしくは茎部の一部と思われる破片が１点あるのみである（本書52頁）。したがって、以下では１・３・６号墳出土の鉄鏃についてまとめておく。

１号墳出土として確認できた鉄鏃の破片数は214点にのぼるが、鏃身部から推測できる最小個体数は56点（～60点）である。これらは55点（～59点）の細根鏃と１点の平根鏃に分けることができ、さらに細根鏃は独立片腸抉式鉄鏃27点、段違い腸抉柳葉式鉄鏃３点、腸抉柳葉式鉄鏃（19点～）23点、柳葉式鉄鏃５点、鏃身部形態不明１点に細別できる。平根鏃は腸抉柳葉式鉄鏃である。これらのうち独立片腸抉式鉄鏃には両丸タイプと片丸・片鎬タイプがあり、こうした異なるタイプが一定量副葬されていることが当墳の特徴であるとされた。そして、両丸タイプでは鏃身関と独立片腸抉の境界に明確な肩（屈曲点）を形成せずゆるやかに腸抉先端に至るのに対し、片丸・片鎬タイプでは明確な肩（屈曲点）を形成して腸抉先端に至ると観察され、こうした点などから両丸タイプはやや古相の様相を示すと評価された。また、段違い腸抉柳葉式鉄鏃は、その左右の腸抉がいずれも浅いものであるこ

とから、独立片腸抉式鉄鏃よりも新しいものであるとされ、したがって、両丸タイプと片丸・片鎬タイプの独立片腸抉式鉄鏃、および段違い腸抉柳葉式鉄鏃の３者が、時期差をもって副葬された可能性も考えられると指摘された（本書49頁）。牧野のこの見解はきわめて重要であるが、とくに独立片腸抉式鉄鏃にみられる２者の関係については、それらの石室内での出土位置を調査したうえで、さらに検討を重ねたいと思う。なお、牧野は明確に鉄鏃の時期を示していないが、鈴木一有の編年（鈴木2003ａ）を参考にすれば、両丸タイプと片丸・片鎬タイプの双方を含む独立片腸抉式鉄鏃はＴＫ208型式期頃に位置付けてよいように思う。また、段違い片腸抉式鉄鏃は、鈴木分類（鈴木2003ｂ）のⅡ類に相当することを根拠とすれば、ＭＴ15型式期以降に位置付けられる可能性がある。

３号墳出土の鉄鏃として確認できたのは、鏃身部が遺存するもの４点、頸部から茎部にかけてが遺存するもの６点、頸部のみが遺存するもの３点、茎部のみが遺存するもの２点である。鏃身部が遺存する４点は細根鏃と平根鏃のそれぞれ２点ずつに分かれ、うち細根鏃はいずれも片刃式鉄鏃、平根鏃は腸抉柳葉式鉄鏃と圭頭式鉄鏃に分類される。こうした鏃身部、および茎関から判断すると、個体数は９点程度と推測された。また、片刃式長頸鏃の形態や、確認される茎関がすべて台形関である点などから、古墳時代中期後葉の年代が与えられるとされた（本書63－65頁）。ＴＫ23～ＴＫ47型式期に位置付けられようか。なお、牧野も指摘しているが、３号墳出土の鉄鏃は、１号墳に比べてその数がきわめて少数である点、また種類がまったく異なる点には十分な注意が必要である。とくに、細根鏃に独立片腸抉式鉄鏃が含まれていない点、平根鏃に圭頭式鉄鏃が含まれる点などは顕著な相違点として指摘できる。

６号墳出土の鉄鏃は、鏃身部が遺存するもの３点、茎部のみが遺存するもの２点である。鏃身部が遺存する３点のすべてが平根鏃であり、細根鏃（長頸鏃）が存在しない点が特徴である。鏃身ナデ関を呈する柳葉式鉄鏃の存在、あるいは棘状関が認められる点から古墳時代後期を中心とした鏃構成を示すと評価された（本書68頁）。後期中葉に下る可能性も考慮すべきだと思う。

なお、1982報告で６号墳出土とされていた平根鏃（本書25頁の図16－18）は、今回の再整理作業で１号墳の出土であることを確認した（図28－55）。

両頭金具　今回の再整理作業において、未報告のままとなっていた鉄製品のなかに５点の両頭金具が存在することをみいだした。残念ながら、注記がなされていなかったため、カミノハナ古墳群のどの古墳から検出されたのかを知ることはできなかった。しかし、その構造を良好に知ることができる資料であり、三好栄太郎によって検討が行われた（本書71－73頁）。本書第Ⅳ部の三好論文でも触れられているが、両頭金具が盛行するのは古墳時代後期であるから、それを考慮すれば１号墳や３号墳の初葬にともなうものである可能性は低くなるが、どうであろうか。

耳環　耳環は３号墳および６号墳から出土しており、島津屋寛によって検討が行われた。

1982報告では３号墳から耳環片４片が出土したと記されているが、今回の再整理作業で確認できたのは１片のみである。材質は、蛍光Ｘ線分析の結果、錫製無垢であると判断された（本書66頁）。なお、注記がなされていないため出土古墳不明とした錫製無垢耳環片のいくつかが、３号墳出土のものである可能性が高い。

６号墳出土の耳環として確認できたのは、中実の銅芯金箔張耳環２点と錫製無垢耳環片３片である（本書69－70頁）。ただし、1982報告と対比すれば、出土古墳不明としたもののうち銀製無垢耳環片１片は６号墳の出土である可能性がきわめて高い。

耳環で注目されるのは、錫製無垢耳環が多く含まれる点である。この種の耳環については比佐陽一

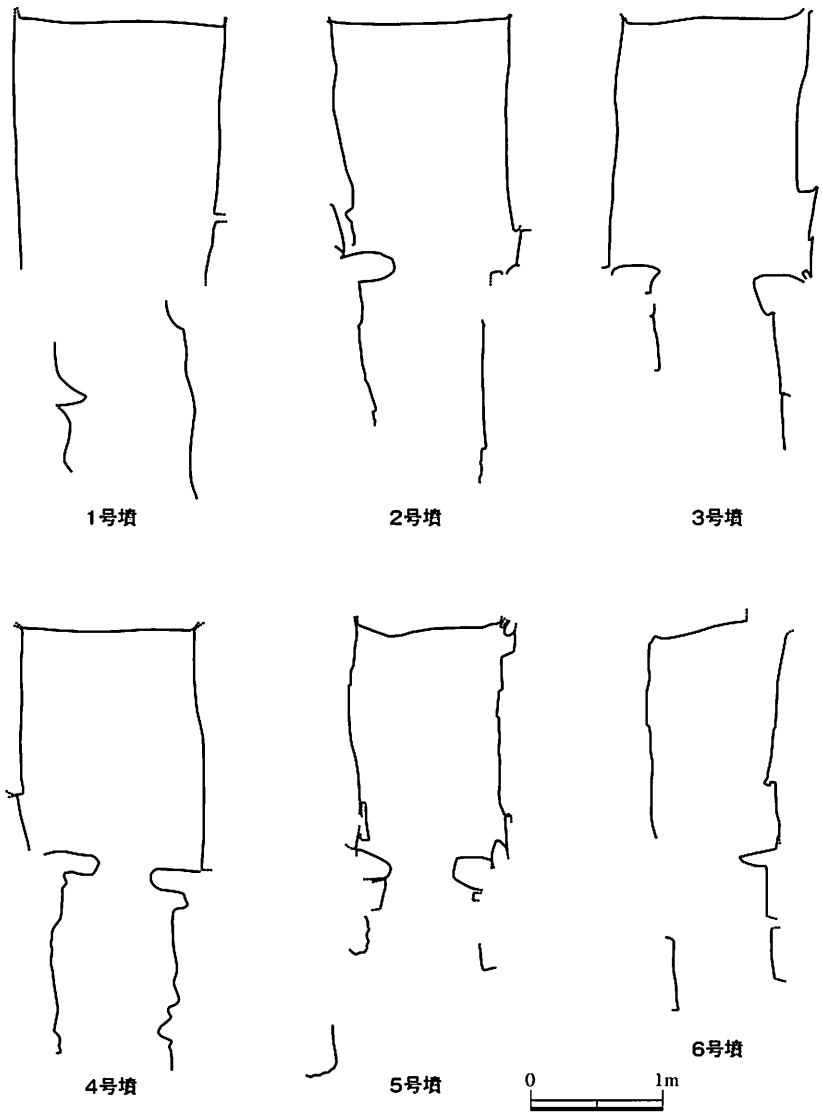


図54　1982報告で示された石室平面プラン

郎によって福岡市内の出土事例が集成されているが（比佐2003・2004，比佐・片多2003）、九州のほかの地域にかんする検討はまだ行われていない。比佐も指摘しているが（比佐2003：p.159，比佐2004：p.86）、錫製耳環の表面は暗い灰白色を呈し、細かなまだら状に多数の亀裂が生じている（図版14）。こうした特徴をもつ耳環が検出された際は、錫製である可能性を疑ってみることが必要であろう。ほかに熊本県内では、合志市豊岡宮本横穴群3・5・8号墓でも錫製耳環が検出されている（米村・杉井編2006）。なお、錫製耳環は古墳時代後期中葉以降に多くみられることから、3号墳および6号墳における埋葬時期の一端を推定する根拠となるだろう。

その他　以上のほかに、鉄剣、鉄刀、刀子、器種不明鉄器、玉類の検討が行われた。注意すべきなのは、確実に鉄剣であると判断できるものは2号墳のみで、また、水晶製切子玉は6号墳のみで検出されている点である。これらは、それぞれの古墳の時期を考えるうえで参考になる事象である。また、鞆の責金具などの可能性が考えられる器種不明鉄器が6号墳で検出されているが、今後、類似の資料の存在に注意を払わなければならないだろう。（杉井）

3　古墳の築造時期と石室構造

出土遺物からみた古墳の時期　前節で述べた出土遺物について、各古墳の築造時期あるいは追葬時期を考えるうえで参考となる知見を整理すれば、以下のようになる。

［1号墳］　須恵器の型式　：ＴＫ23型式
　　円筒埴輪　：ＴＫ208型式期
　　鍔　：ＴＫ208型式期新段階
　　鉄鏃　：ＴＫ208型式期頃、ＭＴ15型式期以降
［2号墳］　須恵器の型式　：ＴＫ23型式
［3号墳］　須恵器の型式　：ＴＫ47型式

横矧板鋲留短甲：ＴＫ47型式期
鉄鏃　　：ＴＫ23～ＴＫ47型式期
錫製無垢耳環　：後期中葉以降？
［６号墳］鉄鏃　　：後期中葉？
錫製無垢耳環　：後期中葉以降？
水晶製切子玉　：後期中葉以降？

このように整理してみると、１つの古墳にかんして示された複数の出土遺物の時期に大きな矛盾がないことがわかる。すなわち、１号墳はＴＫ208（～ＴＫ23）型式期、３号墳はＴＫ47型式期、６号墳は古墳時代後期中葉頃に位置付けることができると思う。第２章第２節第２項でも述べたが、古墳の分布をみてみると、１号墳のみがほかとはやや離れた位置に築造されており、しかもそこはもっとも標高が高い地点である（本書16頁）。１号墳は、カミノハナ古墳群でもっとも最初に築かれた古墳としてふさわしい場所に立地しているといえる。

石室構造からみた古墳の築造順序　では、横穴式石室の構造からみると、古墳の築造順序はどのように考えられるのであろうか。1982報告では、玄室の平面形が正方形に近いものから長方形へ変化するとの予想のもと、（１号墳→３号墳）⇒（４号墳→２号墳）⇒５号墳⇒６号墳の順序を想定している（米倉編1982：p. 29）。また、本書第Ⅳ部の古城論文では、玄室が方形に近い１号墳から玄室幅が狭い２・５号墳への変遷、また、玄室幅いっぱいの長さで前障のような閾石をもつ１・３・４号墳から玄門幅ほどに短くなった閾石をもつ２・５号墳への変遷が予想されるとし、１号墳→３・４号墳→２・５・６号墳という順序が示されている。これら石室構造から想定された築造順序と、先に検討した出土遺物の時期を比較すれば、１・３・６号墳については矛盾がないが、２号墳については須恵器の時期と齟齬をきたしていることがわかる。

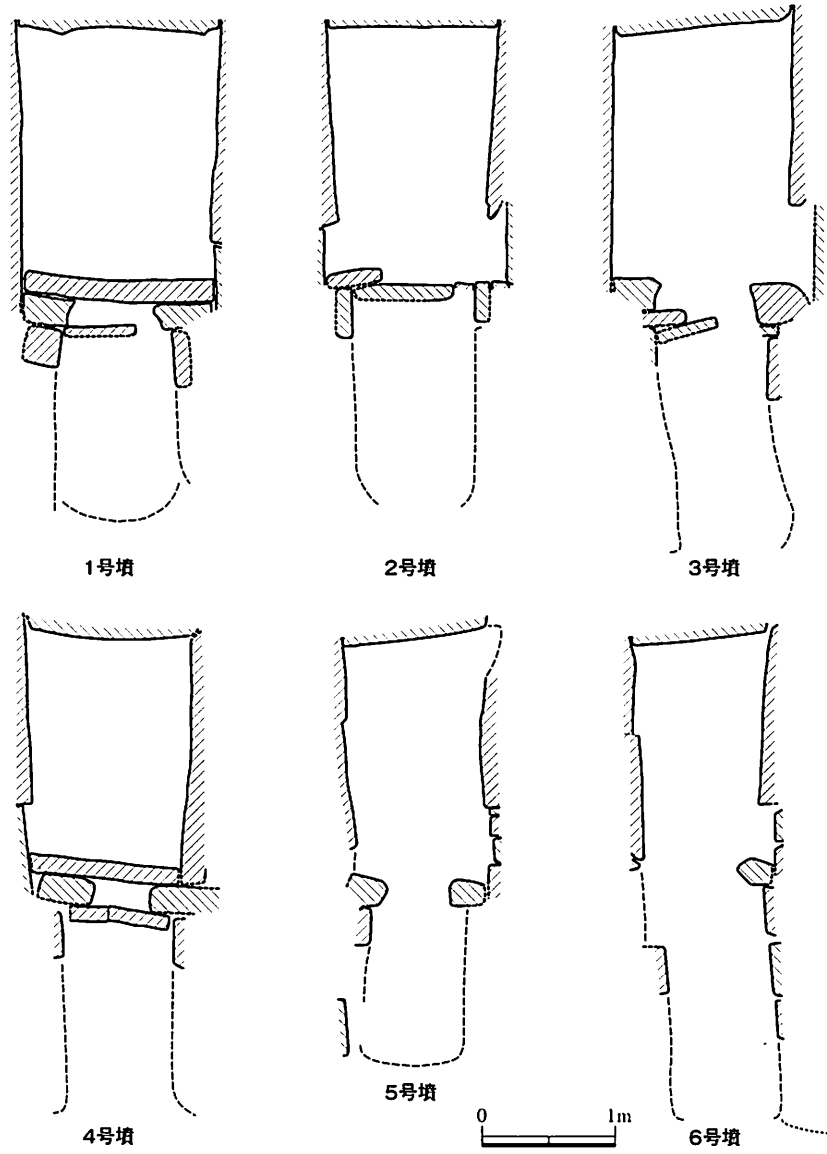


図55　略測による現状の石室平面プラン（2006年５月）

ところで、カミノハナ古墳群の石室は発掘調査終了後に埋め戻されていないため、現在でもかろう

じてその構造を観察することが可能である。今回の出土遺物再整理作業の実施にともなって幾度か現地を訪れたが、石室床面の平面プランに特徴的なところをみいだしたので簡単に触れておきたい。

図54は、1982報告で示された石室実測図（本書の図13～15）のなかから、床面の平面プランを表していると思われる線を抜き出したものである。しかし、十分に表現されていない箇所があるため、とてもわかりにくい図となった。そこで、現地を訪れた際、巻尺とコンベックスだけを使ったきわめて簡単な略測でしかないが、現状で地表に現れている床面の平面プラン図を作成した（図55）。図版39～44をみてもわかるように、石室の床面は調査後に堆積した腐植土で相当程度埋没しているから、図55で示しているのは石室中位における輪郭にすぎない。したがって、この図をもとに細部の検討を行うことは不可能だが、石室構造の概略を理解することはできると思う。

さて、図55をみてわかるのは、玄室幅と羨道幅の関係、および袖の構築方法には何らかの相関関係があるのではないかということだ。

玄室幅と羨道幅が明確に異なり、しかも玄室幅の中央に羨道が取り付くのは1号墳のみである。3号墳あるいは4号墳もそれに近いが、3号墳では玄室右側壁、4号墳では玄室左側壁の袖石ぎわの石材を、玄室の矩形ラインから若干奥まった位置に配することで、袖を構築する空間を確保している。2号墳では、そうした造作が玄室の左右両側壁にみられる。そして、5・6号墳になると、玄室幅と羨道幅の差がほとんどなくなり、袖は石材を壁面から突出させて置くことで形成される。

つまり、当初は玄室幅と羨道幅を明確に違えて袖を構築していたのが、最後には玄室側壁と羨道側壁のラインが直線上にそろってしまい、その結果、玄室と羨道の境界に石材を突出させることで袖を形成するように変化したと思われるのである。片袖式や無袖式には決してならない点が九州の石室であると実感するのだが、こうした平面プランの変化の方向が正しいとすれば、古城論文で示された築造順序をあとづけたことになる。

本来ならば、再度発掘調査を実施し、確実な床面を検出したのちに検討すべきことであるが、現状の観察から考えたことを記した。やはりここでも問題となるのは、2号墳で検出された須恵器の位置付けである。また、2号墳のみで確実な鉄剣が検出されている点も、それを相対的に古く位置付けることの根拠となる。2・3・4号墳が尾根の頂部に並んで築造されていることを重視すれば、それらのあいだに大きな時期差を見積もることに問題があるのかもしれないが、今後も継続して検討していきたいと思う。（杉井）

4　今後に残された課題

今回、発掘調査の実施から25年以上が経過したカミノハナ古墳群の出土遺物を再整理し報告したのであるが、すべてを完全な形で示すことはできなかった。

もっとも大きな問題は、かつて報告された遺物をすべて確認できなかったことである。3号墳出土の勾玉などであるが、今後もその発見に努めたいと思う。それ以上に、遺物の保管状態を改善する努力が必要であることも実感している。

また、存在は確認したが、玉類については実測図を提示することができなかった。土師器については、あまりに細片のため報告することすらできなかった。1号墳出土の鉄斧は、銹化が著しく進行していたため手をつけることができなかった。これら未報告のものを今後どのようにすべきであるのか、悩ましいところである。

急がれるべきであると思うのは、鉄製品の保存処理である。本書で示した成果をもとに、その実現

の可能性を探りたいと考えている。

遺物そのものにかんすること以外で重要なのは、それらの石室内での出土状況を検討することである。1982報告では出土状況図が示されていないが、かつての実測図を整理しているなかで、完全なものではないが遺物の出土状況図が作成されていることを確認している。今回、それと実際の遺物との対照を試みたのだが、その作業はきわめて困難なものであった。そのため、本書に出土状況図を提示することはできなかった。これについては何とかすべきであると自覚しているが、どのように作業を進めるべきであるのか、現在妙案がないというのが正直なところである。

以上の室内でできること以外では、やはり、横穴式石室の実測図を再度作成することが将来に残された大きな課題であると思う。それには再発掘調査を実施する必要があるから、実現するのは簡単なことではない。しかし、石室実測図の作成のみならず、墳丘構造や石室構築過程の解明も目的にすえた発掘調査を行うことができれば、天草諸島における古墳動向を考えるうえできわめて有益な情報を提供することは間違いない。

さらに、カミノハナ古墳群が所在する永浦島、そしてその周辺における古墳の分布調査も今後の大きな課題である。今回、地元の方の案内で永浦島の遺跡を見学したのだが、測量や実測が行われていない古墳や石室の存在をいくつか確認することができた。このような分布調査は、本来、地元の行政機関が行うべき基礎的作業であるが、今後も可能なかぎり協力していきたいと思う。

かつての調査資料を再整理するというのは、とても地味で、しかも苦労の多い仕事である。しかし、最新の視点で資料をながめれば新たな発見が必ずあるし、それによって将来を担う若い考古学徒が育ってくれるとすれば、それほどうれしいことはない。　（杉井）

引用・参考文献

阿部堅二・今井義量・山崎純男・西健一郎・松本健郎・三島　格　1977「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」『熊本史学』第50号　熊本史学会：pp. 19－40

一本尚之・髙濱美來編　2009「千崎古墳群第７次調査報告」『考古学研究室報告』第44集　熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1－28

大賀克彦　2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　清水町教育委員会：pp. 127－145

大賀克彦　2008「古墳時代後期における玉作の拡散」『古代文化研究』第16号　島根県古代文化センター：pp. 41－64

緒方雪絵　2002「弥生・古墳時代のガラス玉の基礎的研究－上総地域の例を中心に－」『土筆』第７号　土筆舎：pp. 443－462

小瀬康行　1987「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第73巻第２号　日本考古学会：pp. 83－95

角田政治　1918「三角町の古墳」『熊本縣史蹟調査報告』第壹回　熊本縣教育會史蹟調査部：pp. 21－23

神川めぐみ編　2006「広浦古墳測量・実測調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』２　上天草市：pp. 27－42

小林謙一　1974「甲冑製作技術の変遷と工人系統」『考古学研究』第20巻第４号　考古学研究会（引用は，1991年発行『論集武具』学生社：pp. 149－198より）

坂本経堯　1956「古代の天草－松島地区調査概報－」『熊本史学』第10号　熊本史学会：pp. 25－31

坂本経堯　1957「天草の古墳」『天草新聞』（号数未確認）　天草新聞社

坂本経堯・坂本経昌　1971「古代の天草」私家版

下林繁夫　1984「長砂連古墳調査報告」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集　熊本県教育委員会：pp. 141－143（初出は『天草維和村の考古学的調査の栞』熊本県立玉名高等学校考古学部，1955年）

杉井　健　2005「盛土上に基底石を置く横穴式石室の史的意義」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第３冊　大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団：pp. 371－389

杉井　健　2007「古墳時代の大矢野」『上天草いにしえの暮らしと古墳』上天草市史大矢野町編１　上天草市：pp. 123－345

杉井　健・檀　佳克編　2003「高熊２号墳測量調査報告」『考古学研究室報告』第38集　熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1－ 8

杉山秀宏　1998「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第８　吉川弘文館：pp. 529－644

鈴木一有　2003ａ「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集　帝京大学山梨文化財研究所：pp. 49－70

鈴木一有　2003ｂ「後期古墳に副葬される特殊鉄鏃の系譜」『研究紀要』第10号　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所：pp. 217－236

鈴木一有　2009予定「小札鋲留衝角付冑の変遷とその意義」『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告　国立歴史民俗博物館

髙木正文編　1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集　熊本県教育委員会

滝沢　誠　1986「甲冑類の編年的位置と古墳の年代」『武者塚古墳』新治村教育委員会：pp. 68－70

滝沢　誠　1991「鋲留短甲の編年」『考古学雑誌』第76巻第３号　日本考古学会：pp. 16－61

滝沢　誠　1994「甲冑出土古墳から見た古墳時代前・中期の軍事編成」『日本と世界の考古学』岩崎卓也先生退官記念論文集　雄山閣出版：pp. 198－215

滝沢　誠　2001「多田大塚古墳群出土の短甲をめぐって」『静岡県の前方後円墳－個別報告編－』静岡県文化財報告書第55集　静岡県教育委員会：pp. 61－67

滝沢　誠　2008『古墳時代中期における短甲の同工品に関する基礎的研究』静岡大学人文学部

田中新史　1975「五世紀における短甲出土古墳の一様相－房総出土の短甲とその古墳を中心として－」『史館』第５号　史館同人（引用は，1991年発行『論集武具』学生社：pp. 270－300より）

田辺哲夫　1955ａ「玉名高等学校考古学部の天草郡維和古墳群調査結果について」熊本県立玉名高等学校

田辺哲夫　1955 b『天草郡大矢野町維和古墳群調査概要』熊本県立玉名高等学校
谷口義介　1990「天草における横穴式石室墳の展開－有明町竹島３・４号墳を中心に－」『総合研究　天草』Ⅱ部　熊本商科大学産業経営研究所研究叢書17　熊本商科大学産業経営研究所：pp. 63－87
中橋孝博　2006 a「熊本県上天草市維和島・千崎古墳群出土の古墳時代人骨」『上天草市史大矢野町編資料集』2　上天草市：pp. 85－93
中橋孝博　2006 b「熊本県上天草市維和島・桐ノ木尾ばね古墳出土の古墳時代人骨」『上天草市史大矢野町編資料集』2　上天草市：pp. 94－97
橋本達也　2002「九州における古墳時代甲冑－総論にかえて－」『考古学ジャーナル』№496　ニュー・サイエンス社：pp. 4－7
濱田耕作　1919「肥後國天草郡維和村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告第３冊　京都帝國大學：pp. 14－21
濱田耕作・梅原末治　1917「八代附近の遺跡」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古學研究報告第１冊　京都帝國大學：pp. 36－47
比佐陽一郎　2003「福岡市内出土の錫製品について」『福岡市埋蔵文化財センター年報』第21号　福岡市教育委員会：pp. 19－24
比佐陽一郎　2004「錫、鉛製耳環に関する基礎的検討－福岡市内の出土例を中心として－」『古文化談叢』第50集下　九州古文化研究会：pp. 83－102
比佐陽一郎・片多雅樹　2003「古墳時代の錫・鉛製耳環について－福岡平野出土の資料を中心として－」『文化財保存修復学会第25回大会研究発表要旨集』文化財保存修復学会：pp. 158－159
福島雅儀　2006「古墳時代ガラス玉の製作技法とその痕跡」『考古学と自然科学』第54号　日本文化財科学会：pp. 53－68
古谷　毅　1988「京都府久津川車塚古墳出土の甲冑－いわゆる”一枚鍬”の提起する問題－」『ＭＵＳＥＵＭ』№445　ミュージアム出版：pp. 4－17
古谷　毅　1996「古墳時代甲冑研究の方法と課題」『考古学雑誌』第81巻第４号　日本考古学会：pp. 58－85
本田次郎　1935『天草の史蹟』第壹輯　みくに社
前田真由子編　2006「千崎古墳群第４次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』2　上天草市：pp. 1－26
松木武彦　2004「戦闘用鏃と狩猟用鏃－打製石鏃大形化の再検討」『古代武器研究』第５号　古代武器研究会：pp. 29－35
水野俊典　1995「東日本における古墳時代鉄鏃の地域性」『古代探叢』Ⅳ　滝口宏先生追悼考古学論集　早稲田大学出版部：pp. 423－441
水野俊典　2003「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第14　八木書店：pp. 255－276
三山　茂・林田奈生子・米倉秀紀　1985「鬼塚古墳」『宇土半島古墳群分布調査報告（郡浦・戸馳西地区）』三角町文化財調査報告第４集　三角町教育委員会：pp. 21－27
南健太郎編　2005「長砂連古墳石障実測調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』1　上天草市：pp. 39－50
南健太郎編　2009「桐ノ木尾ばね古墳測量調査報告」『考古学研究室報告』第44集　熊本大学文学部考古学研究室：pp. 29－38
宮本千絵編　1981『カミノハナ古墳群』研究室活動報告11　熊本大学文学部考古学研究室
三好栄太郎編　2007「桐ノ木尾ばね古墳実測調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』3　上天草市：pp. 37－54
三好栄太郎・仙波靖子編　2007「千崎古墳群第５次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』3　上天草市：pp. 1－36
元田重雄編　1926『天草案内』うしほ會
森幸一郎編　2005「千崎古墳群第２次・第３次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』1　上天草市：pp. 1－38
山野ケン陽次郎・有馬絢子編　2008「千崎古墳群第６次調査報告」『考古学研究室報告』第43集　熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1－36

吉永　明編　2004『熊本県指定史跡田川内第１号墳石室修理報告書』八代市文化財調査報告書第24集　八代市教育委員会

吉村和昭　1988「短甲系譜試論－鋲留技法導入以後を中心として－」『考古学論攷』第13冊　奈良県立橿原考古学研究所：pp. 23－39

米倉秀紀編　1982『カミノハナ古墳群』２　研究室活動報告14　熊本大学文学部考古学研究室

米村　大・杉井涼子編　2006『豊岡宮本横穴群』合志町文化財調査報告第２集　合志町教育委員会

挿図・表出典

図６：山野・有馬編2008の第１図

図７：坂本経堯・経昌1971の第64図

図10：米倉編1982の第14図

図13～15：米倉編1982の第15～20図

図16：米倉編1982の第９図

表１～３：山野・有馬編2008の第１～３表